平成17年度
ボランティア事業評価
報告書

平成18年4月

青年海外協力隊事務局

序　文

独立行政法人国際協力機構（以下「JICA」という）は、現地の人々と共に活動し、開発途上国の草の根のニーズに応える国民参加型事業として、昨年 40 周年を迎えた青年海外協力隊をはじめとするボランティア事業を実施しております。

JICA では平成 15 年の独立行政法人化を踏まえ、ボランティア事業を体系的に評価するため、事業の性格や特徴に合った評価手法を検討し、事業評価を導入する取り組みを行ってきました。その結果、「開発途上国･地域の経済及び社会の発展又は復興への寄与」、「開発途上国･地域とわが国との間の友好親善及び相互理解の深化、「ボランティア経験の社会への還元」という 3 つの視点から事業を評価することとし、平成 16 年度末から本格的に事業評価を実施いたしました。

本報告書は、平成 16 年度末から 17 年度にかけて、ボランティア受入国関係者を含む様々な評価者に対して実施した評価調査結果をとりまとめたものです。平成 18 年度末には教訓や提言も含めて総合的に分析した報告書を作成する予定であることから、本報告書ではこれまでの集計結果を中間報告の形でとりまとめました。

JICA が実施する事業自体に対する評価は今回が初めての試みであり、評価手法については今後さらに検討を重ねる必要もあるかと思いますが、本報告書により、一人でも多くの方がボランティア事業に対する理解と認識を深めていただければ幸いです。

終わりに、本評価調査にご協力いただいた関係者の皆様に対し、心より感謝申し上げます。

平成 18 年 4 月
独立行政法人 国際協力機構
青年海外協力隊事務局
局長　大塚　正明

目　次

◎ 評価結果概要・・・

◎ 各評価調査の詳細結果

●ボランティアへのアンケート調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

概要編・・・

詳細編・・・

●受入機関へのアンケート調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

概要編・・・

詳細編・・・

●受益者へのアンケート調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

概要編・・・

詳細編・・・

☆参考　　3アンケート調査結果に共通する質問からの考察・・・・

●本邦におけるボランティア関係者へのアンケート調査結果・・・・

概要編・・・

詳細編・・・

●帰国ボランティアへのアンケート調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

概要編・・・

詳細編・・・

評価結果概要

１　評価の視点

（１）視点Ⅰ：**開発途上国･地域の経済及び社会の発展又は復興への寄与**

　ボランティアの派遣は受入国のニーズに合致していたのか、また派遣による効果やそのインパクトはどのようであったかという視点

（２）視点Ⅱ：**開発途上国･地域と我が国との間の友好親善及び相互理解の深化**

　受入国側（主に配属先及び活動地域の住民）がボランティアを通じていかに日本について理解を深めたのか、また日本側（ボランティア自身及びボランティアからの情報受信者）がいかに受入国について理解を深めたのかという視点

（３）視点Ⅲ：**ボランティア経験の社会への還元**

　帰国したボランティアがどのように自身の変化を認め、その経験をどのように社会へ還元したのかという視点

２　評価対象者

（１）青年海外協力隊員（以下「隊員」という。）

（２）シニア海外ボランティア（ただし平成 17 年度春募集以降新規に派遣される者から評価の対象とする。平成 17 年度は評価対象者なし。）

３　評価者（下線は 17 年度に実施したもの、太字は 18 年度に実施するもの。）

（１）**援助受入窓口機関担当者**（ボランティア受入国において窓口になっている省庁の担当者）

　18 年度に実施する。

（２）**<u>ボランティア自身</u>**（帰国直前のボランティア）

　17 年度においては、主に 14 年度 3 次隊、15 年度 1 次隊及び 15 年度 2 次隊隊員のうち、17 年 3 月～18 年 1 月の間に回答を得た 572 名を集計の対象として評価を行った。18 年度も引き続き実施する。

（３）**<u>受入機関</u>**（主にボランティアの同僚・上司）

　17 年度においては、主に 14 年度 3 次隊、15 年度 1 次隊及び 15 年度 2 次隊隊員の受入機関関係者のうち、17 年 3 月～18 年 1 月の間に回答を得た 601 名を集計の対象として評価を行った。18 年度も引き続き実施する。

（４）**<u>受益者</u>**（ボランティアの活動により間接的に利益を享受する者。村落開発普及員の場合には地域住民、教員の場合には学生等）

17 年度においては、主に 14 年度 3 次隊、15 年度 1 次隊及び 15 年度 2 次隊隊員の受益者のうち、17 年 3 月～18 年 1 月の間に回答を得た 807 名を集計の対象として評価を行った。18 年度も引き続き実施する。

（５）ボランティアの本邦留守家族及び本邦所属先関係者

調査時点（17 年 7 月）を起点に派遣後 1 年程度を経過した隊員（主に 15 年度 2 次隊、3 次隊及び 16 年度 1 次隊）の留守家族及び本邦所属先関係者のうち、回答を得た 631 名を集計の対象として評価を行った。

（６）**帰国ボランティア**（帰国 2 年後及び 5～7 年後の元ボランティア）

17 年度においては、15 年度（主に 12 年度 3 次隊～13 年度 2 次隊）及び 10～12 年度に帰国した隊員（主に 7 年度 3 次隊～10 年度 2 次隊）のうち、回答を得た 1,314 名（15 年度 397 名及び 10～12 年度 917 名）を集計の対象として評価を行った。18 年度も引き続き実施する。

（７）**一般市民**（アットランダムに抽出した 2,000 名程度の日本国民）

18 年度に実施する。

４　評価結果

視点	評価項目	評価結果
１　経済・社会の発展・復興への寄与	ニーズへの対応	（18 年度に実施。）
	協力の成果	・ 受入機関による達成度の評価は総じて高い（全体の 78%の受入機関が 8 割以上の達成度を認めている。）。 ・ 地域住民や学生等の受益者の満足度も非常に高い（96%の受益者が満足と回答。）。 ・ ボランティア自身による達成度の自己評価は受入機関ほど高くない（8 割以上の達成度を認めているボランティアは 42%。）が、参加した満足度は高い（JICA が行った別の評価結果によれば帰国隊員の 90%が満足と回答。）。 ・ 活動の成功の鍵として挙げられたのは、受入機関、受益者、ボランティアすべての回答において「良好な人間関係」、「現地の文化･習慣への適応」が最多。 ・ 31%の受入機関及び 18%のボランティアから派遣期間が短いと指摘されている。 ・ 活動のインパクトとしては、受入機関、受益者、ボランティアすべての回答において、技術の向上よりも、仕事への姿勢や取り組み方が関係者へ伝わったことに対する評価が最も高い。

2　友好親善・相互理解の深化	相手国側の日本に関する理解の促進	・　受入機関、受益者とも、ボランティアの帰任時に日本や日本人に対して非常にポジティブな印象を持つに至った者は、赴任前と比べて 2 倍以上高くなっている。 ・　最も理解が深まったこととしては、多い順に、「日本人の仕事に対する姿勢や仕事の進め方」（受入機関の 85%及び受益者の 84%）、「日本人の生活･行動様式」（同 64%、61%）、「日本の技術や制度」（同 56%、49%）が挙げられている。
	日本側の相手国に関する理解の促進	・　ボランティアについては、自己評価では 95%が、また受入機関の 87%が理解を深めたと回答。 ・　文化や習慣の理解が深まったとの評価が高い反面、現地語の理解をさらに深めるべきとの指摘も見られる。
		・　留守家族や本邦所属先については、ボランティア派遣国についての理解が深まった（74%）のみならず、ボランティア活動自体に興味を持つようになった（83%）者も多い。
3　ボランティア経験の社会還元	ボランティア経験の社会還元	（一般市民へのアンケート調査については平成 18 年度に実施。） ・　ボランティアに参加したことにより自身の内面がポジティブに変化したと評価している者は多い。価値観（91%）、人間性（87%）、問題解決能力（80%）等。これに対して、ボランティアへの参加が自身の技術向上に役立った、キャリアアップに影響を与えたと感じている者は全体の 60%程度に過ぎない。ネガティブなインパクトとしては、「周囲の関係者の不理解・低評価による就職難」、「逆カルチャーショックによる疎外感」、「2 年間の不在による技術のブランク」等が挙げられている。 ・　帰国隊員に対する JICA の支援制度で最も利用され、かつ最も評価が高いのは進路相談カウンセラー制度。 ・　帰国後にボランティアがその経験や任国、国際協力について紹介活動を行った割合は回答者の 9 割弱に及ぶ。具体的な活動としては、募集説明会や国際協力出前講座等 JICA の制度を通じて実施した者が多いが、テレビやラジオに出演してボランティアの経験を紹介したり（回答者の約 10%）、執筆活動を行った者（回答者の約 14%）もいる。また回答者の約 24%が小・中・高等学校で講演している。
		・　帰国後に何らかの形で市民社会の活動に参加した者は回答者の約 6 割に及ぶ。そのうち NGO/NPO 活動に参加した者は回答者全体の 13%程度。 ・　国際機関に就いた者は回答者の 1%程度。

５　主なコメント

ボランティア	・ 日本の習慣や文化を写真で見せることにより、以前はただうらやましがるばかりであったのが、なぜ日本の収入水準は高く、生活レベルが高いのかを理解してもらえるようになった。 ・ 日本について何も知らなかった人々に、時間的感覚や約束を守ることの大切さを分かってもらえたと思う。 ・ TOYOTA、ソニー、金融といったテクノロジー的イメージしか持っていなかったが、日本の地理、自然、今抱えている社会問題などを多面的に理解するようになった。
受益者	・ 日本人は当国の女性に対して敬意がないと思っていたが、隊員に会い、その考えは変わった。 ・ 日本人の先生は人間味があり、良いところは、人を尊重する、時間を守る、遅れるときはその理由を説明してくれる、謝るといったことだ。先生対生徒という立場だけではなく、友人としてもつき合ってくれた。 ・ まさかこのような村に日本人が来てくれるとは思わなかった。彼が持っている良い部分のおかげでこの村を良くしてくれた。 ・ ボランティアの選考に当たってはプロか否かではなく、ボランティアが活動したい内容の妥当性により判断すべきである。
留守家族	・ 派遣国のみならず世界各地の社会、文化に興味を持つようになった。 ・ 今まで協力隊と言えば井戸掘り等の技術支援面ばかり思い描いていたが、現地の人々と共に考え生活し、心を通わせることでボランティア自身が成長させてもらっていると思った。 ・ ボランティアについて自分にできることを考えるようになった。できることがあればやってみたい。
帰国ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ	・ 国際協力やボランティア活動に参加したい気持ちはあるが、日々の生活に追われなかなかできないのが現状。 ・ 県や市の国際交流協会や教育委員会などともっと一緒に活動できれば良いと思うが、国際交流の考え方にズレがあり、積極的に取り組めず残念に思っている。 ・ キャリアへの影響はないが、自分自身にとって内面を豊かにし普通では体験できないことを学べた。 ・ 自分に活動をうまく説明するスキルが足りないため興味を持たせるに至らなかった。

以　上

ボランティアへのアンケート調査結果

（平成17年度実施）

１．調査目的

本調査は、評価の3つの視点のうち「途上国の経済及び社会の発展又は復興への寄与」（視点Ⅰ）及び「途上国と我が国との間の友好親善及び相互理解の深化」（視点Ⅱ）並びに「ボランティア経験の社会への還元」（視点Ⅲ）について、各ボランティアの活動による協力効果や日本と相手国相互の国際親善・交流がどのように達成されているか等を測るため、各ボランティアに対してアンケート調査を実施したものである。

１７年度においては、主に１４年度３次隊、１５年度１次隊及び１５年度２次隊隊員のうち、１７年３月から１８年１月までの期間に回答があった５７２名を集計の対象として結果を取りまとめた。

２．評価結果概況

調査結果の詳細はそれぞれ別添の通りであるが、各視点における全体的な概況は次の通りである。

（1）視点Ⅰ

ア　活動目標・計画の妥当性

ボランティアが活動の初期段階で受入機関と活動の目標について合意している割合としては、全体の６８％にとどまる結果であったが、ボランティアが作成した活動計画については、７４％が受入機関のニーズや期待に沿うものであったと回答しており、総体的には、おおむね目標や計画が妥当であることを示している。

ただし属性毎に見ていくと、土木建築、農林水産、加工の分野については活動目標について合意に至らなかった割合が相対的に高く、また、農林水産、加工については受入機関のニーズへの対応度も相対的に低くなっている。

イ　活動の有効性

（ア）　活動の目標を受入機関と合意した者のうち、６０％以上の達成度を認めているボランティアの割合は７９％（そのうち８０％以上としている割合は４２％）に上

っており、ボランティア自身も活動の達成度をおおむね高く評価していると言えよう。一方、活動の目標について合意はしなかったものの、活動の達成度を６０％以上と判断している者も59％に上るが、当初から活動目標を立て受入機関とその目標について合意した場合の方が、活動の達成度が高いことがうかがえる。

また、目標達成の鍵としてあげられているのは、「配属先（受入機関）や関係者との人間関係が非常に良かった」（53％）、「配属先（受入機関）が協力的であった」（52％）、「現地の文化・習慣に馴染むことが出来た」（51％）等、良好な人間関係や現地の文化習慣への適応に関する事由が多い。

（イ） ボランティアの派遣のタイミングについては、59％がタイムリーであったと回答しているものの、職種分野別に見ると、農林水産分野では半数以上が派遣時期のズレを指摘している。一方、派遣期間については、全体の75％が「適当だった」と回答しているが、「短い」と回答した者も18％を占めた。

ウ 活動のインパクト

ボランティアにとって活動のインパクトは、単に技術面のみならず、日本人の仕事に対する姿勢や取り組み方がスタッフへ伝わったことに対する評価が最も高い。

逆にマイナス面としては、「ボランティアへの依存が強くなった」、「援助への依存」等、受入機関の援助慣れを指摘しているボランティアが多い。

エ 活動の自立発展性

ボランティアが実施した活動や効果が、今後も継続されると回答している者は22％に過ぎず、全体の40％はボランティアと同じレベルのスタッフの配置や十分な予算が必要と指摘しており、自立発展性のむずかしさを感じている者が多い。

（2）視点Ⅱ

ア 日本及び日本人に対する理解度

（ア） 受入機関や受益者の日本及び日本人に対する理解は、ボランティアの派遣により深まったと感じているボランティアが多い（ボランティアの派遣により、日本及び日本人についてよく知っていると回答した者は、配属先（受入機関）の場合には2．2倍、地域住民（受益者）の場合には3．4倍高くなっている。）。

特筆すべき点として、地域住民（受益者）に関しては、ボランティアの派遣前は日本及び日本人について知らなかったとする者が20％を数えていたが、派遣後

は1％へ激減したことがあげられる。

（イ） 理解が深まった主な理由としては、ボランティア（日本人）自身の存在や日常の活動、生活を通しての日々の交流などが大半を占めている。なお、以下に認識の具体的変化の例や関連するエピソードを示す。（抜粋）。

- 「おしん」の世界が日本だと思われていたが、それは何十年も前の日本だということを分かってもらえた。
- TOYOTA、ソニー、金融といったテクノロジー的イメージしか持っていなかったが、日本の地理、自然、今抱えている社会問題などを多面的に理解するようになった。
- アジア＝中国といったイメージがあったが、日本という国がアジアに存在することを分かってもらえた。
- トイレに紙を置いてくれた。
- 新潟中越地震など、自分が知らない日本の事件などを心配してすぐに教えてくれるようになった。
- 日本に関するニュースに関心を持ち、私に伝えてくれるようになった。日本人に会うことを喜んでくれるようになった。
- 日本について何も知らなかった人々に、時間的感覚や約束を守ることの大切さを分かってもらえたと思う。
- 日本の習慣や文化を写真で見せることにより、以前はただうらやましがるばかりであったのが、なぜ日本の収入水準は高く、生活レベルが高いのかを理解してもらえるようになった。
- 日本人は全員空手を習っている、PCや時計を作っている、車が安い、犬や蛇を食べる、というイメージは相当なくなったが、まだ、そう信じている人も多い。
- 赴任当初、受入機関の人たちは「日本人は金持ちなので私たち貧乏人とは話をしてくれない」といっていたが、任期の終わり頃には「本当に仲良くしてくれてありがとう」と何度も言われた。

イ 任国及び任国の人々に対するボランティアの理解度

（ア） ボランティアが本来の活動以外で任国の人々と交流活動を行っているケースは、全体の90％に上っており、その主な内容としては、雑談レベルで日本のことを話す（76％）、ゲームや折り紙などを通じた日本文化紹介（74％）、日本語を教える（59％）といったものが多い。職種分野別では、スポーツ分野（70％）や教育文化分野（69％）のボランティアは交流活動を行っているものが特に多い。

任国及び任国の人々に対するボランティアの理解度については、95％の者が何らかの理解が深まったと認識しており、「理解は深まっていない」と回答した

者はわずか3名である。

ウ　ボランティアからの情報受信者の任国及び任国の人々に対する理解度

（ア）　ほとんどのボランティアは、任国や活動について情報を発信しているが、その発信先は友人（79％）や家族（75％）が圧倒的に多い。発信媒体については、電子メールやインターネットが半数以上を占めており、その内容については、任国の様子や活動の状況等が大半である。

（3）視点Ⅲ

ア　ボランティア経験の社会還元

（ア）　帰国直前のボランティアが帰国後にその経験を何らかの形で社会に役立てたいとする者は、全体の89％にも上り、その意識の高さを示している。ただし「役立てたいとは思わない」と回答した者の主な理由が、「その経験をどのように役立てていいのか分からない」であったことや、後述するJICAの支援においても求められているように、JICAから具体的な社会還元の方法をボランティアに示唆する必要性がうかがえる。

（イ）　どのような形で経験を役立てるかという点については、仕事の関係（66％）、経験談を伝える（60％）や国際交流活動（46％）等多岐にわたっており、特に突出した項目はなかった。

【JICA の支援体制】

（1）視点Ⅰ関連

ア　本邦における派遣前訓練や技術補完研修については評価が高い（「非常によい」、「よい」と回答した利用者の割合は、技術補完研修で85％、派遣前訓練（一般）で85％、派遣前訓練（語学）で96％）。

イ　現地（語学）訓練もおおむね評価は高いが、地域によってばらつきも見られ、アジア、中南米地域では比較的評価が低い。

ウ　現地における研修（在外技術補完研修、広域研修）を活用しているものは少ない（利用率約8％、15％）。

エ　在外事務所、青年海外協力隊事務局及び技術顧問の活動に対する支援についての評価はおおむねポジティブである（「非常によい」、「よい」と回答した利用者の割合は、それぞれ81％、75％、81％）。

オ　前任者又は後任者が派遣されている案件では、半数以上が引継ぎができなかったと回答している。

（2）視点Ⅱ関連

ア　ボランティアと任国の人々との相互理解に関し、在外事務所に対して何らかの支援を求めているボランティアは約半数であるが、交流活動に対する理解や活動経費に対する支援の必要性を感じているものが多い。

イ　ボランティアが本邦関係者に対し情報を発信することに、支援の必要性を感じている者の割合は低い（33％）。

（3）視点Ⅲ関連

ア　社会還元に関しては、全体の約半数のボランティアは JICA が何らかの支援を行う必要性を感じている。

イ　支援の内容としては機会についての情報提供や還元の手法が最も多かった。

以上

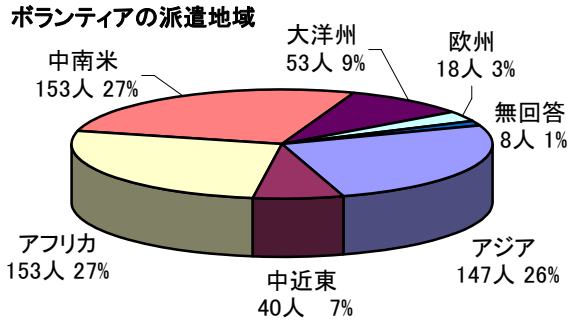
平成17年度　ボランティアアンケート調査結果

1.　アンケート実施概要

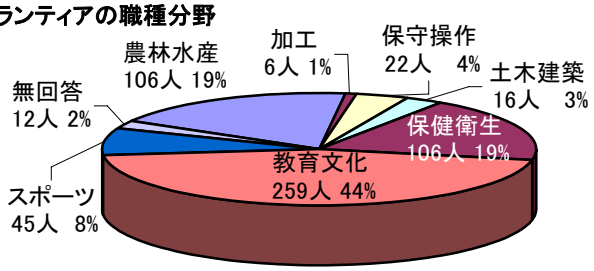
(1) 対象者　　:平成17年度に帰国したボランティア(主に14年度3次隊、15年度1次隊、2次隊隊員)
(2) 実施方法　:任期終了時に回答、及び回収
(3) 調査項目　:「ボランティアへのアンケート調査表」(別添)参照
(4) 回収数　　:572通(平成18年1月末日までに回答があったもの)

アンケート回答者の内訳

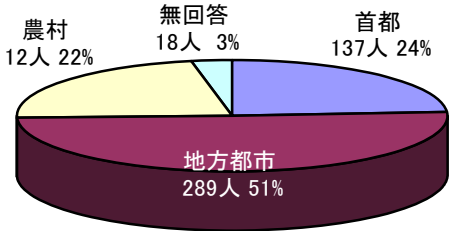
ボランティアの派遣地域



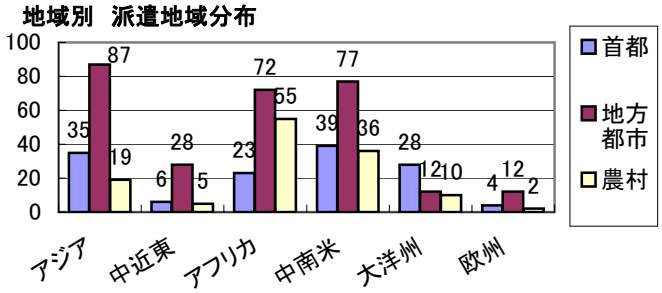
ボランティアの職種分野



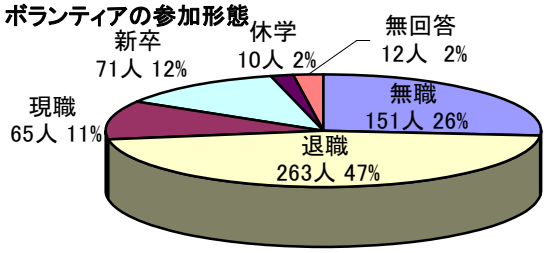
ボランティアの任国内での活動地域



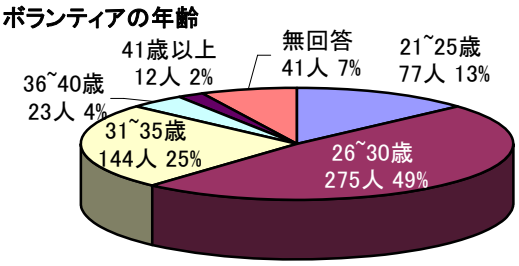
地域別　派遣地域分布



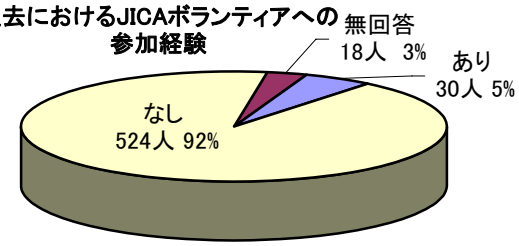
ボランティアの参加形態



ボランティアの年齢



過去におけるJICAボランティアへの参加経験



2. 調査結果

（※各質問に対する回答については「無回答」を含め100%として計算しているが、地域別・職種分野別等の抽出集計については「無回答」を除き100%として計算した。）

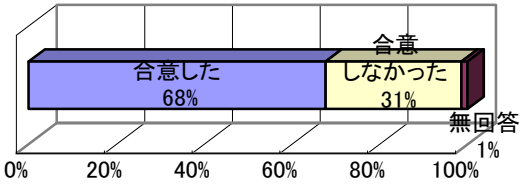
（※各質問の回答数、グラフ中の単位は人数）

《視点Ⅰ》開発途上国・地域の経済及び社会の発展又は復興への寄与

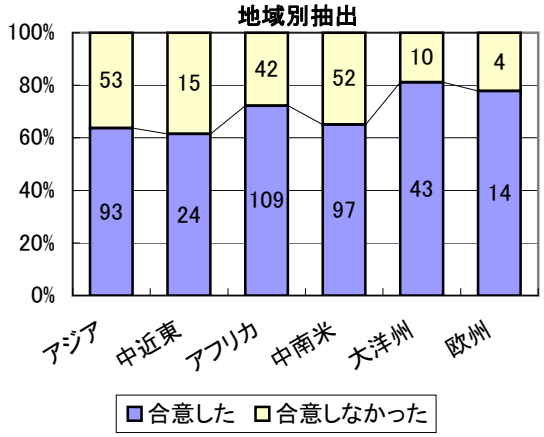
ボランティア活動を終えた時点での、あなたの配属先での活動に対する自己評価についてお伺いします。

Q1: 活動の初期段階で、配属先とあなたの活動の目標について合意しましたか。これまでの報告書に書いていただいていますが、再度確認します。

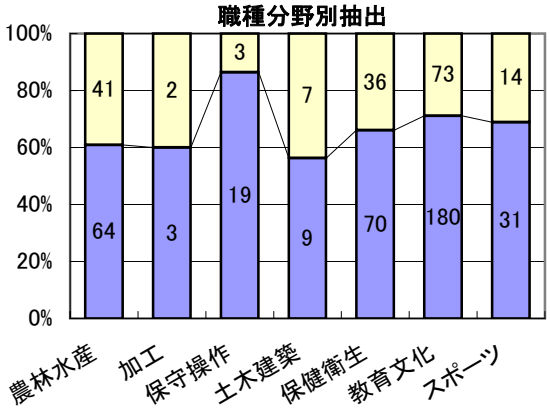
	回答数	
1. 合意した	386	68%
2. 合意しなかった	178	31%
無回答	8	1%
	572	100%



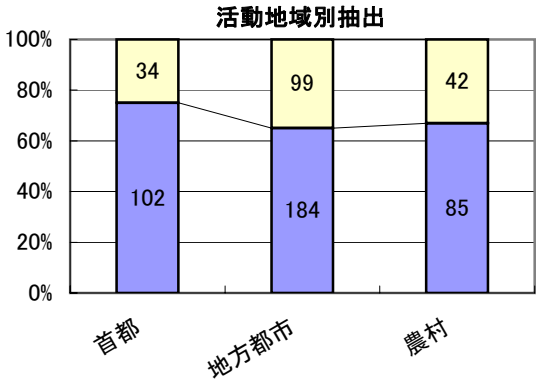
◆ 初期段階において、活動の目標について合意したボランティアは、68%（386人）である。



◆「大洋州」、「欧州」では、約80%が活動の目標について合意しており、他地域に比べ高い。



◆「保守操作」では、80%以上が活動の目標について合意している。



◆「首都」では、70%以上が活動の目標について合意している。

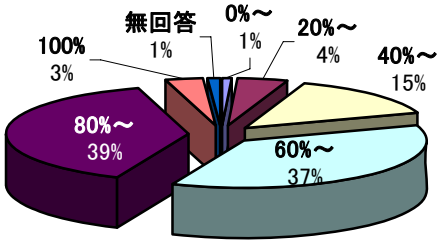
Q2 （Q1で1と回答した方に）あなたの活動の目標を書いて下さい。

◆ 記述形式。回答者数370人（回答者総数の65%。以下記述形式質問内の表示も同じ）。
◆ 「当該分野での専門的指導」が大半を占めるが、人材不足を補うための「マンパワー」との回答もあった。
◆ 語学を含む「相互の文化理解」や、「経験や指導の交流」も、目標として挙げている者もいる。

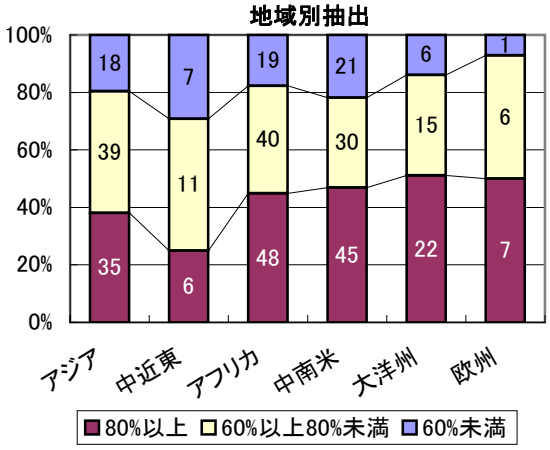
＜活動の有効性･達成度＞

Q3: （Q1で1と回答した方に）どの程度上記の目標は達成されたか、あてはまる箇所に○をつけて下さい。（6段階で）

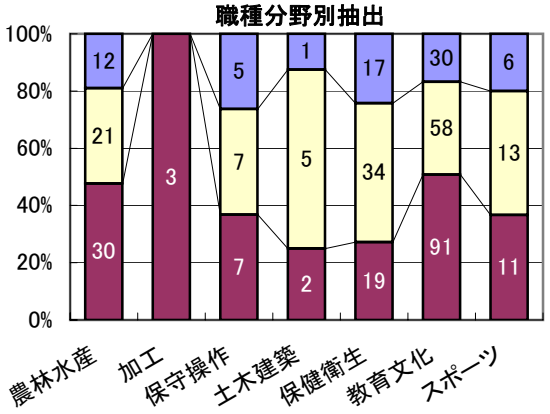
		回答数	
1.	0%～	3	1%
2.	20%～	17	4%
3.	40%～	56	15%
4.	60%～	142	37%
5.	80%～	151	39%
6.	100%	13	3%
	無回答	4	1%
		386	100%



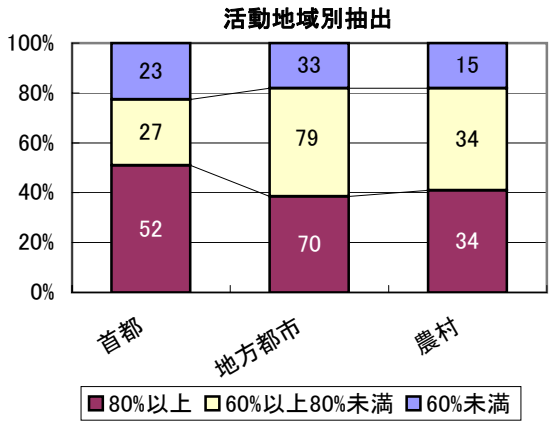
注 Q1で1（活動の目標について合意した）の回答者数386人（回答者総数の68%。以下注内表示も同じ）を100%とした。
◆ 初期段階で活動の目標に合意した約8割が、「60%以上」の達成度と自己評価している。また、「80%以上」の達成度との回答も4割以上に上る。



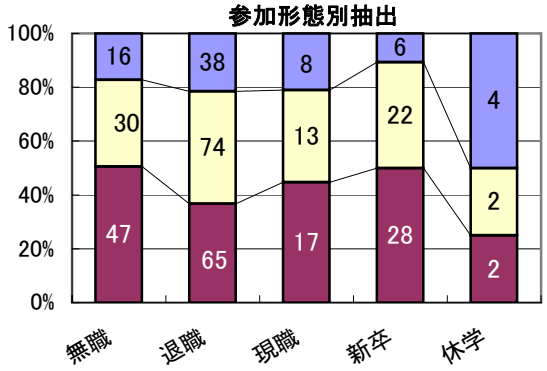
◆ 「欧州」では、「60%以上」の達成度が9割を超え、他地域に比べ高い。



◆ 「保守操作」、「保健衛生」では、「60%以上」の達成度が8割未満である。



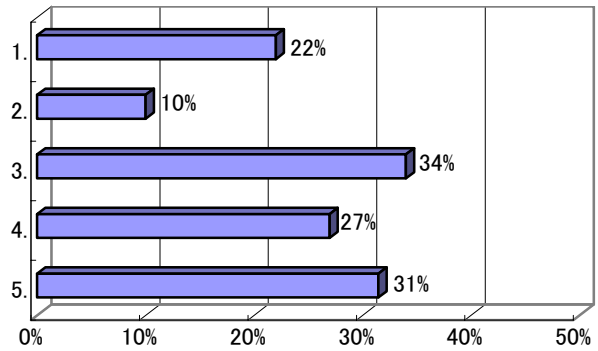
◆「首都」では、「80%以上」の達成度が5割を超えている。



◆「新卒参加」では、「60%以上」の達成度が約9割に達し、他に比べ高い。

Q4 （Q1で2と回答した方に）その理由は何ですか？（複数回答可）

	回答数	
1. 活動内容が配属先の期待･ニーズと違ったので合意できなかった	39	22%
2. 配属先が合意する意思をみせなかった	17	10%
3. 目標を立てにくい活動内容だったので、敢えて目標を立てなかった	60	34%
4. 配属先が協力的ではなかった	48	27%
5. その他	56	31%
	178	100%



注 Q1で2（活動の目標について合意しなかった）の回答者178人（32%）を100%とした。

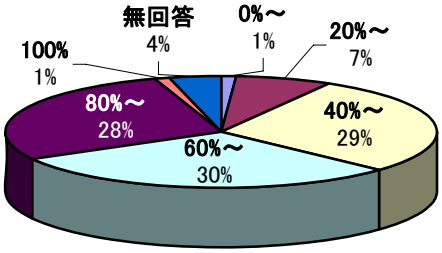
◆ 合意しなかった理由として、「目標を立てにくい内容だったので敢えて立てなかった」が34%（61人）で最も多く挙げられている。

◆ その他回答例

- 配属先に目標がなかった。活動の方向性が見えなかった
- 配属先から何のニーズもなく、何を目標にしたらよいかわからなかった
- 配属先が、協力隊が何か、なぜ派遣されたのか理解していなかった
- 配属先が、ボランティアに何をさせたらよいか、扱いに手をこまねいていた
- 要請内容が既に解決されていた。活動の必要性を見出せなかった

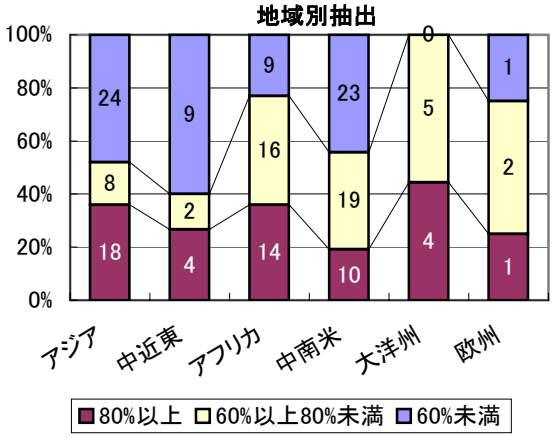
Q5 （Q1で2と回答した方に）自身の活動をふり返ってみて、どの程度活動がうまくいったのか、あてはまる箇所に○をつけて下さい。（6段階で）

		回答数	
1.	0%～	2	1%
2.	20%～	13	7%
3.	40%～	51	29%
4.	60%～	53	30%
5.	80%～	50	28%
6.	100%	2	1%
	無回答	7	4%
		178	100%



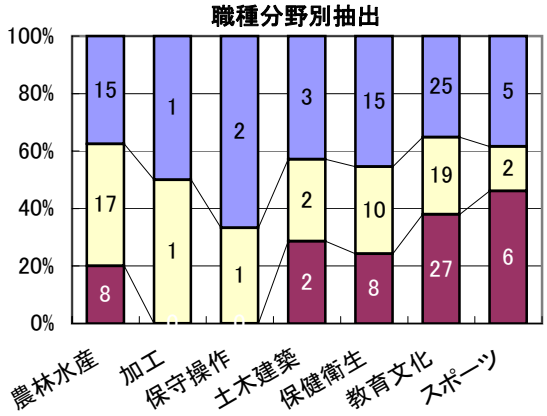
注 Q1で2（活動の目標について合意しなかった）の回答者178人（32%）を100%とした。

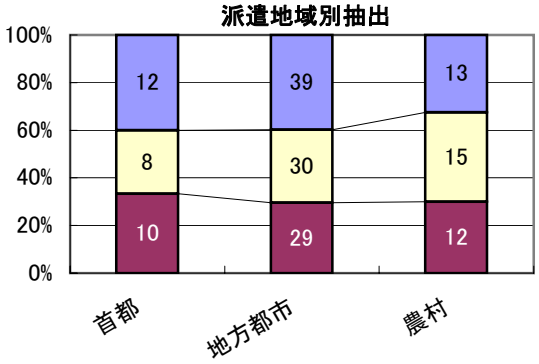
◆ Q3で60%未満との回答者は2割であるのに対し、本問では4割近くに上る。また、Q3で60%以上との回答者は8割近くに上るのに対し、本問では約6割にとどまっている。これらの数値から、「活動目標の合意（Q1）」が活動に及ぼす影響は大きいと言える。



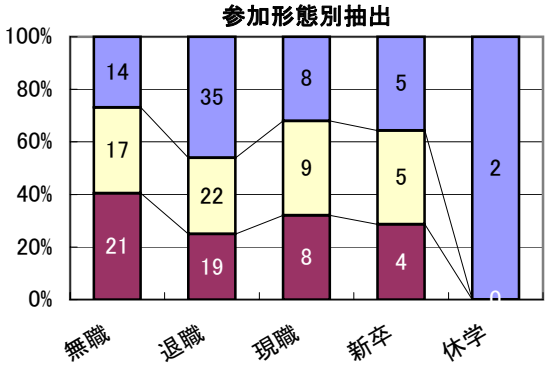
◆ 「アフリカ」、「大洋州」、「欧州」では、「60%以上」の達成度が6割を超えている。

◆ 一方、「中近東」では、「60%以上」の達成度が約4割と他地域に比べ低い。



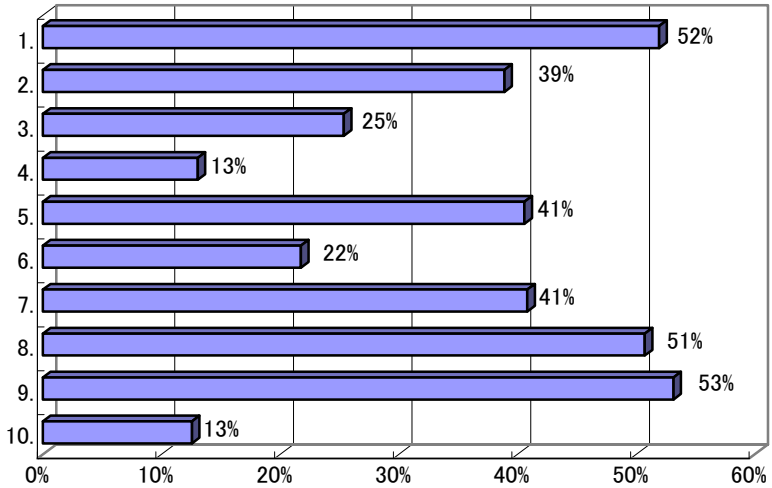


◆ どの派遣地域も「60%以上」の達成度が6～7割で、大きな差異は見られない。



Q6 （Q3もしくはQ5で達成状況が60～100%の方に）達成状況が60%以上になった理由は何ですか。（複数回答可）

	回答数	
1. 配属先が協力的だった	215	52%
2. 同僚（カウンターパート）が意欲的だった	161	39%
3. ボランティアが指導力・積極性を発揮できたから	105	25%
4. ボランティアが十分な技術を持っていたから	54	13%
5. 活動の内容が配属先のニーズと合っていた	168	41%
6. 活動の内容が配属先の内容と合っていなかったが、配属先と調整してニーズの合う活動ができたから	90	22%
7. 配属先との意思疎通やコミュニケーションがうまくできた	169	41%
8. 現地の文化・習慣に馴染むことができたから	210	51%
9. 配属先や関係者との人間関係が非常によかったから	220	53%
10. その他	52	13%
	414	100%



注 Q3もしくはQ5で達成状況が60～100%の回答者414人（72%）を100%とした。

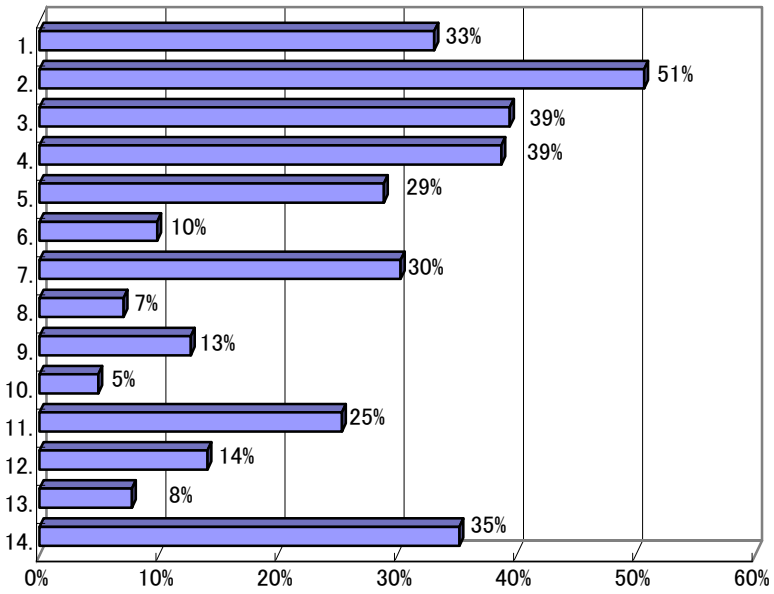
◆「配属先や関係者との人間関係が良かったから」（53%、220人）が最多。「配属先が協力的だった」（52%、215人）、「現地の文化・習慣に馴染むことができたから」(51%、210人）が続く。

◆ その他回答例

- 配属先以外の現地スタッフの理解・協力を得られた。各仕事に理解者を得られた
- 生徒や地域の人達が意欲的でやる気があった
- JICA、在外事務所のバックアップ。隊員間の協力
- ボランティア本人の努力。自分で配属先にとらわれず活動できた

Q7 （Q3もしくはQ5で達成状況が60%未満の方に）その理由は何ですか。（複数回答可）

	回答数	
1. 配属先が非協力的だった	47	33%
2. 同僚（カウンターパート）が意欲的でなかった	72	51%
3. ボランティア側の積極性が足りなかった	56	39%
4. 技術力が不足した	55	39%
5. 活動内容が配属先のニーズと合っていなかった	41	29%
6. 配属先が、ボランティアと専門家との違いを分かっていなかった	14	10%
7. 配属先との意思疎通やコミュニケーションがうまくできなかった	43	30%
8. 現地の文化・習慣に馴染むことができなかった	10	7%
9. 配属先や関係者との人間関係がよくなかった	18	13%
10. 体調を崩してしまった	7	5%
11. 技術移転の対象者がいなかった	36	25%
12. 活動に不可欠なものがなかった、調達できなかった	20	14%
13. 派遣期間中に配属先や活動地域が変更になった	11	8%
14. その他	50	35%
	142	100%



注 Q3もしくはQ5で達成状況が60%未満の回答者142人（25%）を100%とした。

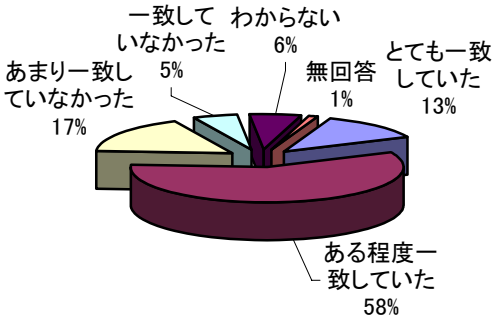
◆「同僚（カウンターパート）が意欲的でなかった」が最多（51%、71人）。「ボランティア側の積極性が足りなかった」（39%、56人）、「技術力が不足した」（39%、55人）が続く。

◆ その他回答例

- 配属先の人事が不安定だった。転勤が多く、個人に対する時間が不十分であった
- カウンターパートがいなかった
- 配属先の予算、教材の不足
- インフラ・予算の問題。機械の故障
- 配属先が協力隊について理解していなかった
- 関係機関の協力が得られなかった。対象地域・目標が大きすぎた
- 何が必要かわかっていても自らそれをやろうとはしない。現地人の気質は障壁であった
- 住民に生活を変えようとする意欲がなかった
- 文化的にのんびりで、全てにおいて効率的でなかった
- 目標に合意はしても、配属先は、実際は現状の変化を望んでいなかった
- ボランティアの専門性とニーズの不一致
- 要請理由が最後まで理解できなかった

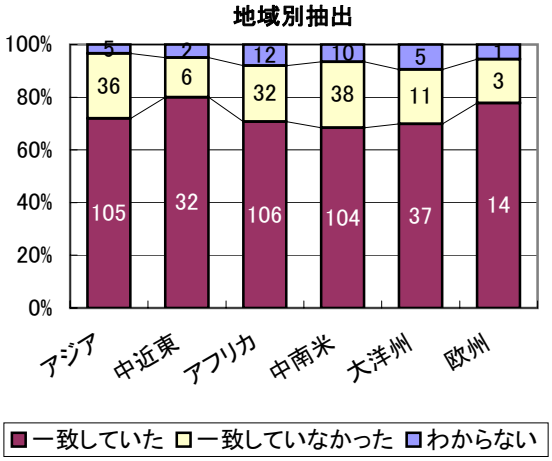
Q8 ボランティア活動が終了した現在、ふり返ってみて、あなたのバックグラウンドは、配属先や同僚が求める技術や期待していた活動内容と一致していましたか。

	回答数	
4. とても一致していた	72	13%
3. ある程度一致していた	332	58%
2. あまり一致していなかった	96	17%
1. 一致していなかった	31	5%
0. わからない	35	6%
無回答	6	1%
	572	100%

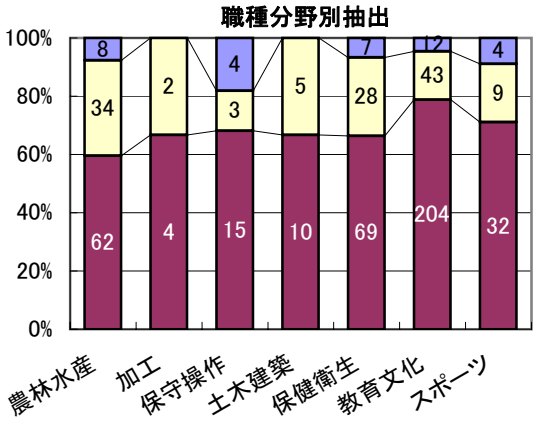


◆「とても一致していた」、「ある程度一致していた」を合わせると71%（404人）に上る。

注 下記抽出では、「とても一致していた」「ある程度一致していた」➡**「一致していた」**
「あまり一致していなかった」「一致していなかった」➡**「一致していなかった」**とした。



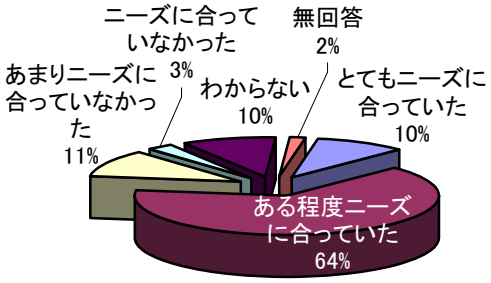
◆「中近東」では、「一致していた」が80%に上り、他地域に比べ高い。
◆「アジア」、「中南米」では、「一致していなかった」が25%を示し、他地域に比べ若干高い。



◆「教育文化」では、「一致していた」が約80%に上り、他職種分野に比べ高い。
◆「農林水産」、「加工」、「土木建築」では、「一致していなかった」が33%を示し他職種分野に比べ高い。

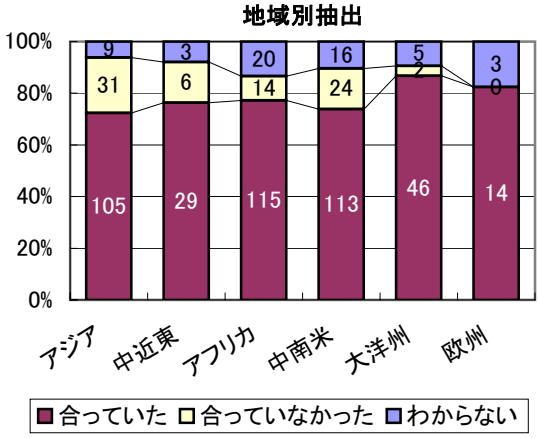
Q9 ボランティア活動が終了した現在、ふり返ってみて、あなたが作成した活動計画は、配属先のニーズや期待に合っていましたか。

	回答数	
4. とてもニーズに合っていた	56	10%
3. ある程度ニーズに合っていた	370	64%
2. あまりニーズに合っていなかった	63	11%
1. ニーズに合っていなかった	16	3%
0. わからない	57	10%
無回答	10	2%
	572	100%

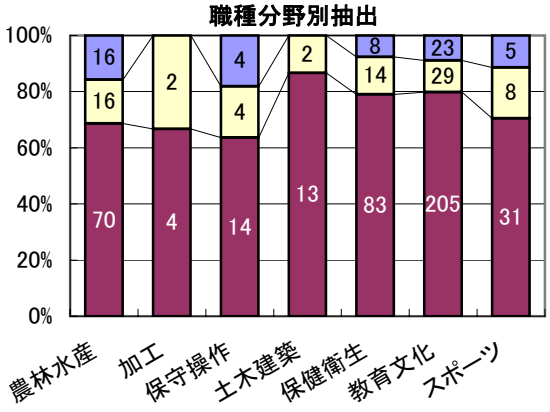


◆「とてもニーズに合っていた」、「ある程度ニーズに合っていた」を合わせると74%（426人）に上る。
◆ Q8、Q9は類似した結果となった。

注 下記抽出では「とてもニーズに合っていた」「ある程度ニーズに合っていた」➡**「合っていた」**
「あまりニーズに合っていなかった」「合っていなかった」➡**「合っていなかった」**とした。



◆「大洋州」では、「合っていた」が87%と他地域に比べ高い。
◆ 一方、「アジア」（21%）では、「合っていなかった」が他地域に比べ高い。



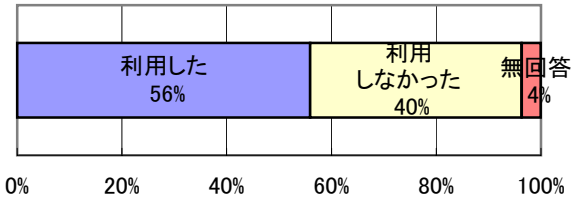
◆「土木建築」、「保健衛生」、「教育文化」では、「合っていた」が約80%に達している。

Q10 JICAの支援体制は、あなたのボランティア活動の目標を達成するため、あるいは活動を効果的に行うために、役立ちましたか。それぞれの項目について、最も当てはまるものに○をつけて下さい。

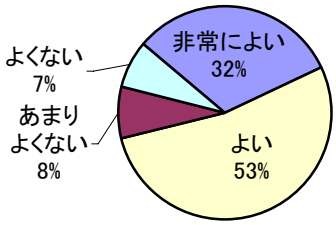
（※本問中の◆内の数字は、利用者のみ抽出した場合の評価によるもの。）

① 技術補完研修

利用の有無



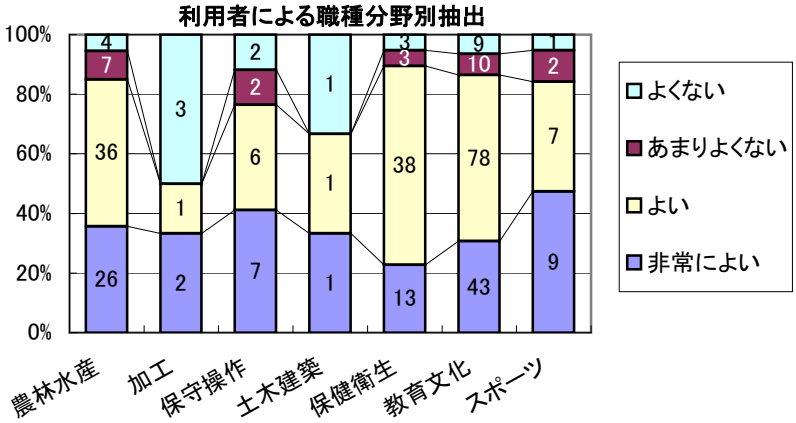
利用者のみ抽出した場合の評価



	回答数	
4. 非常によい	102	18%
3. よい	170	30%
2. あまりよくない	25	4%
1. よくない	23	4%
0. 利用しなかった	231	40%
無回答	21	4%
	572	100%

◆ 利用者は全体の6割弱。
その85%が「非常によい」、「よい」と回答している。

利用者による職種分野別抽出

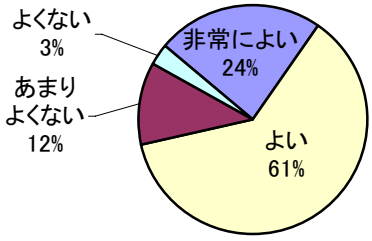


◆ 特に「保健衛生」は、「非常によい」、「よい」が約90%に上り高評価である。

② 派遣前訓練/研修（語学訓練/研修以外）

4. 非常によい	118	21%
3. よい	307	53%
2. あまりよくない	59	10%
1. よくない	15	3%
0. 利用しなかった	50	9%
無回答	23	4%
	572	100%

利用者のみ抽出した場合の評価

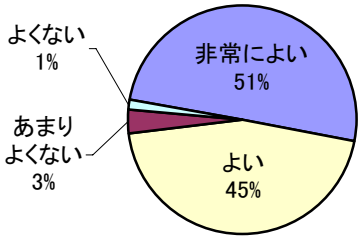


◆「非常によい」、「よい」は合わせると85%（425人）に上る。

③ 語学訓練/研修

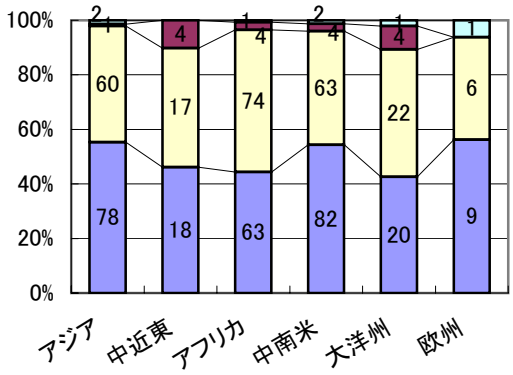
	回答数	
4. 非常によい	273	49%
3. よい	246	43%
2. あまりよくない	17	3%
1. よくない	8	1%
0. 利用しなかった	8	1%
無回答	20	3%
	572	100%

利用者のみ抽出した場合の評価

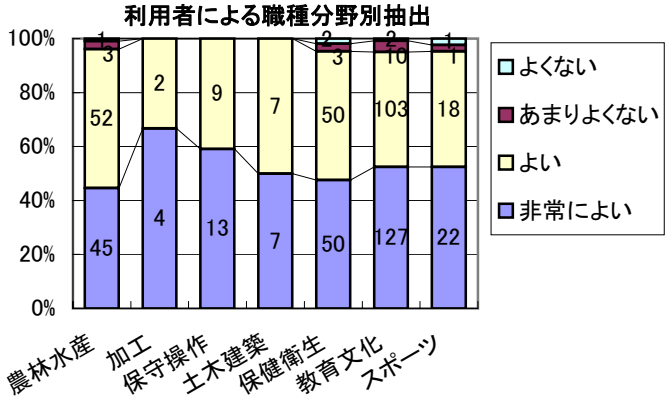


◆「非常によい」、「よい」を合わせると96%(519人)に上り、高い評価を得ていると言える。

利用者による地域別抽出



利用者による職種分野別抽出

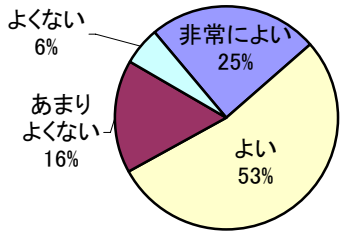


◆ 両抽出とも、大きな差異は見られない。

④ 現地(語学)訓練/研修

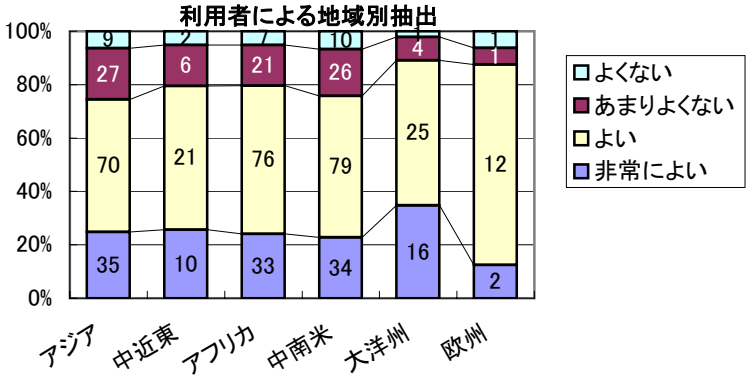
4. 非常によい	133	23%
3. よい	285	50%
2. あまりよくない	87	15%
1. よくない	30	5%
0. 利用しなかった	15	3%
無回答	22	4%
	572	100%

利用者のみ抽出した場合の評価



◆「あまりよくない」、「よくない」を合わせると22%(117人)と全体の1/5に及び、他の研修に比べると低い評価となっている。

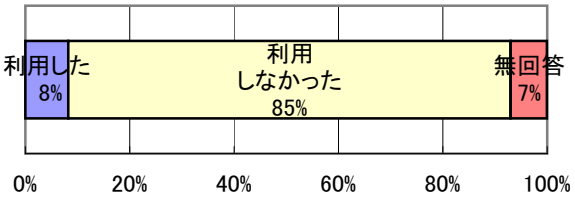
利用者による地域別抽出



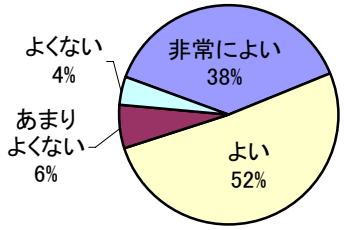
◆「アジア」、「中近東」、「アフリカ」、「中南米」は、「あまりよくない」、「よくない」を合わせると20%を超える。

⑤ 在外技術補完研修

利用の有無



利用者のみ抽出した場合の評価

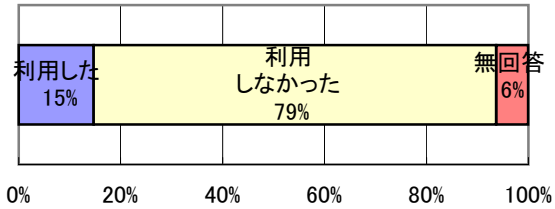


	回答数	
4. 非常によい	18	3%
3. よい	24	4%
2. あまりよくない	3	1%
1. よくない	2	0%
0. 利用しなかった	485	85%
無回答	40	7%
	572	100%

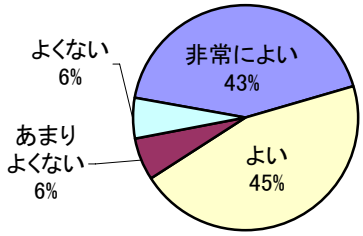
◆ 利用者は8%(45人)。
その90%が「非常によい」、「よい」と回答している。

⑥ 広域研修

利用の有無



利用者のみ抽出した場合の評価



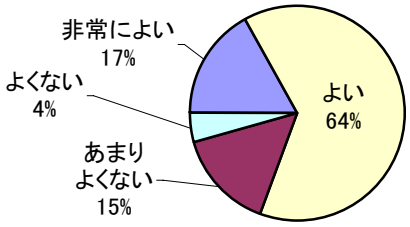
4. 非常によい	36	6%
3. よい	38	7%
2. あまりよくない	5	1%
1. よくない	5	1%
0. 利用しなかった	452	79%
無回答	36	6%
	572	100%

◆ 利用者は15%(84人)。
その88%が「非常によい」、「よい」と回答している。

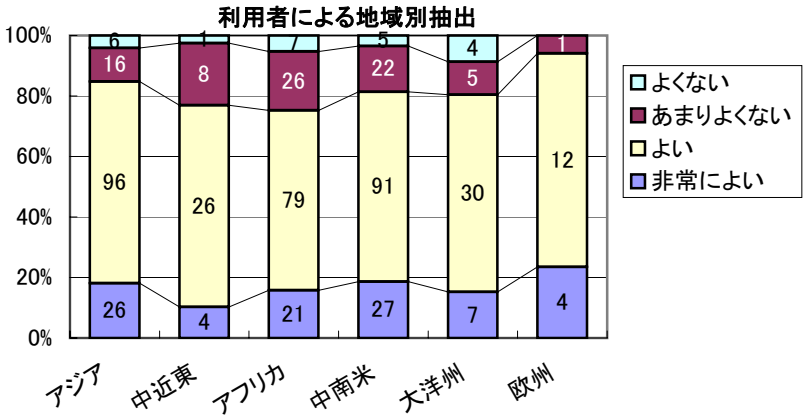
⑦ 活動中の在外事務所の対応

4. 非常によい	90	16%
3. よい	338	59%
2. あまりよくない	80	14%
1. よくない	23	4%
0. 利用しなかった	25	4%
無回答	16	3%
	572	100%

利用者のみ抽出した場合の評価



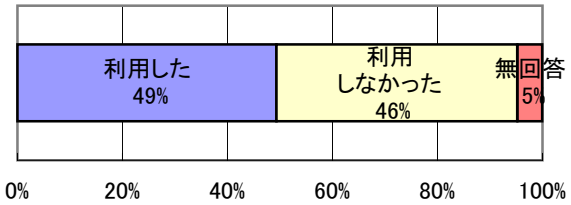
◆「非常によい」、「よい」を合わせると81%(428人)に上る。



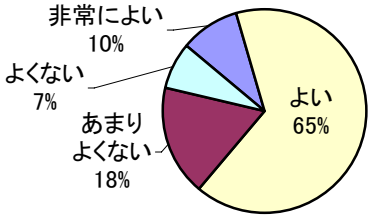
◆「中近東」、「アフリカ」では、「よくない」、「あまりよくない」を合わせると20%を超えている。

⑧ 運営や技術支援に対するJICA本部の対応

利用の有無



利用者のみ抽出した場合の評価

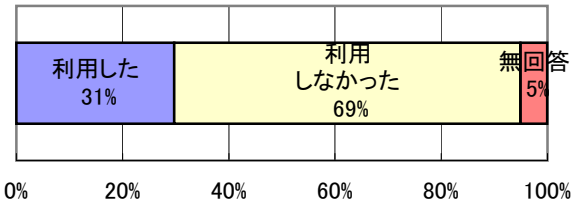


	回答数	
4. 非常によい	27	5%
3. よい	186	32%
2. あまりよくない	50	9%
1. よくない	21	4%
0. 利用しなかった	261	45%
無回答	27	5%
	572	100%

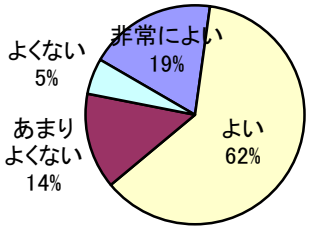
◆ 利用者は50%(284人)。
その75%(213人)が「非常によい」、「よい」と回答している。

⑨ 運営や技術支援に対する技術顧問の対応

利用の有無

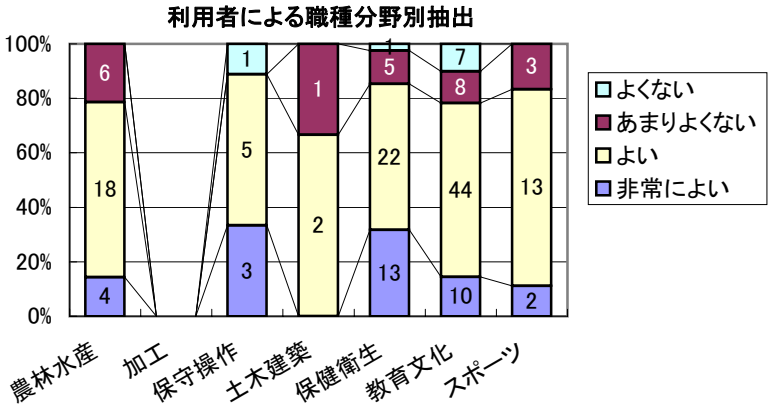


利用者のみ抽出した場合の評価



	回答数	
4. 非常によい	32	6%
3. よい	105	18%
2. あまりよくない	24	4%
1. よくない	9	2%
0. 利用しなかった	373	65%
無回答	29	5%
	572	100%

◆ 利用者は全体の30%(170人)。
その81%が「非常によい」、「よい」と回答している。



◆「農林水産」、「土木建築」、「教育文化」では、「非常によい」、「よい」を合わせても80%未満である。

⑩ その他

評価 / 挙げられた項目	非常によい	よい	あまりよくない	よくない	計
▹健康管理、その対応	2		1	1	4
▹隊員支援経費	2			1	3
▹担当調整員		1		1	2
▹心理カウンセラー				1	1
▹JICA専門家		1			1
▹協力隊を育てる会		1			1
▹シニアボランティアの技術協力	1				1

（表中数字は回答数）

Q11 （Q10で1～2と回答した項目がある方に）その理由・状況を書いて下さい。またそれを改善するための提案があれば書いて下さい。

◆ 記述形式。回答数234人（41%）。

◆ 回答例

① 技術補完研修

	回答数
・現地の活動内容と大きな差異がある ・技術力が向上した、役に立った	37

② 派遣前訓練（語学訓練/研修以外）

・現地の状況にあった内容、活動上での困難や可能性についての講義も聞きたい ・語学、コミュニケーション力強化に充てる方がよい ・任国の知識やライフスキル、安全対策を身につけられ心の準備ができた ・選択制にしてはどうか	30

③ 語学訓練/研修

・現地語学習の必要性 ・講師がワンマンであった ・職種用語や、任国での職種事情に合った内容があるとよい	20

④ 現地（語学）訓練/研修

・期間が短い ・語学訓練と内容が重なっていた。双方の連携が必要ではないか ・実践的な内容が望ましい、プログラムの改善（ホームステイがよいなど）	64

⑥ 広域研修

・フィードバックがなされていない ・研修地域を考慮して欲しい	2

⑦ 活動中の在外事務所の対応

・人によって姿勢や能力差が見られた ・もっと現場（配属先）を訪問するべき ・活動への関心、理解する姿勢が見られない ・忙しそうで人手不足が感じられた ・事務所内のコミュニケーション不足。情報共有がされていない	67

⑧ 運営や技術支援に対するJICAの対応

・申請等に対して対応が遅い。返答がない ・誠意をもって話を聞いてもらえなかった ・支援体制として具体的に何が利用可能なのか知らされていない	24

⑨ 運営や技術支援に対する技術顧問の対応

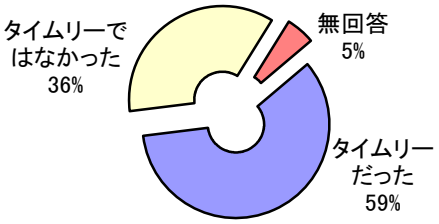
・専門に見合った「技術がわかっている人」を望む ・技術顧問と直接コミュニケーションをとれないので、こちらの意図が正確に伝わらない	9

⑩ その他

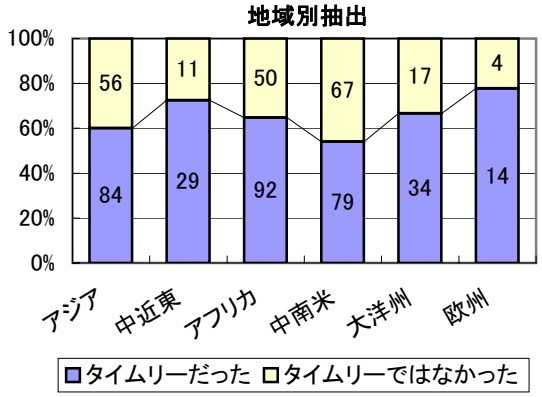
・隊員支援経費の申請が難しい ・利用できる活動支援の情報、前例が少なかった。任期後半になって具体的な情報を得た	13

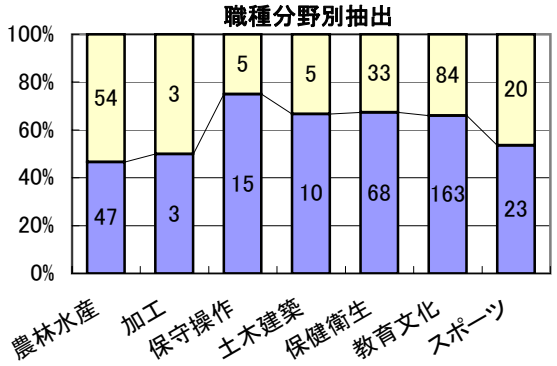
Q12 あなたが派遣されたタイミングは、配属先の状況を考えると、タイムリーだったと思いますか。

	回答数	
1. タイムリーだった	**338**	59%
2. タイムリーではなかった	**206**	36%
無回答	**28**	5%
	572	100%

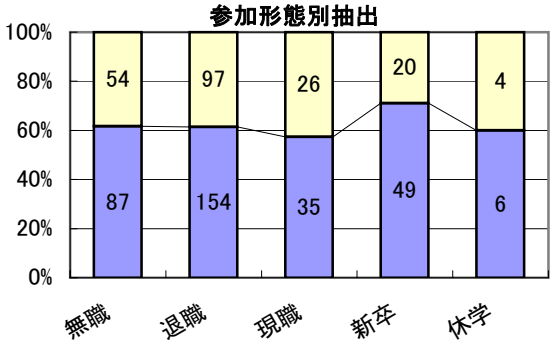


◆「タイムリーだった」と回答したのは59%（338人）にとどまった。



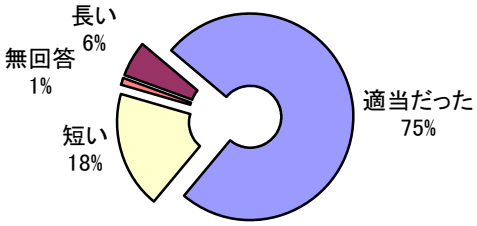


◆「農林水産」（47%）、「加工」（50%）では、「タイムリーだった」が他の職種分野に比べ低い。

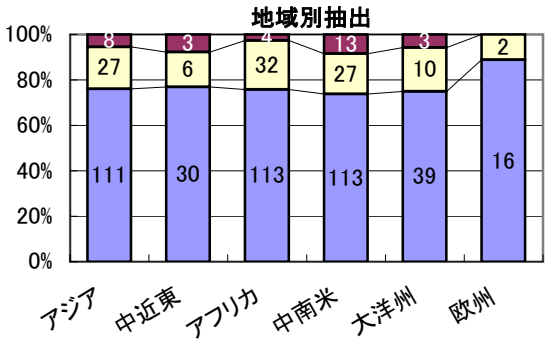


Q13 あなたの派遣期間は適当でしたか。

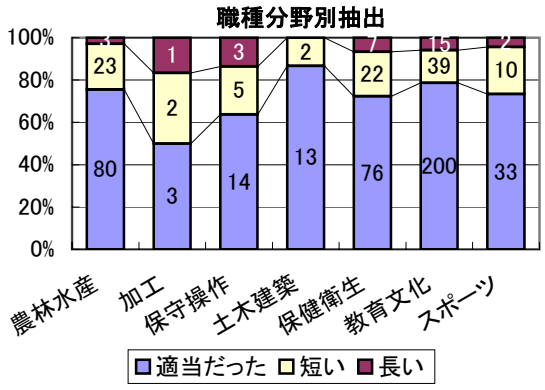
	回答数	
1. 長い	**32**	6%
2. 適当だった	**428**	75%
3. 短い	**105**	18%
無回答	**7**	1%
	572	100%



◆ 75%（428人）が「適当だった」と回答している。



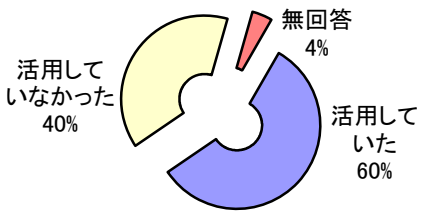
◆ どの地域も、「適当だった」が70～80%を示し、大きな地域差は見られない。



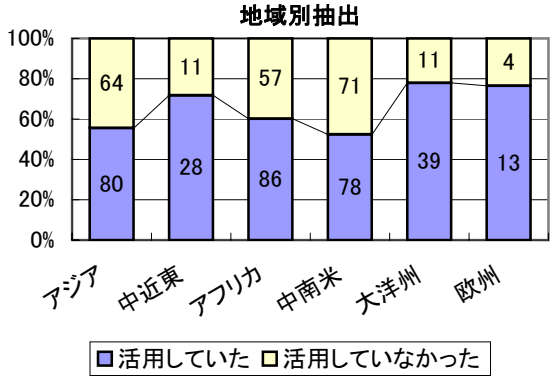
◆ 「土木建築」では「適当だった」が80%超。一方で「加工」(50%)、「保守操作」(64%)では、「適当だった」が他の職種分野に比べ低い。

Q14 配属先はあなたを十分活用していたと思いますか。

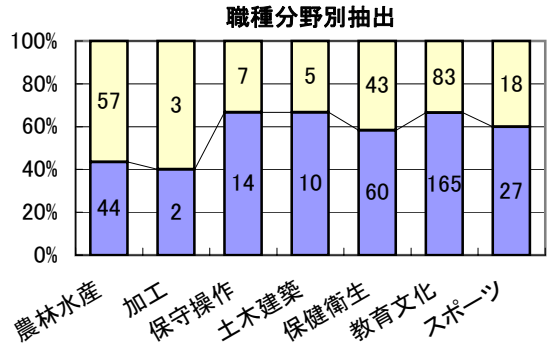
	回答数	
1. 活用していた	328	57%
2. 活用していなかった	222	39%
無回答	22	4%
	572	100%



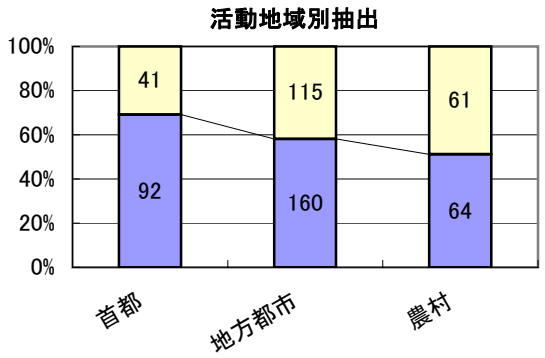
◆ 「活用していた」と回答したのは、57%(328人)にとどまった。



◆ 「アジア」、「アフリカ」、「中南米」では、「活用していた」が60%前後にとどまり、他地域よりも低い結果となっている。



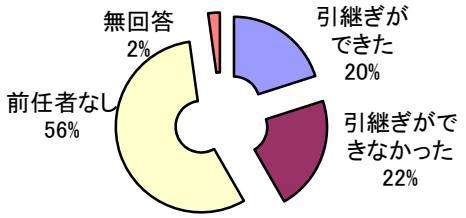
◆ 「農林水産」、「加工」では、「活用していた」が、50%に満たない。



◆「首都」では「活用していた」が約70%に上るが、人口規模が小さくなるにつれて、その割合は低くなっている。

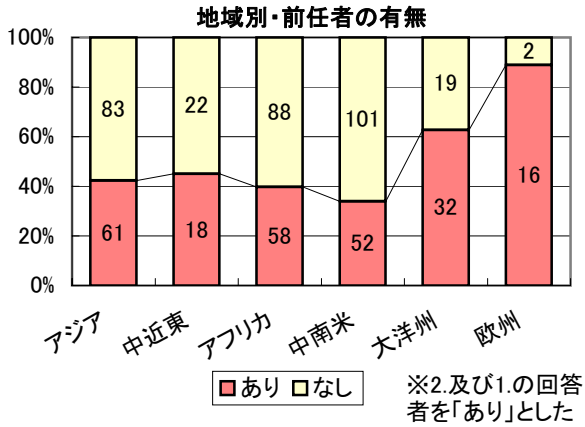
Q15 前任者とは引継ぎできましたか。

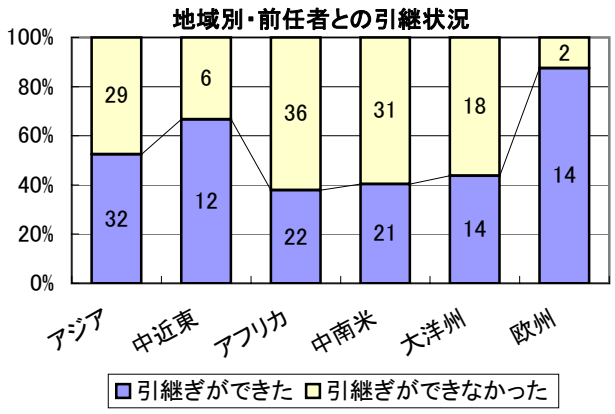
	回答数	
2. 引継ぎができた	**115**	20%
1. 引継ぎができなかった	**124**	22%
0. 前任者なし	**321**	56%
無回答	**12**	2%
	572	100%



◆ 前任者がいた中では、「引継ぎができなかった」が、「できた」を上回る結果となっている。

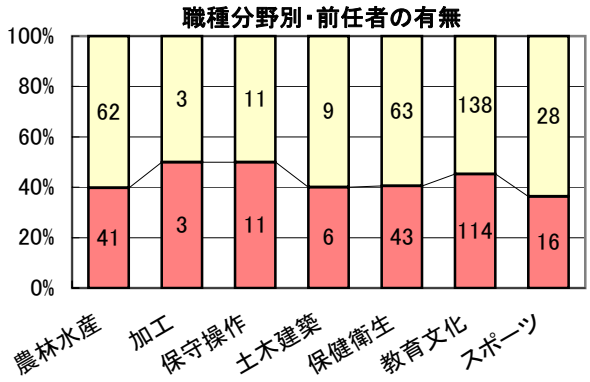
地域別抽出

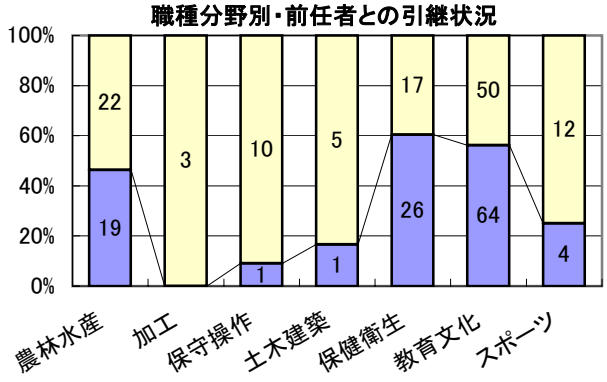




◆「アフリカ」、「中南米」、「大洋州」では、「引継ぎができなかった」の割合が約6割に達する。

職種分野別抽出

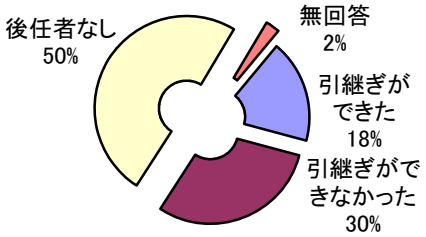




◆「保健衛生」、「教育文化」のみ、「引継ぎができた」が「できなかった」を上回っており、他の職種分野では、「引継ぎができた」の割合は非常に低い。

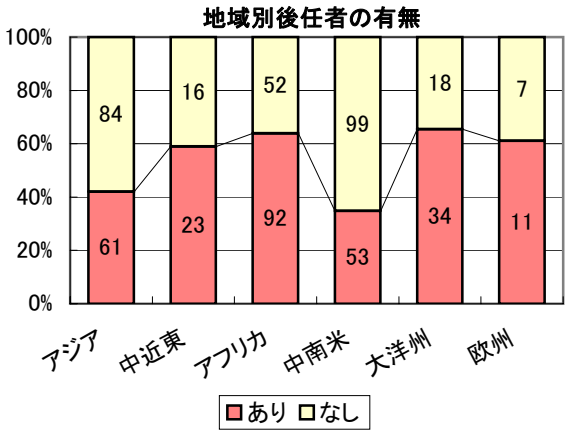
Q16 後任者とは引継ぎができましたか。

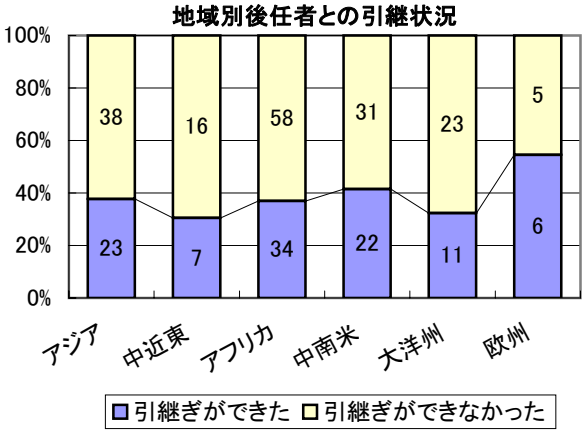
	回答数	
2. 引継ぎができた	103	18%
1. 引継ぎができなかった	172	30%
0. 後任者なし	283	50%
無回答	14	2%
	572	100%



◆ 後任者がいたのは、全体の50%(275人)。「引継ぎができた」は、わずか18%(103人)と非常に低い。

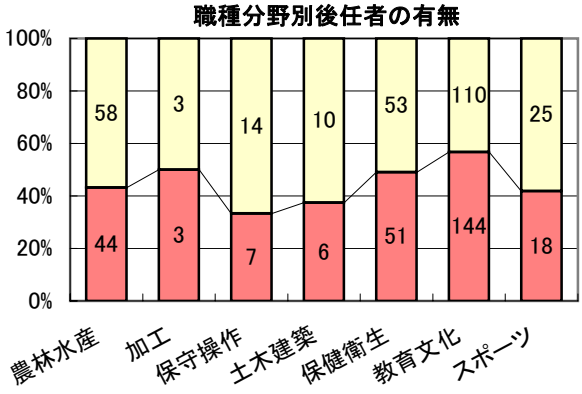
地域別抽出

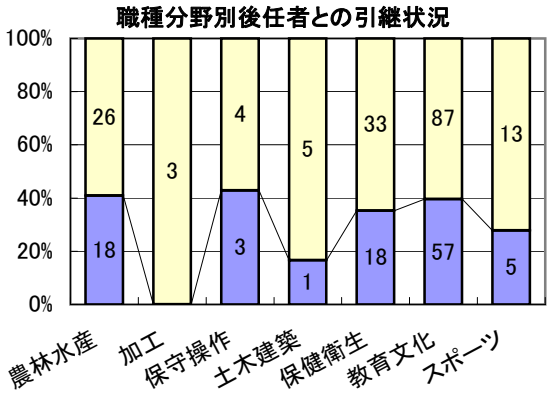




◆「引継ぎができた」が過半数を超えているのは「欧州」のみである。

職種分野別抽出

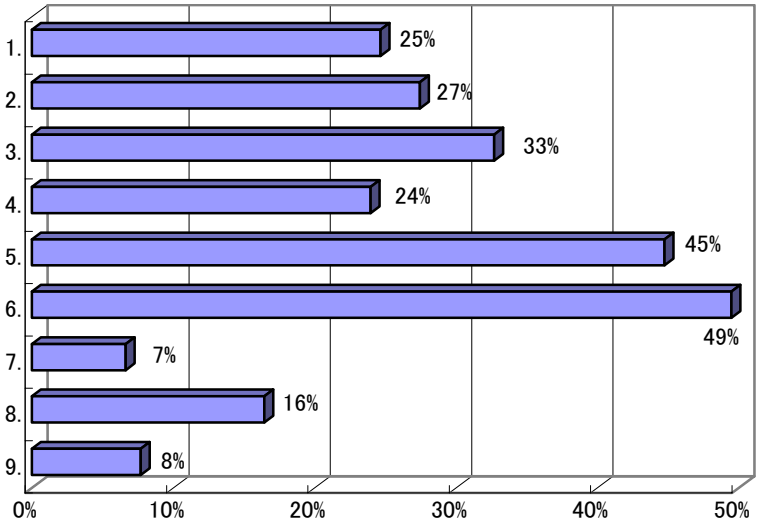




◆ どの職種分野も、「引継ぎができた」は過半数に満たず低い結果となっている。

Q17 あなたが派遣されたことで、配属先や任国の人々にプラスとなった点は何ですか。
（複数回答可）

	回答数	
1. 配属先の方針、体制、システムの改善	**141**	25%
2. 配属先のサービス･活動内容や規模の拡大	**157**	27%
3. 新規サービス･活動の開始	**187**	33%
4. 配属先の広報効果、認知度の向上	**137**	24%
5. 配属先のスタッフの技術･能力の向上	**256**	45%
6. 日本人の仕事への姿勢や取り組み方のスタッフへの影響	**283**	49%
7. 配属先のインプットの改善（予算配分、人員配置、資機材等）	**38**	7%
8. 配属先がサービスを提供する相手への効果	**94**	16%
9. その他	**44**	8%
	572	100%



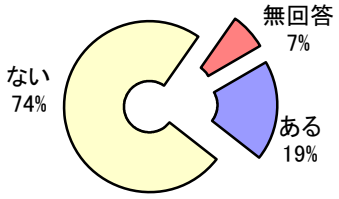
注 回答者総数572人を100%とした。
◆「日本人の仕事への姿勢や取り組み方のスタッフへの影響」（49%、283人）が最多。
次いで、「配属先スタッフの技術･能力の向上」（45%、256人）が続く。

◆ その他回答例

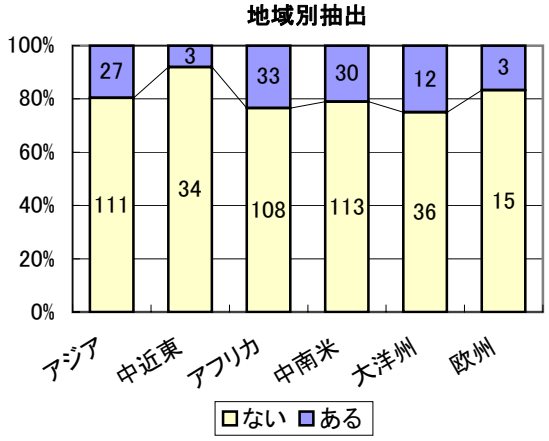
- 子供、地域住民への教育的効果（知識･技術の習得）
- 配属先スタッフ、地域住民の意識の変化、向上心の芽生え
- 協力して物事を行うことへの理解促進
- 子供達の異文化理解につながった
- 初めての外国人受入れによって異文化に触れた。文化交流
- 人員不足を補った。マンパワー的効果
- 地域住民間のつながりができた
- 不正行為の撲滅
- 村民の現金収入、生活の向上

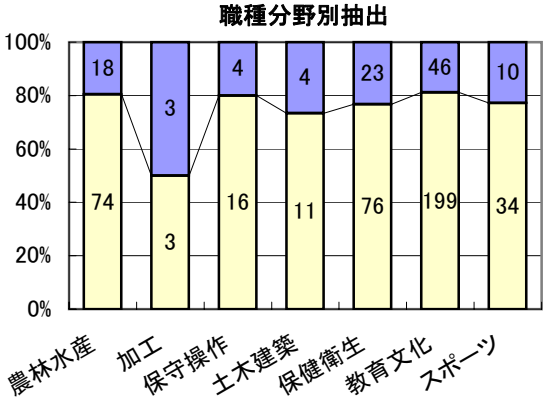
Q18 あなたが派遣されたことでマイナスとなった点はありますか。

	回答数	
1. ある	108	19%
2. ない	424	74%
無回答	40	7%
	572	100%



◆ 19%（108人）が、「マイナスとなった点がある」と回答している。





Q19 （Q18で1と回答した方に）マイナスとなった点を書いて下さい。

◆ 記述形式。回答者数105人（18%）。主な内容は以下の通り。
- ▹ ボランティアへの依存、働かなくなった
- ▹ 配属先及びスタッフへの負担増、雇用機会を奪った
- ▹ 地域内での人間関係の悪化

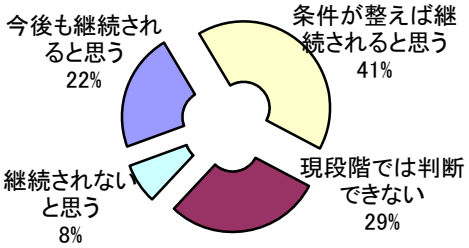
◆「現地の人々がボランティアを頼り、働かなくなった」といった内容が多数挙げられた。

◆ 回答例

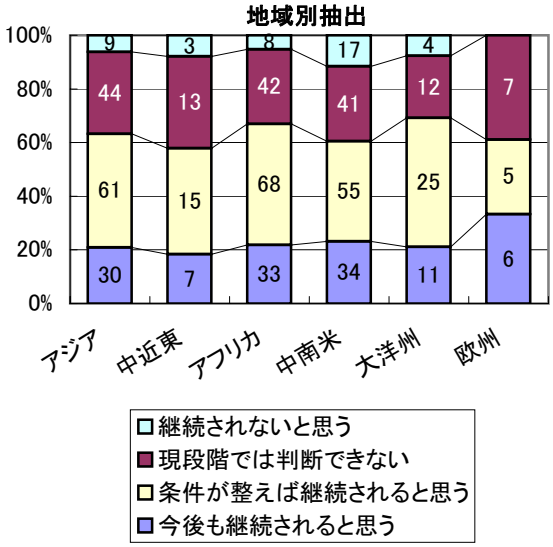
- ・自分達でできることもボランティアに任せてしまう
- ・「何でもやってくれる日本人」になってしまい、スタッフが楽をしてしまっている
- ・ボランティアがいることで、現地人教師の授業数を減らし、だらけさせてしまった
- ・カウンターパートの給料が変わらないのに、仕事量が増える結果になってしまった
- ・ボランティアの住居提供のための経済的負担を強いた
- ・地域内で、活動の利点を受け取れる人と受け取れない人の差が生じてしまった

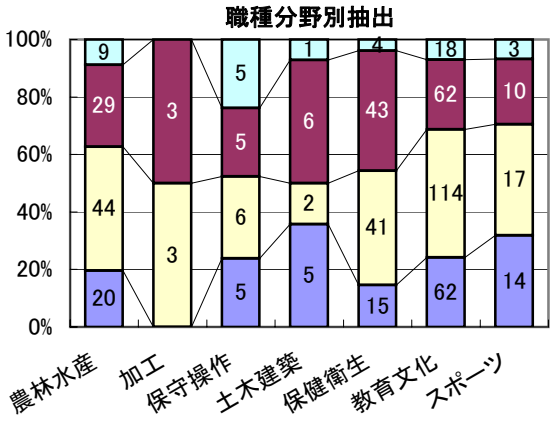
Q20 あなたが実施した活動、あるいはあなたが派遣されたことによって生み出された効果は、今後も継続されると思いますか。

1. 今後も継続されると思う	123	22%
2. 条件が整えば継続されると思う	230	40%
3. 現段階では判断できない	162	28%
4. 継続されないと思う	42	7%
無回答	15	3%
	572	100%



◆「継続されると思う」、「条件が整えば継続されると思う」を合わせると62%（353人）。そのうち、「条件が整えば継続されると思う」は40%（230人）を占める。

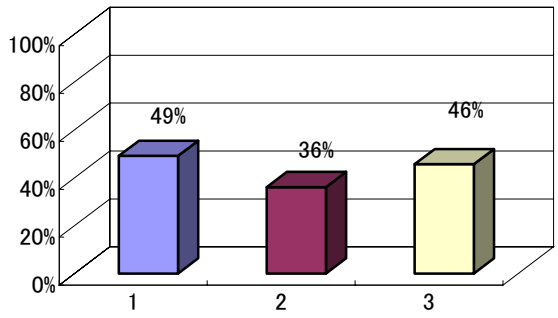




◆「農林水産」、「教育文化」、「スポーツ」では、「継続されると思う」、「条件が整えば継続されると思う」の合計は60%を超えている。一方で「保守操作」は、「継続されないと思う」が10%を超えている。

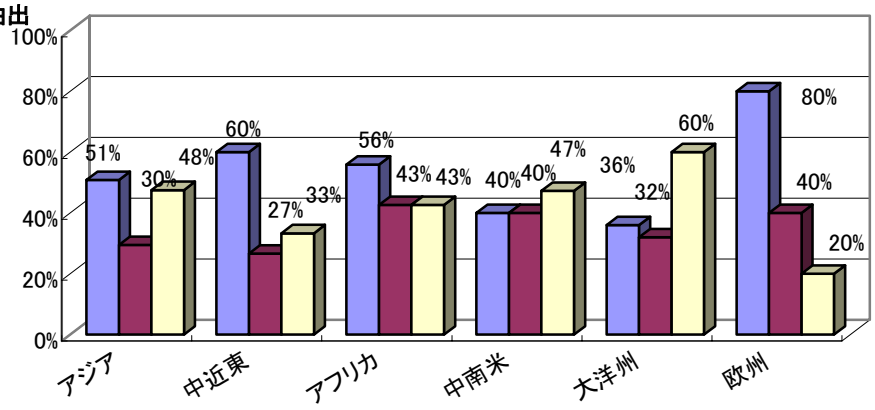
Q21 （Q20で2と回答した方に）条件は何ですか。（複数回答可）

	回答数	
1. ボランティアと同レベルの技術や能力を有するスタッフがいること	**113**	49%
2. 予算が十分にあること	**83**	36%
3. その他	**105**	46%
	230	100%

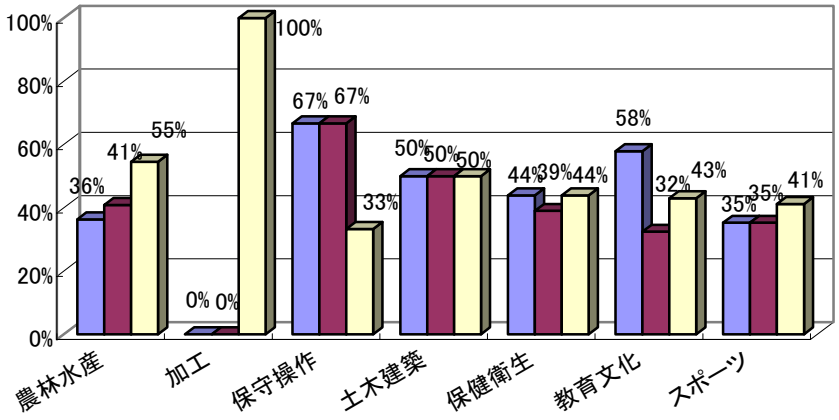


注 Q20で2(条件が整えば継続されると思う)の回答者数230人（40%）を100%とした。
◆ 条件として、人的要素（49%、113人）が、金銭的要素(36%、83人）を上回っている。

地域別抽出



職種分野別抽出



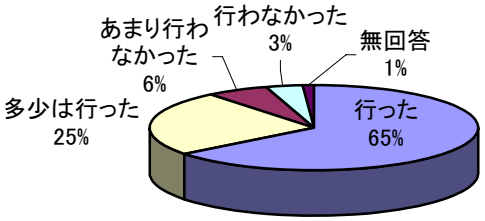
◆ その他回答の主な内容は以下の通り。
- ▹ 現地スタッフの意欲、やる気の持続性、向上心
- ▹ 体制などの環境

《視点Ⅱ》 開発途上国･地域と我が国との間の友好親善及び相互理解の深化

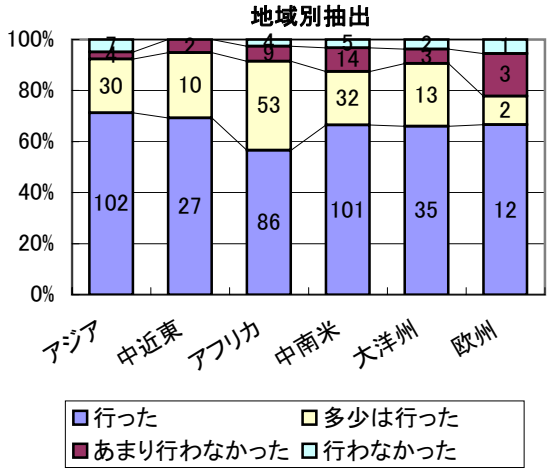
国際親善･二国間交流についておうかがいします。

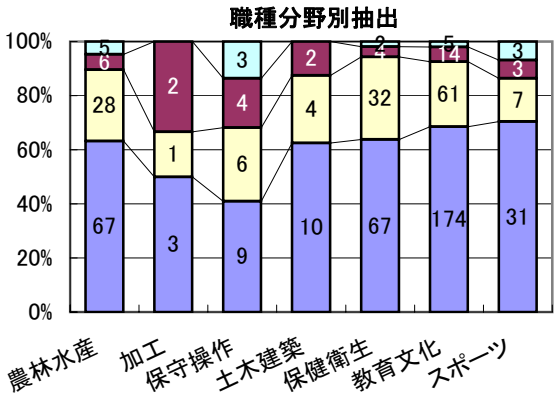
Q22 任期中、配属先での業務以外で任国の人々と交流活動を行いましたか。

4. 行った	368	65%
3. 多少は行った	142	25%
2. あまり行わなかった	35	6%
1. 行わなかった	20	3%
無回答	7	1%
	572	100%

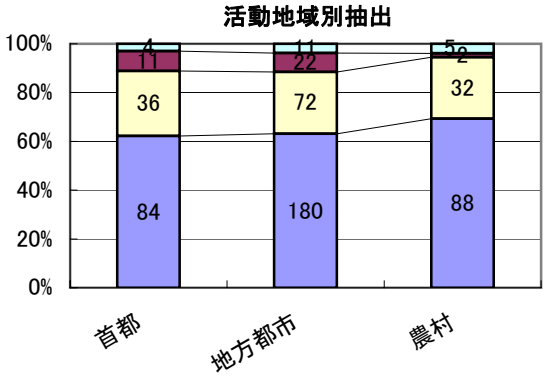


◆「行った」、「多少は行った」を合わせると、90%（510人）が何らかの交流活動を行っている。





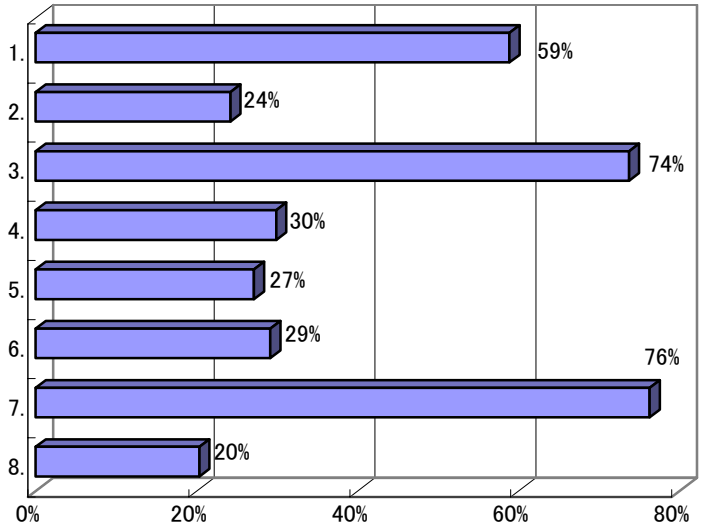
◆「加工」、「保守操作」では、「あまり行わなかった」、「行わなかった」の割合が他の職種分野に比べ高い。



Q23 （Q22で2～4と回答した方に）具体的にどのような交流活動を行いましたか。

（複数回答可）

	回答数	
1. 日本語を教えた	**321**	59%
2. 日本の地理を教えた	**132**	24%
3. 日本の文化を紹介した（ゲームや折り紙などの遊びも含む）	**402**	74%
4. 配属先での業務以外のボランティア活動をした	**163**	30%
5. 地域の集会やセミナーに参加した	**148**	27%
6. 地域のスポーツ活動に参加した	**159**	29%
7. ごく簡単だが雑談レベルで日本のことを話している	**416**	76%
8. その他	**111**	20%
	545	100%



注 Q22で2～4の回答者数545人（96%）を100%とした。

◆「ごく簡単だが雑談レベルで日本のことを話している」（76%、416人）が最多。次いで「日本の文化を紹介した」（74%、403人）、「日本語を教えた」（59%、321人）が続く。

◆ その他回答例

- ゴミ拾い（清掃）や草刈り等の環境保護活動
- 孤児院、障害者施設等の手伝い、訪問
- 配属先以外での当該分野の指導
- 津波被災者への支援
- 現地の冠婚葬祭、会合に参加
- 日本語教室、料理教室、日本祭など日本文化紹介
- 映画上映会、人形劇、日本の歌のコンサートの開催
- 日本に対する間違えた知識を改める活動

Q24 （Q23でチェックした項目がある方に）上記でチェックした交流活動について、具体的に書いて下さい。

◆ 記述形式。回答者数441人（77%）。

◆ 各々が様々な工夫を凝らし、日本文化を取り入れた交流活動を行っていることがうかがえる。コミュニティやスポーツチームに参加しての活動も多く挙げられた。また、特別なことをせずとも日々の生活や、その延長上として交流活動が行われている様子もうかがえる。

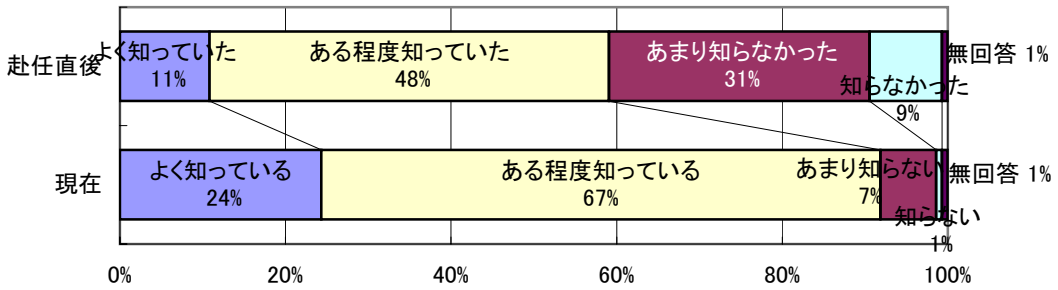
◆ 回答例

- 毎日の生活全てが交流だった
- 日本の四季や食事、習慣に関して写真を見せたり、家に招いて食事をした
- 現地の材料で作れる日本料理講習を行った
- 早朝の海岸で、ゴミ拾い(ビーチクリーン活動)をした
- 任地の楽器を習い、お祭りなどで演奏した
- 伝統ダンスを習いに通った
- 道端で、柔道の指導をした
- 折り紙を教え、日本の地震被災地へ送った
- 日本語会話集を作り配布した
- 日本文化(餅つき、福笑い、習字など)を紹介するお祭りを行った
- 各地で、日本音楽のコンサートを行った
- 大学のエキシビジョンで、広島･長崎原爆展を開催した
- 孤児院や障害者施設を巡回し、人形劇をした

＜日本及び日本人に対する理解度＞

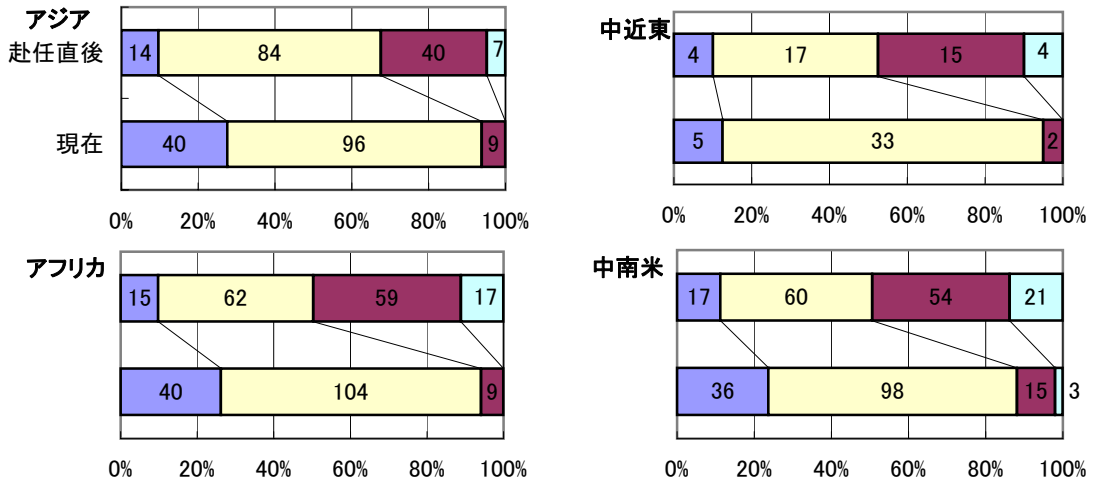
あなたの配属先での活動やその他の交流活動の結果、配属先の上司や同僚、地域住民の日本や日本人に関する認識が変化したと思いますか。赴任直後と現在を比較してください。

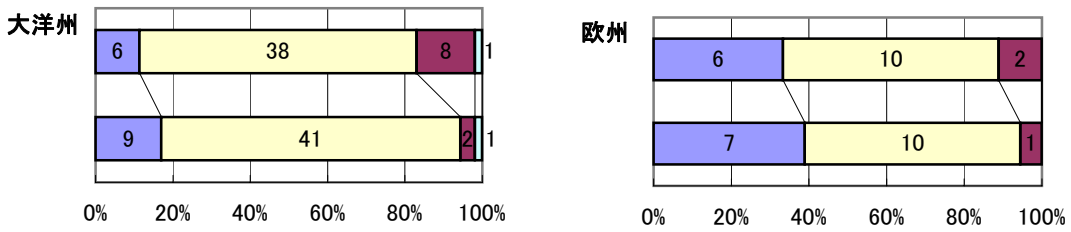
Q25 赴任直後、配属先の上司や同僚は･･･	赴任直後		*Q26* 現在、配属先の上司や同僚は･･･	現在	
4. よく知っていた	62	11%		138	24%
3. ある程度知っていた	276	48%		388	67%
2. あまり知らなかった	180	31%		38	7%
1. 知らなかった	50	9%		4	1%
無回答	4	1%		4	1%
	572	100%		572	100%



◆「よく知っていた」、「ある程度知っていた」を合わせると59%(338人)から、現在は91%(526人)へと大きく伸び、日本や日本人に関する認識が非常に深まっていることがわかる。

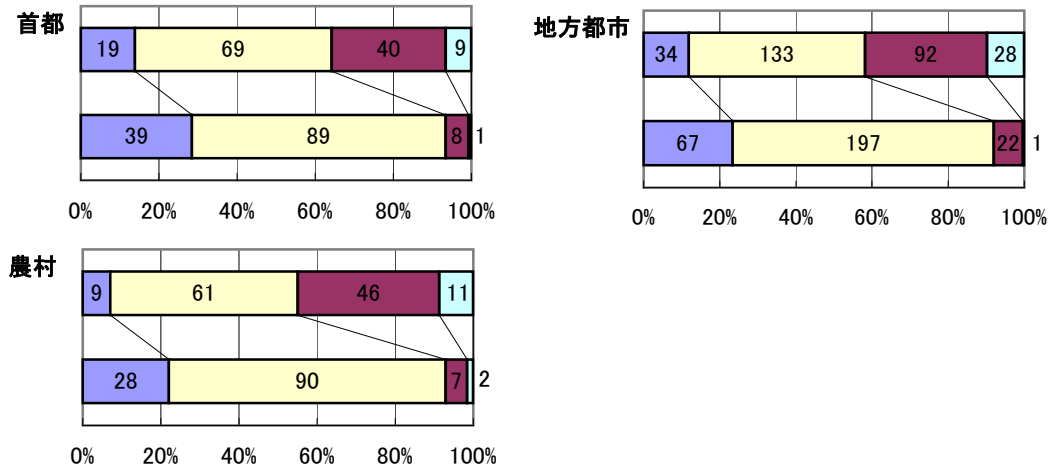
地域別抽出





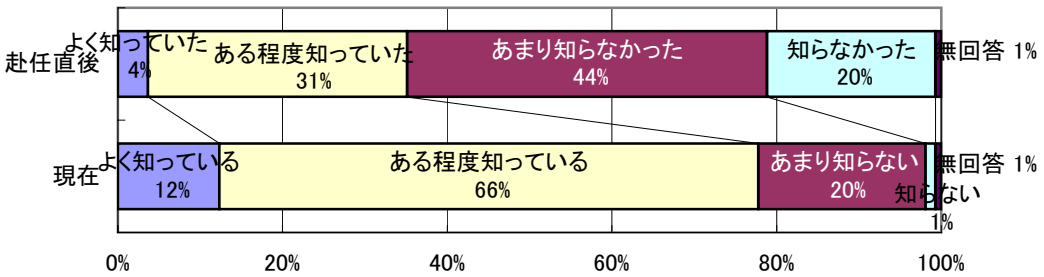
◆ 現在「知らない」は、「中南米」(3人)、「大洋州」(1人)で僅かに見られるのみである。
◆ 「アジア」、「アフリカ」、「中南米」では、「よく知っている」は、現在は赴任直後と比べて2倍以上割合が高くなっている。

活動地域別抽出



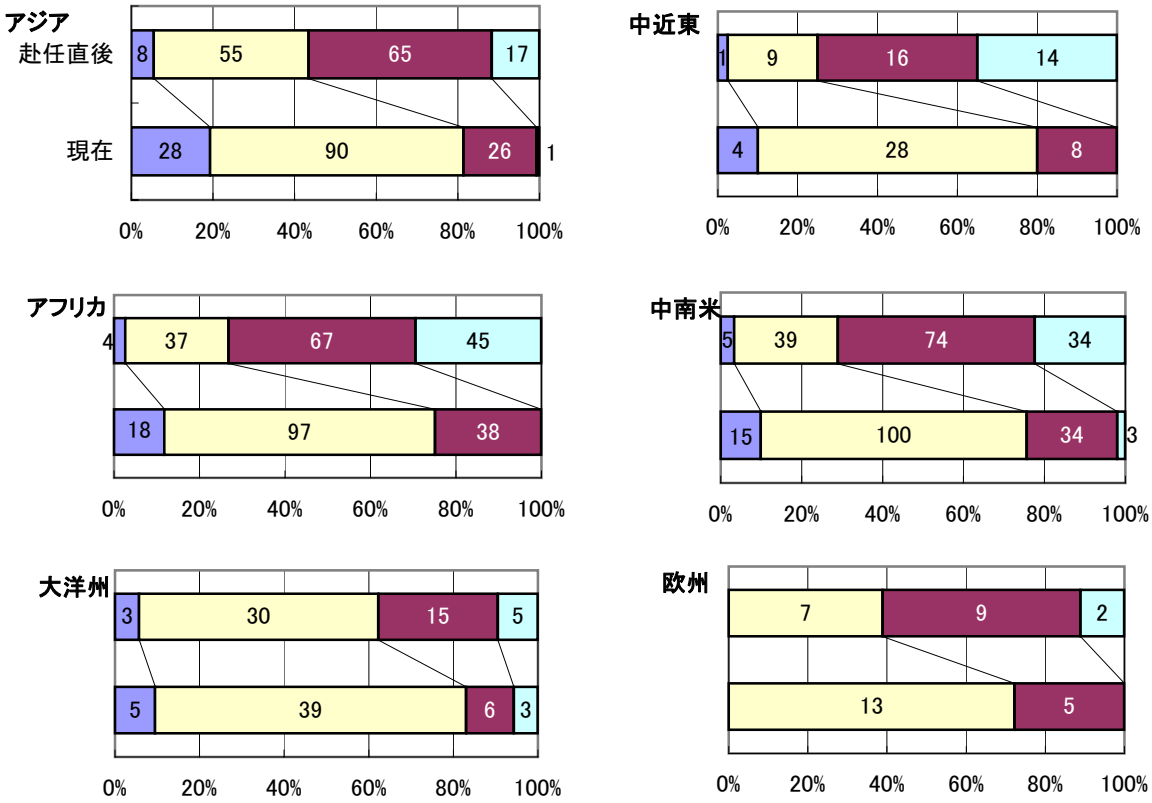
Q27 **赴任直後、地域住民/周囲の人々は・・・**　　***Q28*** **現在、地域住民/周囲の人々は・・・**

	赴任直後		現在	
4. よく知っていた	21	4%	71	12%
3. ある程度知っていた	180	31%	373	66%
2. あまり知らなかった	250	44%	117	20%
1. 知らなかった	117	20%	7	1%
無回答	4	1%	4	1%
	572	100%	572	100%



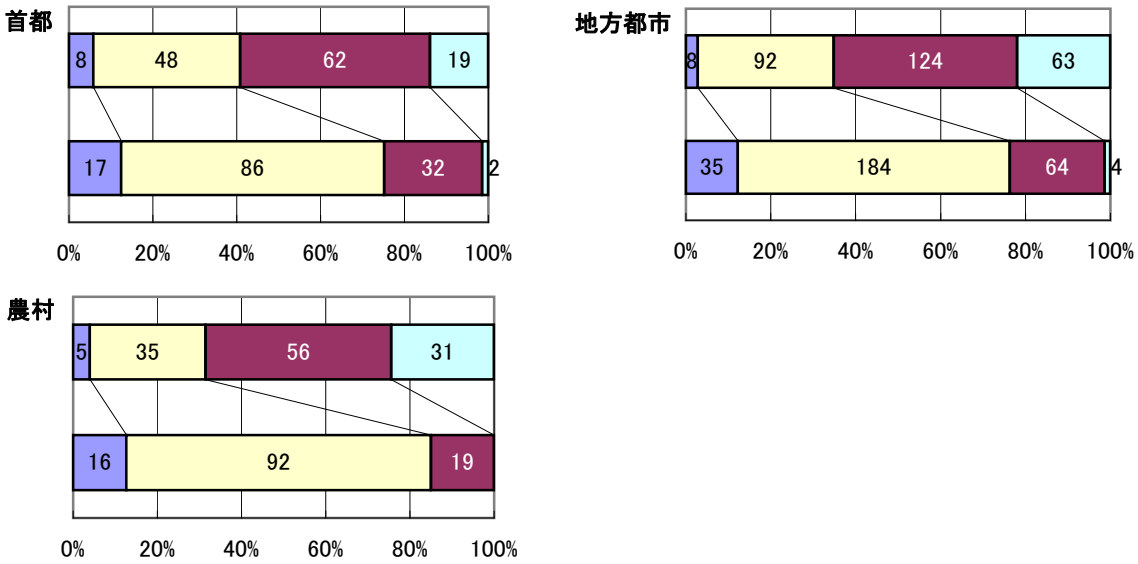
◆ 「よく知っていた」、「ある程度知っていた」を合わせると、赴任直後の35%(201人)から現在は78%(444人)に倍増している。赴任直後20%(117人)であった「知らなかった」は、現在はわずか1%(7人)に激減している。

地域別抽出



◆「中近東」、「アフリカ」、「中南米」では、「よく知っている」、「ある程度知っている」を合わせると現在では、赴任直後から倍増している。
◆ 特に「中近東」、「アフリカ」、「欧州」では、赴任直後は60%以上が「あまり知らなかった」、「知らなかった」であったが、現在「知らない」はゼロとなっている。

活動地域別抽出



◆「農村」では、「よく知っている」、「ある程度知っている」を合わせると、現在では赴任直後の3倍近くに伸びている。

Q29 （Q25～Q28で赴任直後と現在で変化があった方に）日本に関する認識がどのように変化したのか、変化の例やエピソードを具体的に書いて下さい。

◆ 記述形式。回答者数275人（48%）。主な内容は以下の通り。
- ▹ 間違った認識が改められた
- ▹ 日本についての知識が増えた
- ▹ 日本人が中国人や韓国人と違うことがわかった

◆「日本について知らなかったが、文化や言語等の新しい知識を得た」、または「間違った認識であったが、正しい認識を持つようになった」という回答が多数を占めた。中でも、「日本は中国や韓国と違う国であるとの認識を得られた」という内容が目立った。

◆ 回答例

- ・アジア系の国々の区別がつかなかったが、日本という一つの国を知ってもらえた
- ・「中国人」と呼ばれなくなった
- ・日本人は皆空手を習う、コンピュータを作っている、車が安い、犬やヘビを食べるというイメージを少しは払拭できたが、まだそのように信じている人は多い
- ・日本の経済や産業についてだけでなく、文化や生活習慣、考え方等も含め知識を持った
- ・日本人は金持ちという先入観を持っていたが、歴史や生活、問題点を話すことで認識が変わっていった
- ・日本人の時間的感覚や、約束を守ることの大切さをわかってくれたと思う
- ・待ち合わせ時間に正確に来るようになった
- ・日本のニュースが出ると翌日に教えてくれる
- ・「おしん」のような世界が今はないことをわかってくれた
- ・赴任当初、「日本人は金持ちなので私たち貧乏人とは話をしてくれない」と思われていたが、任期終了時には「仲良くしてくれてありがとう」と何度も言われた

Q30 （Q25～Q28で赴任直後と現在で変化があった方に）変化の理由は何だと思いますか。

◆ 記述形式。回答者数250人（44%）。主な内容は以下の通り。
- ▹ 実際に日本人と接したから、ボランティアの存在
- ▹ 日々の交流
- ▹ しつこく説明したから
- ▹ 現地の人々の興味･関心

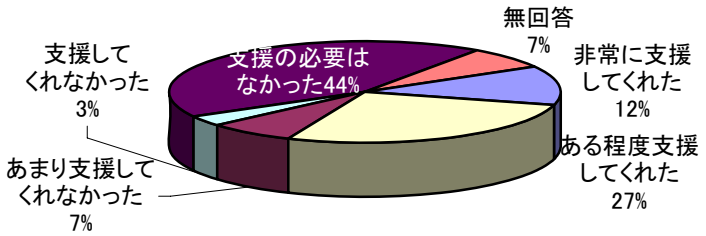
◆「実際に日本人と接した」、「日常の活動や生活での交流」という内容が多数を占めた。

◆ 回答例

- ・日々のおしゃべりの成果。日々の自分の態度と言動
- ・毎日必ず話すをするように心がけ、お互いの国について話した
- ・実際に日本人と接触し、直接話をしたこと
- ・日本人である自分自身の生活を見た。また、一緒に働いた
- ・初めて話す日本人であり、現地の人々も興味、関心をもった
- ・人々が、日本のことをもっと知ろうとしてくれた
- ・自分が感じた文化の違いを、常に話し、相手の意見を聞くようにした
- ・自分の行動、発言の背景を、常に説明した
- ・気長に説明し続けた
- ・ひたすら話し続け、しつこくアピールした

Q31 **任国の人々との交流活動に関して、在外事務所の支援体制はどうでしたか。**

	回答数	
4. 非常に支援してくれた	71	12%
3. ある程度支援してくれた	156	27%
2. あまり支援してくれなかった	41	7%
1. 支援してくれなかった	20	3%
0. 支援の必要はなかった	244	44%
無回答	40	7%
	572	



◆「非常に支援してくれた」、「ある程度支援してくれた」、「支援の必要がなかった」を合わせると83%（471人）に上る。

Q32 **（Q31で3～4と回答した方に）具体的にどのような支援が有効だったか、書いて下さい。**

◆ 記述形式。回答者数179人（31%）。主な内容は以下の通り。
- ▹ 相談やアドバイス（活動、生活など）
- ▹ イベントへの参加

◆ 回答例
- ・配属先とのミーティングや電話における支援
- ・困った時に親身になって相談にのってくれた
- ・日本文化紹介などのイベント開催時に相談にのってくれ、参加してくれた
- ・地域での催しなどの情報を提供してくれた

Q33 **（Q31で1～2と回答した方に）どのような支援があれば良かったか、書いて下さい。**

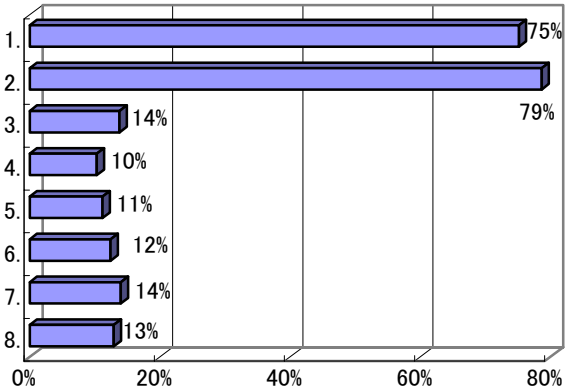
◆ 記述形式。回答数53件（9%）。主な内容は以下の通り。
- ▹ 活動先との調整や、訪問
- ▹ 情報、資金等の支援
- ▹ 特に必要ない

◆ 回答例
- ・交流活動もセカンドプロジェクトとして支援してほしい。配属先と関係のない活動にも肯定的になってほしい
- ・事務所の中には日本文化紹介は必要ないという意見もあった。もう少し理解がほしい
- ・支援は必要ない。交流は個人次第。自分のモチベーションの問題だと思う

＜ボランティアから日本への情報発信＞

Q34 任期中、任国に関することやあなたの活動について日本へ情報発信する活動を行いましたか。（複数回答可）

	回答数	
1. 家族へ	430	75%
2. 友人へ	450	79%
3. 自治体へ	79	14%
4. 出身学校へ	59	10%
5. 本邦勤務先へ	64	11%
6. 雑誌や新聞へ	71	12%
7. その他	80	14%
8. 特に何もしていない	74	13%
	572	100%



注 回答者総数572人を100%とした。

◆ 70%以上が、「家族」（75%、430人）、「友人」（79%、450人）へ情報発信しており、他は10%前後で並んだ。一方では、「特に何もしていない」も13%（74人）あった。

Q35 （Q34で1～7と回答した方に）具体的にどのような発信をしたのか、書いて下さい。

◆ 記述形式。回答者数391人（68%）。

◆ 発信方法
インターネット（Eメール・HP等）の利用者が約4割であるが、手紙や電話を併用して発信している事例が多い。新聞社等のメディアや、自治体への投稿記事への協力、出身校や当該分野の機関紙等への自主的な投稿も積極的に行われている。また、HPや掲示板を利用し、より多くの人への発信、意見交換をしているとの声もあった。

◆ 発信内容
活動報告（報告書の添付等）、任国の様子、日常の生活が主な内容。それらを通じて考えること、感じること、悩みについて発信したという回答も多く見られた。
また、写真（CD-R、ビデオ）を添付し、よりわかりやすく伝えようとしていることもうかがえた。

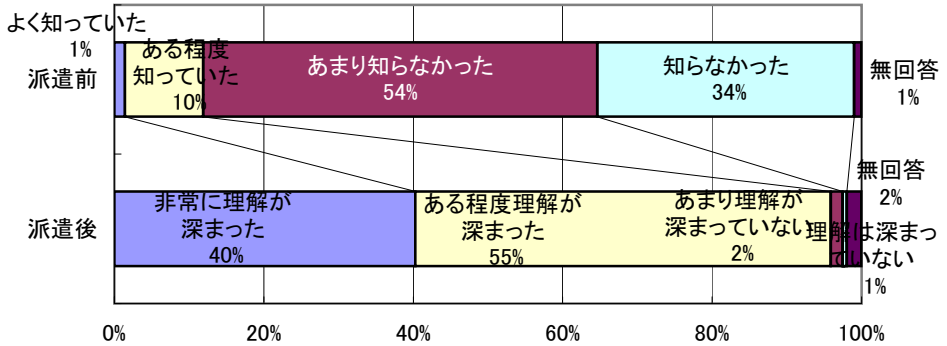
◆ 回答例

- 活動内容、日常の生活、習慣や価値観の違い、悩みや相談
- 生活で感じた日本人と現地の人々との違いや、配属先での話、食文化等
- 毎月写真入りの報告書を作成し、活動の様子をインターネットの掲示板に掲載した
- 地元ラジオ局の依頼で月１回程度活動や生活などを紹介した
- 現地人の生活や習慣、気候、考え方など。負の面も書いたが、ポジティブ、ネガティブの両方を書くことで、任国のことをよりわかってもらえたと思う
- 物が十分にない中での派遣国の人々の仕事や生活がどういうものなのかを、日本にいる人々に理解してほしい、という内容
- Eメールで、月に2～3回程度、任国での生活ぶりを、エピソードや写真と共に送信。相互関係を持てるように、受信者からの質問にはすべて答え、任国についての理解を深めてもらえるように努めた
- 月1回、メールマガジンによるレポートを送付。出身小学校から子供達による絵やアンケートを送ってもらい、任国で展示した。またそのお返しとして、任国の子供達の絵や写真、生活用品等を出身校へ送った
- 学校・友人には月１回、任国通信を発送。地元の市役所にも配属先の現状を報告。また県のホームページに親善大使レポートを送付した

＜任国及び任国の人々に対する理解度＞

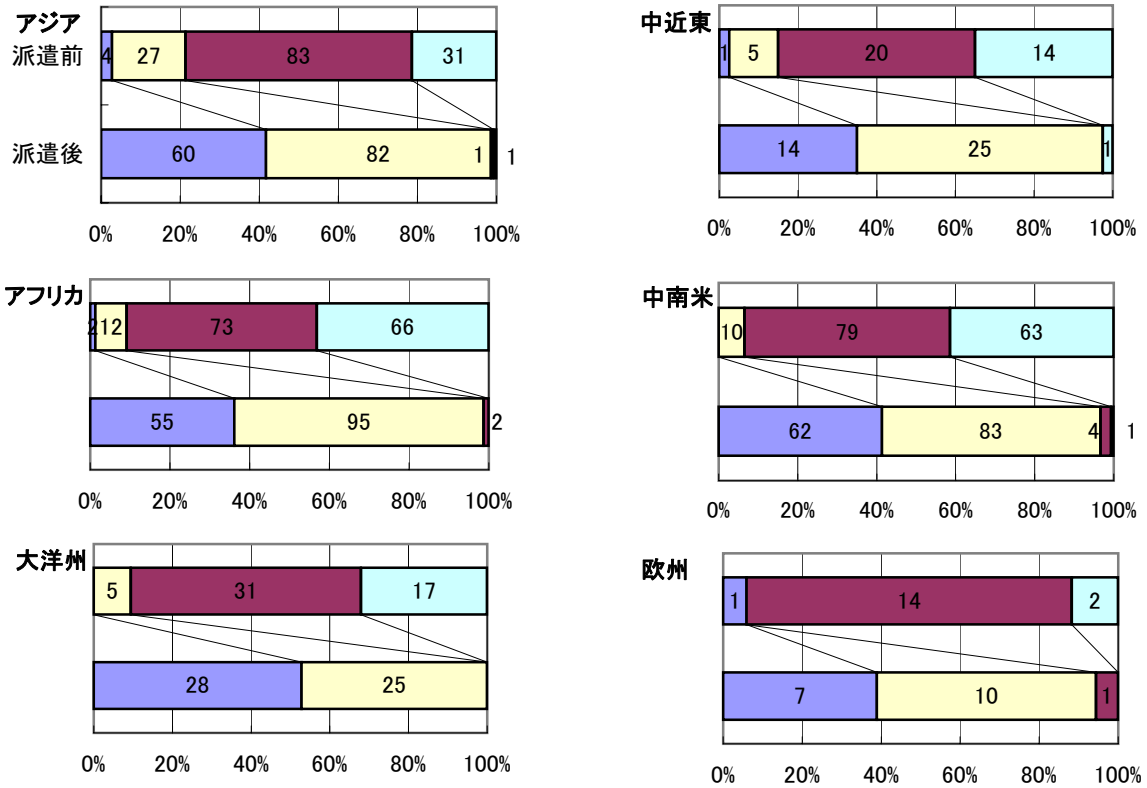
派遣前と現在とを比較して、あなた自身、任国に関する知識や理解は深まりましたか。

Q36 派遣前、任国について・・・	派遣前		*Q37* 派遣後、任国について・・・	派遣後	
4. よく知っていた	8	1%	非常に理解が深まった	228	40%
3. ある程度知っていた	60	10%	ある程度理解が深まった	322	55%
2. あまり知らなかった	301	54%	あまり理解が深まっていない	9	2%
1. 知らなかった	196	34%	理解は深まっていない	3	1%
無回答	7	1%	無回答	10	2%
	572			572	

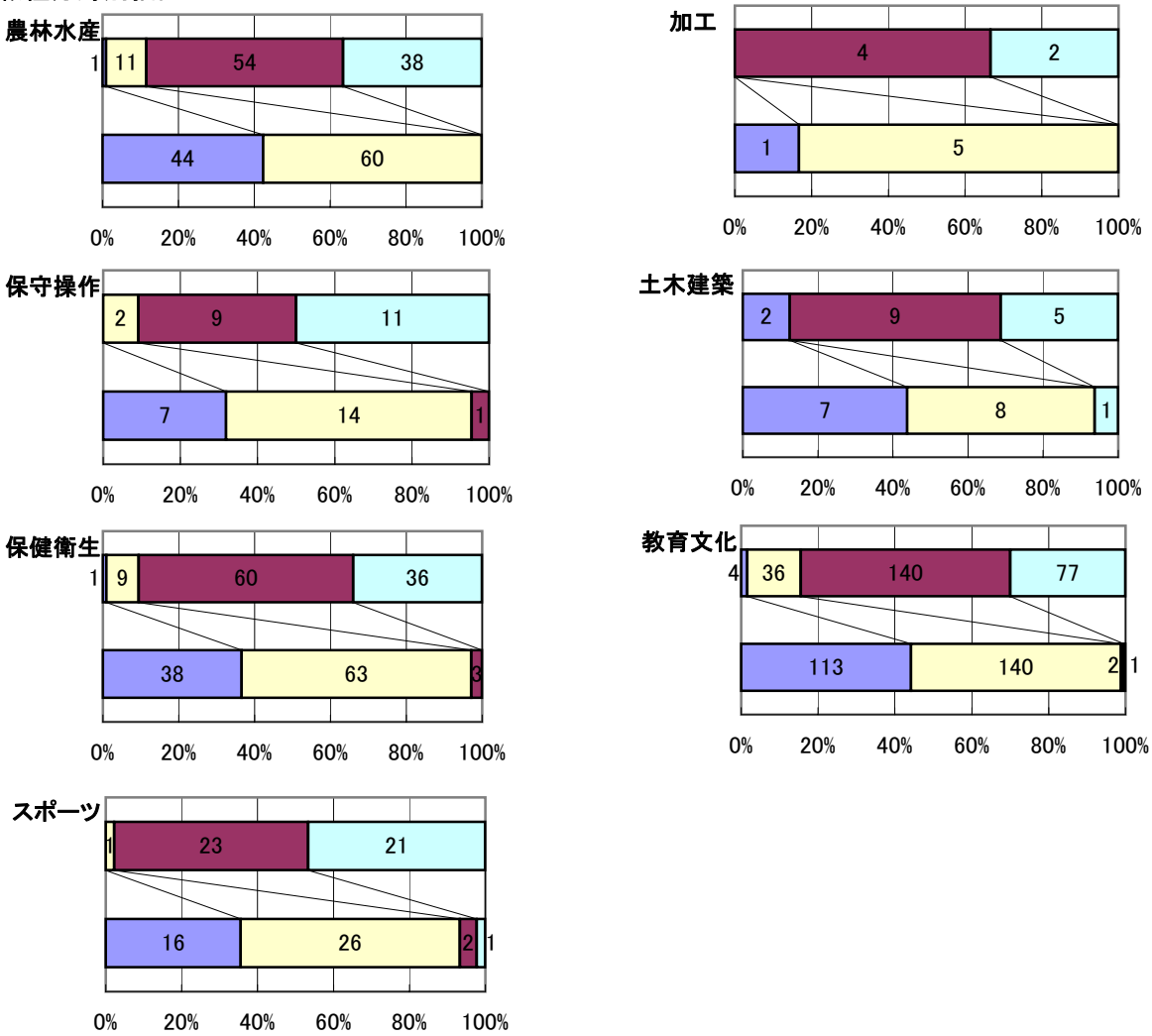


◆ ボランティアの派遣前は、「よく知っていた」、「ある程度知っていた」を合わせると11%（68人）に過ぎなかったが、派遣後には、「非常に理解が深まった」、「ある程度理解が深まった」を合わせると95%（550人）にも達し、ほとんどの者が理解を深めたことがわかる。

地域別抽出

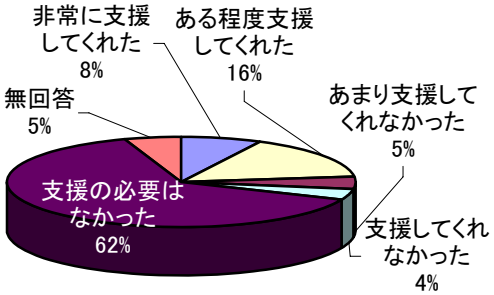


職種分野別抽出



Q38 任国に関することやあなたの活動について日本へ情報発信する活動に関して、在外事務所やJICA本部の支援体制はどうでしたか。

	回答数	
4. 非常に支援してくれた	43	8%
3. ある程度支援してくれた	89	16%
2. あまり支援してくれなかった	26	5%
1. 支援してくれなかった	21	4%
0. 支援の必要はなかった	363	62%
無回答	30	5%
	572	



◆「非常に支援してくれた」、「ある程度支援してくれた」、「支援の必要はなかった」を合わせると86%（495人）に上る。

Q39 （Q38で3～4と回答した方に）具体的にどのような支援が有効だったか、書いて下さい。

◆ 記述形式。回答者数98人（17%）。主な内容は以下の通り。
- ▹ 原稿依頼等の情報提供や取材対応、事務手続き
- ▹ 機関紙の発刊や利用
- ▹ 任国の治安や事務所及び隊員の活動状況の情報提供

◆ 回答例

- JICAから情報発信依頼が行われた
- 異文化交流を希望する学校を取りまとめているプロジェクトの紹介等、情報発信のきっかけを与えてくれた
- 日本の雑誌や新聞からの原稿依頼等を紹介してくれた
- 困っていることがあれば、いつでも相談にのってもらえるという安心感に助けられた
- メールマガジンによる所長、隊員等活動者の情報提供。HPによる事務所活動の開示や任国情報の提供。隊員機関誌の作成支援を事務所から戴いた
- 支援はあったが有効とは思えない。事務所は報告書のみの評価で、現地の人々（配属先）との交流まで考慮したものではなかった

Q40 （Q38で1～2と回答した方に）どのような支援があればよかったか、書いて下さい。

◆ 記述形式。回答者数31人（5%）。主な内容は以下の通り。
- ▹ 主な支援内容の紹介
- ▹ 情報を発信する相手の紹介
- ▹ 情報を発信する環境（インターネット）の提供
- ▹ 必要ない

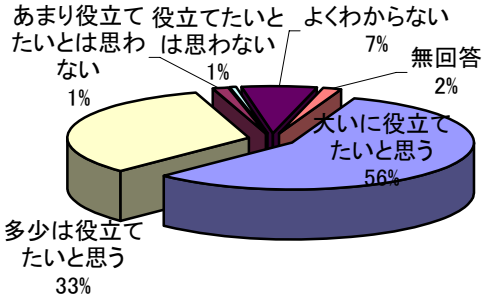
◆ 回答例

- 具体的な支援例をもらえたらよかった
- どのような機関にどのように情報発信する手段があるのか。そのような情報提供や紹介があれば、もっと活動の広報ができたと思う
- 事務所が掲示板などで情報を求める者（国内マスコミ機関等）と情報提供者（ボランティア）のマッチングを行ってはどうか
- 活動についての情報発信は特に行わなかった。必要と思わなかった
- 情報発信の際、許可を取らなければならない手続きが多すぎる
- ボランティアにインターネット利用環境を提供してほしい
- 積極的な情報提供、発信を認めてほしかった

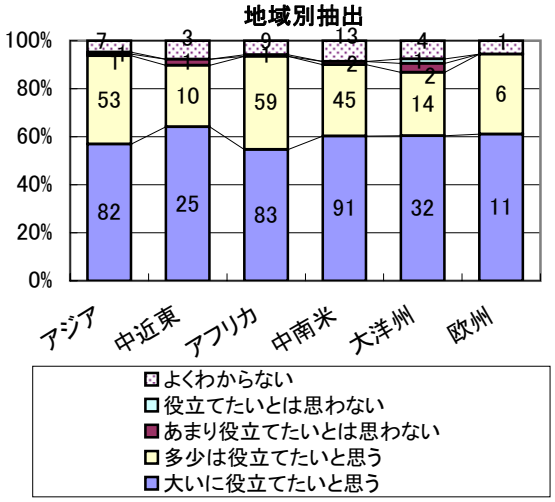
《視点Ⅲ》 ボランティア経験の社会還元

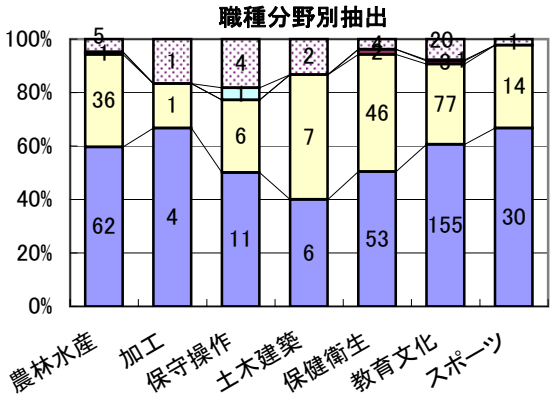
Q41 ボランティア活動で得たものを帰国後何らかの形で社会に役立てたいと思いますか。

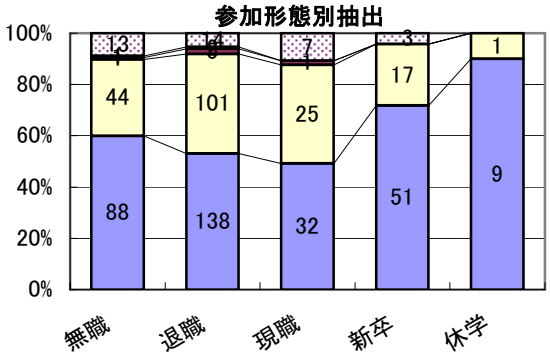
	回答数	
4. 大いに役立てたいと思う	325	56%
3. 多少は役立てたいと思う	189	33%
2. あまり役立てたいとは思わない	7	1%
1. 役立てたいとは思わない	3	1%
0. よくわからない	38	7%
無回答	10	2%
	572	100%



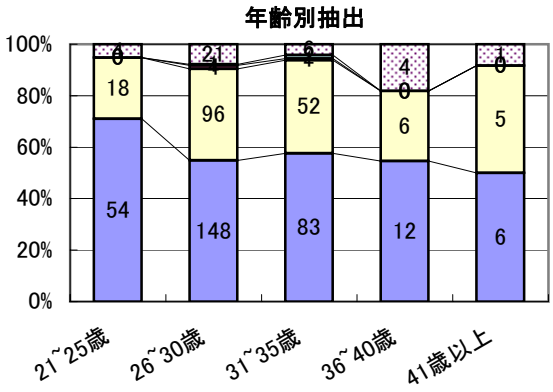
◆「大いに役立てたい」が56%(325人)。「多少は役立てたい」と合わせると、89%(514人)に上る。「役立てたいとは思わない」の回答は、わずか1%(3人)であった。







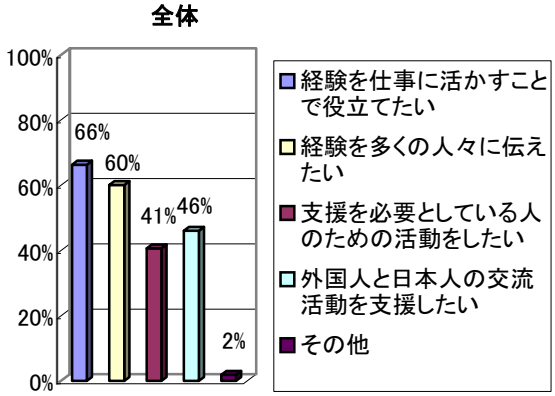
◆「新卒参加」(72%)、「休学参加」(90%)は、「大いに役立てたい」の割合が高い。

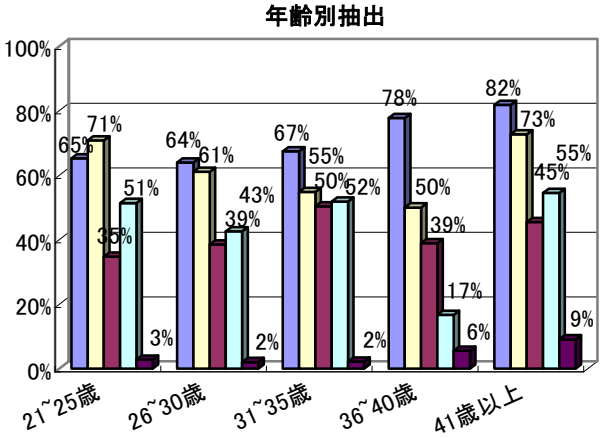


◆ 年齢を経るにしたがって「大いに役立てたい」の割合は減少している。

Q42 （Q41で3～4と回答した方に）ボランティア活動で得られた経験をどのように社会に役立てたいですか。（複数回答可）

	回答数	
1. 経験を仕事に活かすことで役立てたい	341	66%
2. 経験を多くの人々に伝えたい	309	60%
3. 支援を必要としている人のための活動をしたい	209	41%
4. 外国人と日本人の交流活動を支援したい	237	46%
5. その他	10	2%
	514	100%





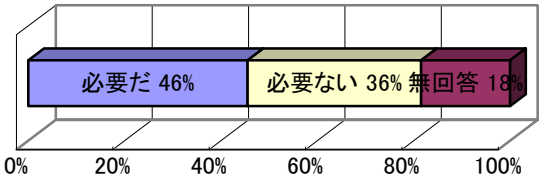
注 Q41で3～4の回答者数514人（89%）を100%とした。
◆「経験を仕事に活かすことで役立てたい」（66%、341人）が最多に挙げられている。

◆ 年齢が高くなるほど、「経験を仕事に活かすことで役立てたい」の割合が高くなっている。

◆ その他回答例
- 日本の政治、経済改革に役立ちたい
- 積極的に役立てたいとは思わないが、生きていくうえで重要なことを学んだ

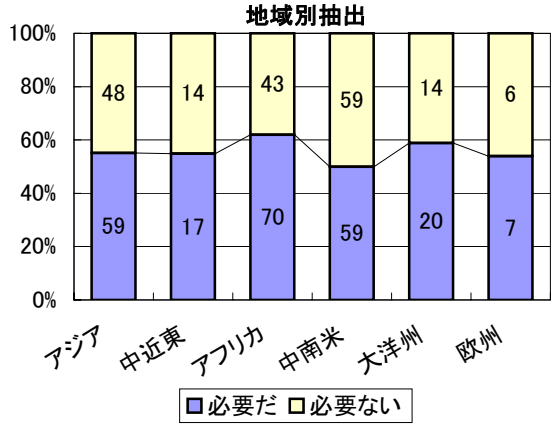
Q43 （Q41で3～4と回答した方に）ボランティア活動で得られた経験を役立てるためにJICAが何らかの支援を行うことが必要だと思いますか。

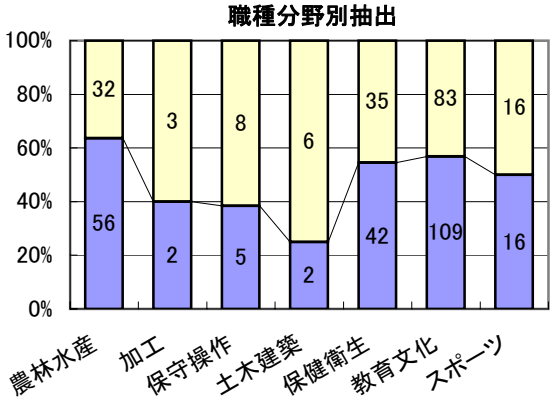
	回答数	
1. 必要だ	234	46%
0. 必要ない	185	36%
無回答	95	18%
	514	100%



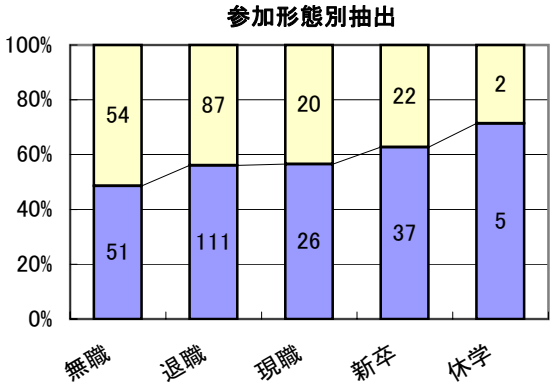
注 Q41で3～4の回答者数514人（89%）を100%とした。

◆「必要だ」（46%、234人）が、「必要ない」（36%、185人）を上回っている。

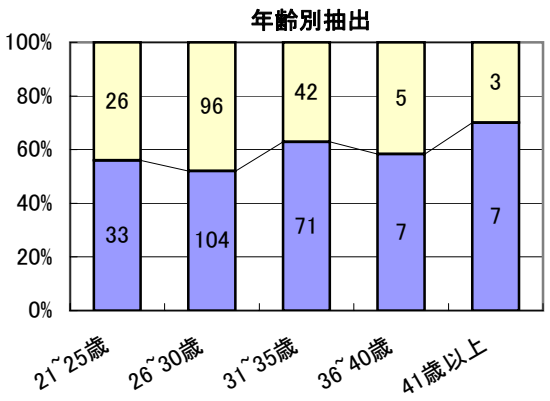




◆「加工」、「保守操作」、「土木建築」では、「必要ない」が、「必要だ」を上回っている。



◆「無職参加」では、「必要ない」が、「必要だ」を上回っている。



Q44 （Q43で1と回答した方に）その理由を教えてください。（複数回答可）

◆ 記述形式。回答者数194人（34%）。主な内容は以下の通りであるが、理由よりも何が必要であるかを記述している回答がほとんどであった。

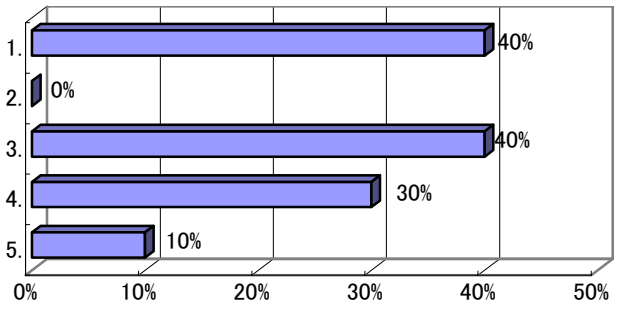
- ▹ 情報提供
- ▹ 講習やスキルアップセミナー
- ▹ JICAや協力隊事業のPR、説明
- ▹ 資料や教材の提供
- ▹ 現状で十分

◆ 回答例

- ・経験を活かせる組織や機会と隊員を繋げる役目や、そのための宣伝を担ってほしい
- ・体験談を聞きたいという人々（学校など）や自治体と隊員との橋渡し
- ・ボランティア経験を人に伝える機会の提供。そのためのプレゼンテーションスキル
- ・帰国時だけでなく、希望者には経験を活かせる活動についての継続的な情報発信を行ってほしい
- ・進路相談、就職支援の充実
- ・帰国後の職探しや進学等の情報を任期の半ばから発信すべきである
- ・求人情報。人材バンクのようなもので適宜、活動の場の紹介や提供を行っては？
- ・セミナーや勉強会の実施。ボランティア先の紹介
- ・ボランティア事業に対する社会への認知度を上げること。知名度や信用度としてのバックアップ
- ・学校や自治体、国民へのアピール。JOCVが遊んでいると思われないようにしっかり説明する
- ・イベントやセミナー等を開催しようとする際の資金支援
- ・今以上に民間企業が持っているノウハウをボランティア事業で活かせる体制を整えてほしい。特に、現職参加をしやすい体制
- ・小学生向けの視聴覚教材の作成等。興味のない人々を巻き込める方法を考えて欲しい
- ・支援は必要ないが、JICAが、隊員の経験をもっと有効に活用するべきである

Q45 （Q41で1～2と回答した方に）その理由を教えてください。（複数回答可）

1. どのように役立ててていいのかわからないから	**4**	40%
2. 時間がないから/忙しいから	**0**	0%
3. 自分の経験が何かの役に立つとは思えないから	**4**	40%
4. 関心がないから	**3**	30%
5. その他	**1**	10%
	10	100%



◆ Q41で1～2の回答者10人（2%)を100%とした。「どのように役立ててていいかわからないから」、「自分の経験が役に立つと思えないから」が、ともに40%（4人）で最多である。

◆ その他回答例

- 個人でやるべき
- 個人レベルで可能である

以上

受入機関へのアンケート調査結果

（平成17年度実施）

１．調査目的

本調査は、ボランティア事業の3つの視点のうち、「途上国の経済及び社会の発展又は復興への寄与」（視点Ⅰ）及び「途上国と我が国との間の友好親善及び相互理解の深化」（視点Ⅱ）が、ボランティアが派遣された受入機関（配属先）のレベルにおいて、どのように達成されているかを測るために実施するものである。

１７年度においては、主に14年度3次隊、15年度1次隊及び15年度2次隊隊員の受入機関関係者のうち、17年3月から18年1月までの期間に回答があった601名を集計の対象として結果を取りまとめた。

２．評価結果概況

調査結果の詳細はそれぞれ別添の通りであるが、視点Ⅰ及び視点Ⅱにおける全体的な概況としては、次の通りである。

（1）視点Ⅰ

ア　活動目標・計画の妥当性

受入機関の90％以上は、赴任当初ボランティアとの間で活動目標について合意し、活動計画の内容についてもほぼ共有していると回答している。さらに、93％の受入機関は活動計画がニーズにほぼ対応していると回答しており、ボランティアの活動計画が役に立つものであったことを示している。

ただし属性毎に見ていくと、教育文化やスポーツの分野で高い評価を得ている一方、土木建築、農林水産分野については活動目標について合意に至らず（ともに17％）、また、受入機関のニーズへの対応度も相対的に低い（「非常にマッチしていた」との回答がともに約60％にとどまっている。）ことがわかる。

イ　活動の有効性

（ア）60％以上の達成度を認めている受入機関は94％を占め、達成度80％以上で78％、また達成度100％と評価した受入機関も19％にのぼっており、ひとたび活動計画が合意されればその活動は高い割合で達成されていると評価している。ボランティアの持つ技術の種類や水準についても高い評価を示しているが、注目すべきは、達成への鍵として、ボランティアの持つ技術力よりも、

良好な人間関係、現地の文化習慣への適応等といった側面をより重要と考えている点である。

（イ） ボランティアの派遣のタイミングについては93％がタイムリーであると回答している一方、派遣期間については短いと感じている受入機関が多い（31％）。特に地域別ではアフリカ、大洋州、また職種分野別では農林水産、保守操作、スポーツの分野で指摘する声が高い。

（ウ） 他の援助機関との比較においては、回答のあった受入機関の過半数がJICA ボランティアの優位性を認めているが、土木建築の分野においては相対的に評価が低い。

ウ 活動のインパクト

受入機関にとっては、ボランティアの派遣により、単に技術面のみならず、本人の仕事に対する姿勢や取り組み方がスタッフへ伝わったことに対する評価も高い。

逆にマイナス面としては、語学やコミュニケーションの問題を指摘している受入機関が散見される。

エ 活動の自立発展性

受入機関の68％は、ボランティアによる活動が継続されると回答している一方、23％の受入機関は、継続されるためにはボランティアと同レベルのスタッフの配置や十分な予算が必要と指摘している。

（2）視点Ⅱ

ア 日本及び日本人に対する理解度

（ア） 日本に対する理解は、ボランティアの派遣により飛躍的に深まっており（「日本についてよく知っている」と回答した者はボランティアの派遣前後で4．5倍高くなっている。）、日本人に対する印象についても同様に高まっている（「非常にポジティブ」と回答した者はボランティアの派遣前後で約2．2倍高くなっている。）。特に変化が大きかったのはアフリカで、また、欧州は「非常にポジティブ」と回答した者の割合が最も高かった。

（イ） 最も理解が深まったのは「仕事に対する姿勢や進め方」（85％の受入機関が回答。）で、さらにはボランティアの存在自体が関係者に変化を与えたとの声も聞かれるなど、日本人の価値観や行動様式が、ボランティアを通じて受入機関関係者に少なからずインパクトを与えていることがわかる。

イ　任国及び任国の人々に対するボランティアの理解度

任国に対するボランティアの理解度については、８７％の受入機関が何らかの理解を深めたと認識しており、その内容として、特に文化習慣や現地語の習得等のコミュニケーションの向上を挙げている。ただし地域毎に見ていくと、アジアでは「あまり理解を深めていない」と指摘する声が１０％を占めている一方、中南米では７３％が「非常に理解を深めた」と回答しており対照的である。

以上

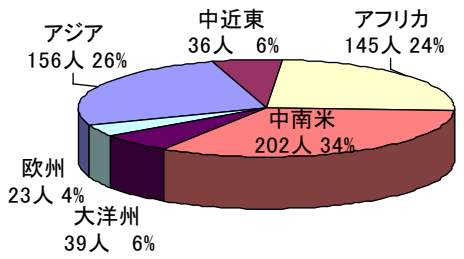
平成17年度　受入機関アンケート調査結果

1.　アンケート実施概要

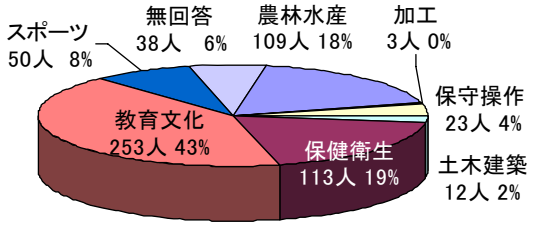
(1) 対象者　：平成17年度に帰国したボランティア（主に14年度3次隊、15年度1次隊、2次隊隊員）の受入機関関係者
(2) 実施方法：在外事務所が主体となり、訪問もしくは郵送や外部委託により行った
(3) 調査項目：「受入機関へのアンケート調査表」（別添1）参照
(4) 回収数　：601通（平成18年1月末日までに回答があったもの）

アンケート回答者（対象ボランティア）の内訳

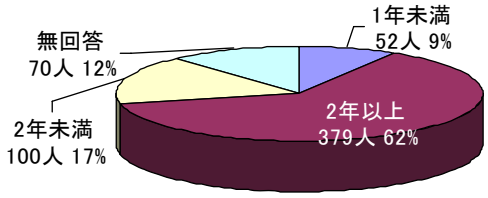
対象ボランティアの派遣地域



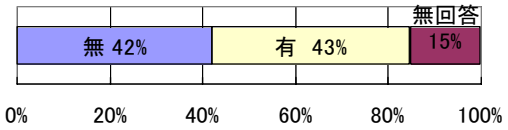
対象ボランティアの職種分野

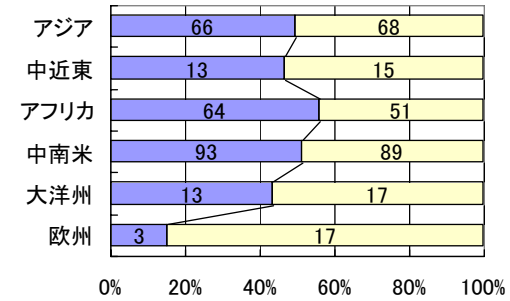


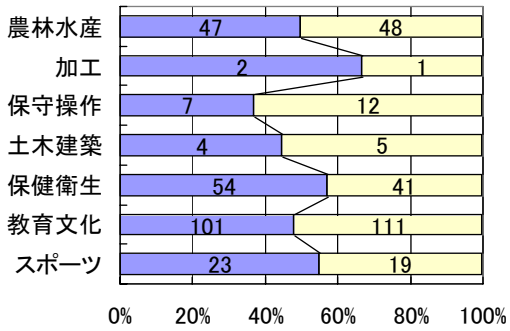
対象ボランティアと働いた期間



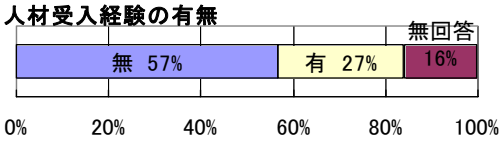
過去のボランティア受入経験の有無

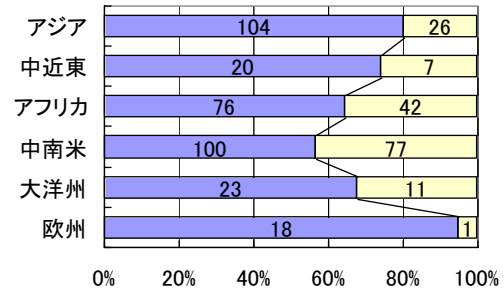


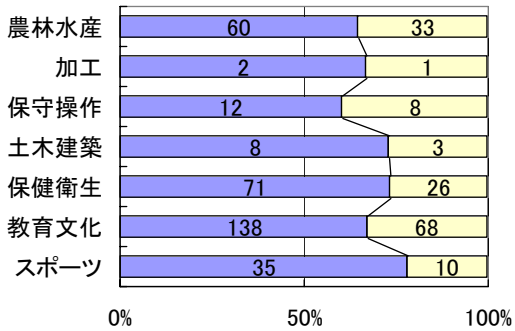




過去の他援助機関からの人材受入経験の有無







2. 調査結果

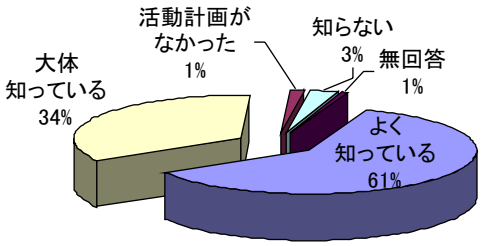
（※各質問に対する回答については「無回答」を含め100%として計算しているが、地域別・職種分野別等の抽出集計については「無回答」を除き100%として計算した。）
（※各質問の回答数、グラフ中の単位は件数）

《視点Ⅰ》開発途上国・地域の経済及び社会の発展または復興への寄与

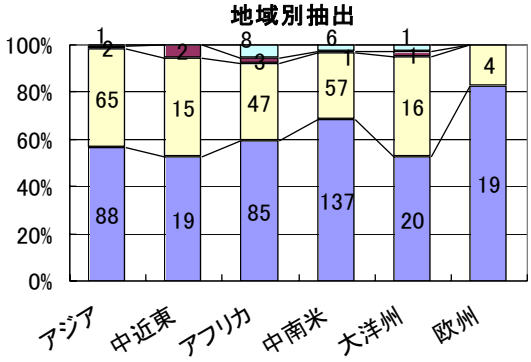
＜活動目標・計画の妥当性について＞

Q1 ボランティアの活動計画の内容を知っていますか

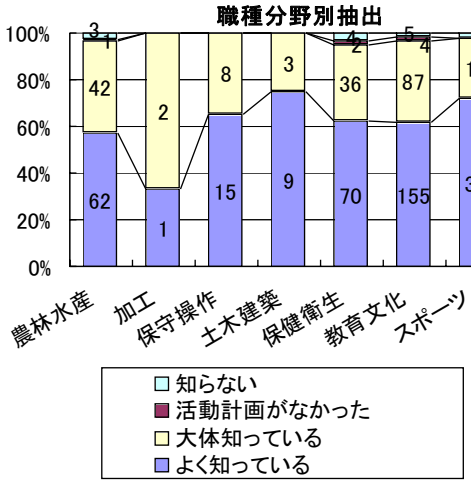
	回答数	
4. よく知っている	368	61%
3. 大体知っている	204	34%
2. 活動計画がなかった	9	1%
1. 知らない	16	3%
無回答	4	1%
	601	100%



◆「よく知っている」、「大体知っている」を合わせると95%（572件）に上り、ボランティアの活動計画の内容は、受入機関に周知されていると言える。



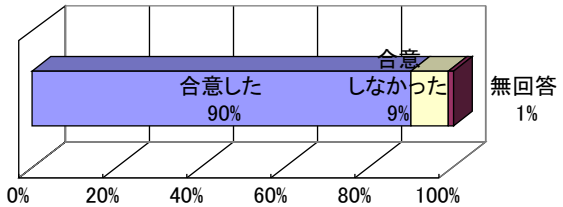
◆ どの地域も、「よく知っている」、「大体知っている」を合わせると90%を超えている。
「欧州」では、80%以上が活動計画の内容を「よく知っている」と回答している。



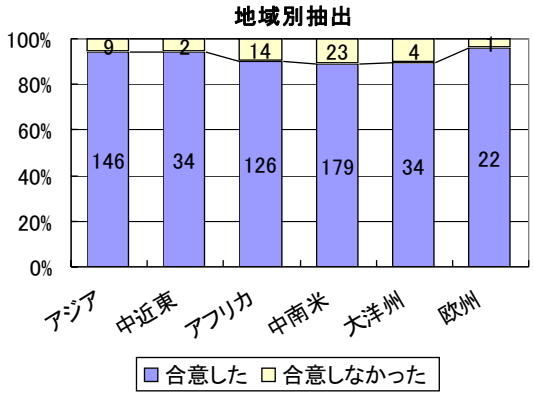
◆ どの職種分野も、「よく知っている」、「大体知っている」を合わせると90%を超えている。

Q2. 活動の初期段階で、ボランティアと活動の目標について合意しましたか。

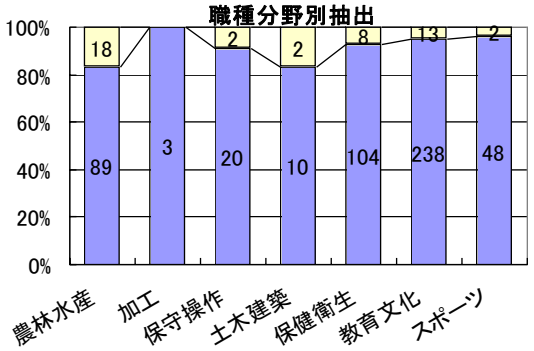
	回答数	
1. 合意した	541	90%
2. 合意しなかった	53	9%
無回答	7	1%
	601	100%



◆ 初期の段階で90%（541件）が活動の目標について合意している。



◆ どの地域も、80%以上が活動目標について合意している。



◆ どの職種分野も、80%以上が活動目標について同意している。

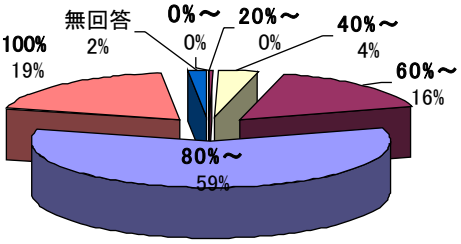
Q3 （Q2で「合意した」と回答した方に）合意したボランティアの活動の目標をお書き下さい。

◆ 記述形式。回答数469件（回答総数の78%。以下記述形式質問内の表示も同じ）。
◆ 約5割が、「当該分野での専門的指導・普及」、約3割が「技術移転・促進」を目標としている。「プロジェクトの企画立案から実施まで」や、「組織運営の改善・提案」など、その内容は多岐に渡っている。
◆ 「両国間の文化や経験の交流・理解」も目標として挙げられている。

＜活動の達成度・有効性＞

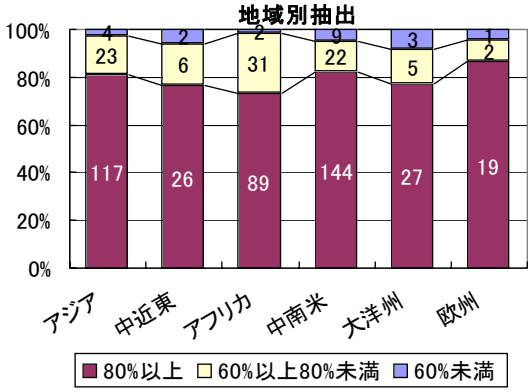
Q4 （Q2で「合意した」と回答した方に）合意したボランティアの活動内容はどの程度達成されましたか？あてはまる箇所に○をつけて下さい。（6段階で）

		回答数	
1.	0%～	0	0%
2.	20%～	1	0%
3.	40%～	20	4%
4.	60%～	89	16%
5.	80%～	317	59%
6.	100%	105	19%
	無回答	9	2%
		541	100%

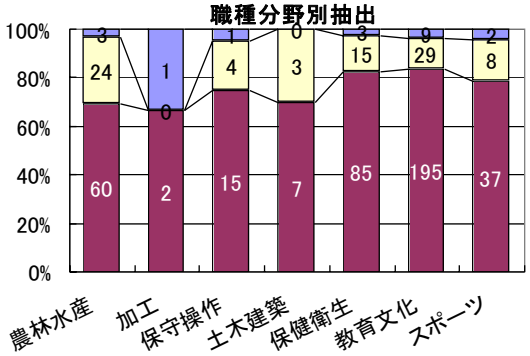


注 Q2で「合意した」の回答数541件（回答総数の91%。以下注内表示も同じ）を100%とした。

◆ 「80%以上」の達成度と回答した者は78%（422件）、「100%」の回答も19%（105件）を占めており、合意した目標に対する達成度は極めて高いと言える。



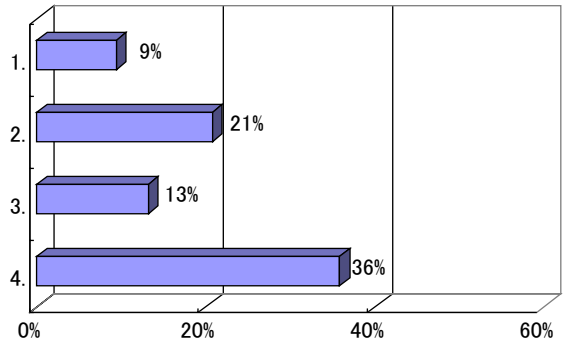
◆ どの地域も、7割以上が「80%以上」の達成度と回答している。



◆ 「保健衛生」、「教育文化」では、8割以上が「80%以上」の達成度と回答している。

Q5 **（Q2で「合意しなかった」と回答した方に）その理由・背景は何ですか。（複数回答可）**

	回答数	
1. 活動内容が期待・ニーズと違ったので合意できなかった	**5**	9%
2. 合意する必要がなかった	**11**	21%
3. 目標を立てにくい活動内容だったので、敢えて目標を立てなかった	**7**	13%
4. その他	**19**	36%
	53	100%



注 Q2で「合意しなかった」の回答数53件（9%）を100%とした。

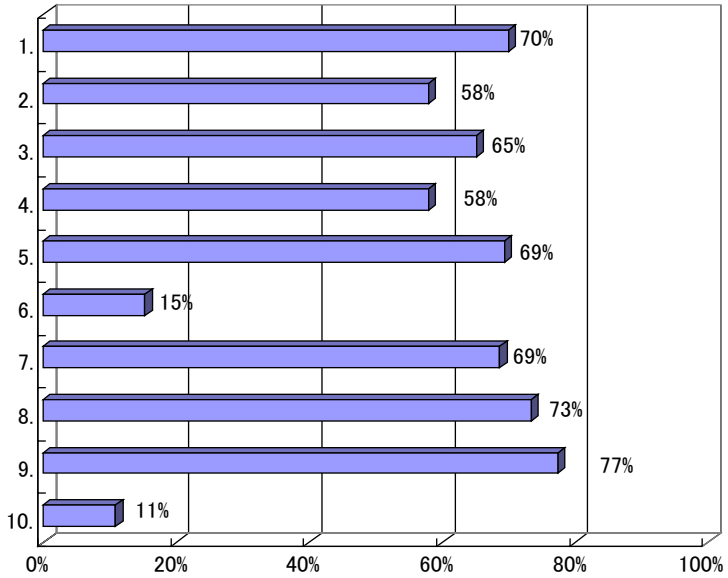
◆ 合意しなかった理由として、「合意する必要がなかった」（11件、21%）が最も多く挙げられている。

◆ その他回答例

- 言語、コミュニケーションの問題
- ボランティアの存在をただ知らされ、歓迎しただけだった
- ボランティア自身のやり方を持っていたように思えたのでそれを邪魔したくなかった
- 活動開始当初、我々を参加させなかった
- 目標も活動内容も、明確でなく始まった
- 地域の状況を考慮して、活動計画を作成すべきである

Q6　（Q4で達成状況が60%～100%と回答した方に）達成状況が60%以上になった理由は何ですか？（複数回答可）

	回答数	
1. 組織として協力したから	366	70%
2. ボランティアの同僚（カウンターパート）が熱心だったから	303	58%
3. ボランティアの指導力・積極性が高かったから	341	65%
4. ボランティアの技術力が高かったから	303	58%
5. 活動の内容がニーズと合っていたから	363	69%
6. 活動の内容がニーズと合っていなかったが、調整してニーズの合う活動ができたから	80	15%
7. ボランティアとの意思疎通やコミュニケーションがうまくできた	359	69%
8. ボランティアが現地の文化・習慣に馴染むことができたから	384	73%
9. ボランティアとその同僚（カウンターパート）や関係者との人間関係が非常によかったから	405	77%
10. その他	57	11%
	523	100%



注 Q4で合意した目標の達成状況が60%～100%の回答数523件（87%）を100%とした。

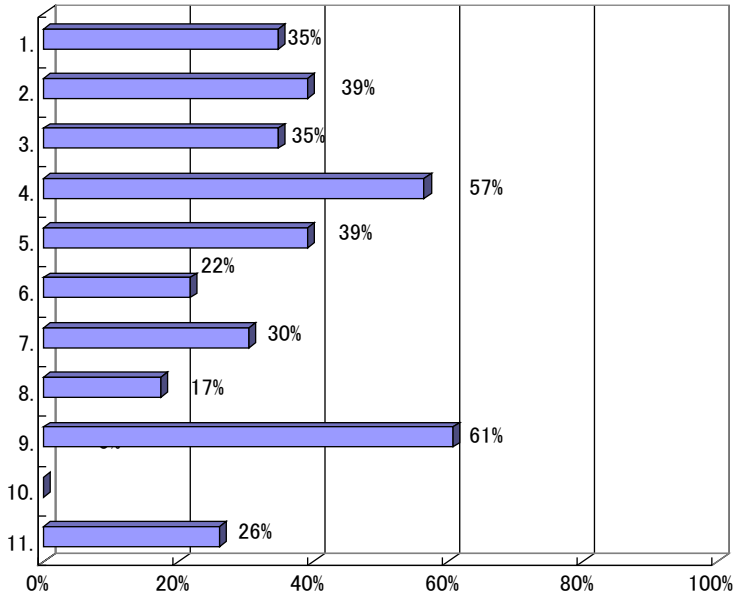
◆「ボランティアとその同僚（カウンターパート）や関係者との人間関係が良かったから」（77%、405件）が最多。「ボランティアが現地の文化、習慣に馴染むことができたから」（73%、384件）が続く。

◆ その他回答例

- 献身的、誠実、時間を守り、素晴らしい手本であった
- 目的達成のために余暇を惜しまずがんばった
- お互いの言語を学びあった
- 継続的進展のための、ボランティアの配置に配慮が見られた
- ボランティアは地域機関や組織ととてもよい協力をした
- 生徒達とよい関係を築き、生徒達はボランティアの授業が好きだった

Q7　（Q4で達成状況が60%未満の方に）その理由は何ですか。（複数回答可）

	回答数	
1. ボランティアが積極的でなかった	8	35%
2. ボランティアの技術力が低かった	9	39%
3. 活動内容がニーズと合っていなかった	8	35%
4. ボランティアと受入機関との意思疎通やコミュニケーションがうまくできなかったから	13	57%
5. ボランティアが現地の文化・習慣に馴染むことができなかったから	9	39%
6. ボランティアとその同僚（カウンターパート）との人間関係がよくなかったから	5	22%
7. ボランティアが体調を崩してしまったから	7	30%
8. 技術移転の対象者がいなかったから	4	17%
9. 活動に不可欠なものがなかった、調達できなかったから	14	61%
10. 派遣期間中に配属先や活動先が変更になったから	0	0%
11. その他	6	26%
	23	100%



注 Q4で合意した目標の達成状況が60%未満の回答数23件（4%）を100%とした。

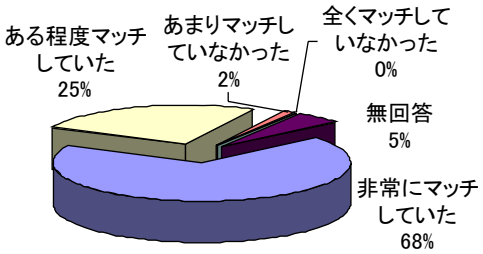
◆「活動に不可欠なものがなかった、調達できなかった」（61%、14件）が最多。「ボランティアと受入機関との意思疎通やコミュニケーションがうまくできなかったから」（57%、17件）が続く。

◆ その他回答例

- ボランティアが仕事環境に慣れなかった
- 配属先に十分な情報が入ってこなかった
- 活動経費の欠如
- 試合出場の交通手段が確保できない
- 病気がちだった

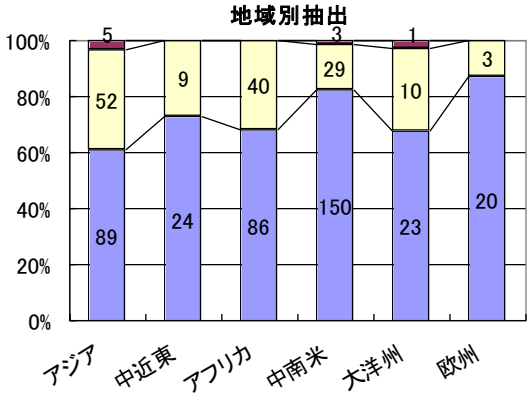
Q8　（Q1で3～4と回答した方に）ボランティアの活動計画はあなたの組織のニーズに対応していましたか。

	回答数	
4. 非常にマッチしていた	392	68%
3. ある程度マッチしていた	143	25%
2. あまりマッチしていなかった	9	2%
1. 全くマッチしていなかった	0	0%
無回答	28	5%
	572	100%

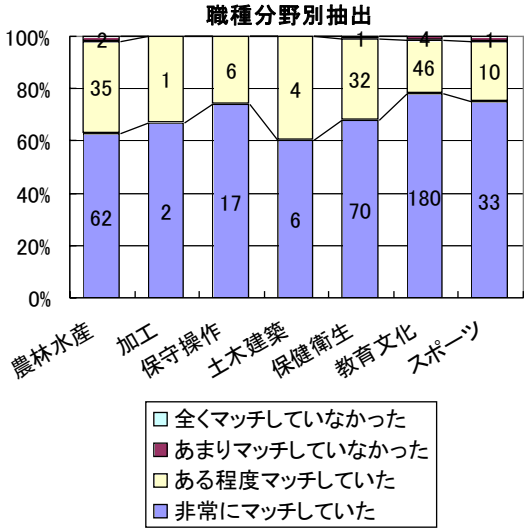


注 Q1で3～4（活動計画の内容を知っている）の回答数572件（95%）を100%とした。

◆「非常にマッチしていた」、「ある程度マッチしていた」を合わせると93%（535件）に上り、受入機関に周知されたボランティアの活動計画はそのニーズにも対応していたといえる。



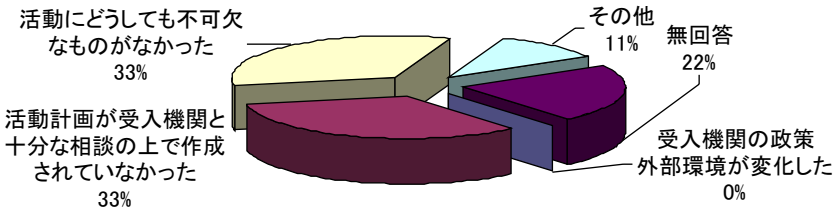
◆ どの地域も、「非常にマッチしていた」は60%を超えている。
特に「中南米」、「欧州」では、「非常にマッチしていた」が80%を超えている。



◆ どの職種分野も、「非常にマッチしていた」は、60%を超えている。

Q9　（Q8で1～2と回答した方に）その理由を教えてください。
（1番大きな理由を選んでください）

	回答数	
1. 受入機関の政策、外部環境が変化した	0	0%
2. 活動計画が受入機関と十分な相談の上で作成されていなかった	3	33%
3. 活動にどうしても不可欠なものがなかった	3	33%
4. その他	1	11%
無回答	2	22%
	9	100%

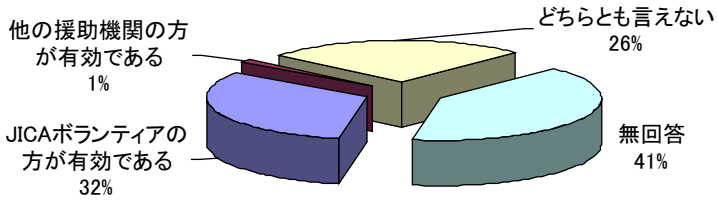


注「Q8で1～2（マッチしていなかった）」の回答数9件を100%とした。

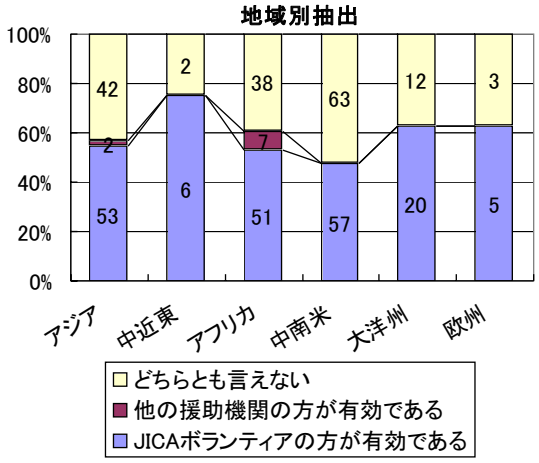
◆ 活動計画がニーズとマッチしなかった理由については、「活動計画が受入機関と十分な相談の上で作成されていなかった」、「活動にどうしても不可欠なものがなかった」がともに33%(3件）で最多。

Q10　（他の援助機関の協力を受入れた経験のある場合）他の援助機関と比べて、JICAボランティア派遣は？

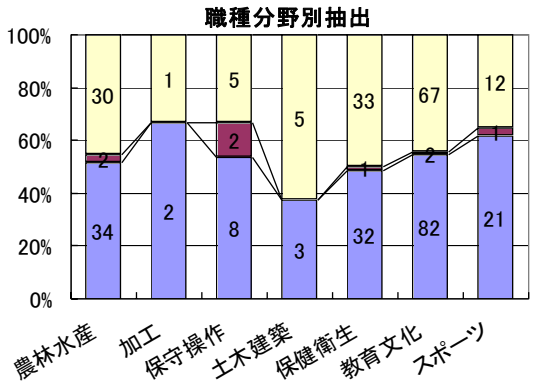
	回答数	
1. JICAボランティアの方が有効である	192	32%
2. 他の援助機関の方が有効である	9	1%
3. どちらとも言えない	158	26%
無回答	242	41%
	601	100%



◆ 受入機関の32%（192件）が「JICAボランティアの方が有効」と回答しており、「他の援助機関の方が有効」は1%（9件）のみであった。



◆「アフリカ」では、約7%が「他の援助機関の方が有効」としている。



Q11 その理由をお書き下さい。

◆ 回答例

●「JICAボランティアの方が有効である」

- 仕事に対する意欲、責任感がある。効率的で技術もある
- 他国のボランティアと比べて勤勉
- 現地語を話せる
- 現地の社会生活や、目的を明確にするために、調和する資質がある
- よく管理され、適切な計画によって多くの達成がなされている
- JICAのサポートがしっかりしている
- ボランティア、配属先がお互いの活動を把握している
- 配属先及び受益者と良好な関係を築いている
- お互いに共通の価値観（アジア人であること）がある

●「他の援助機関の方が有効である」

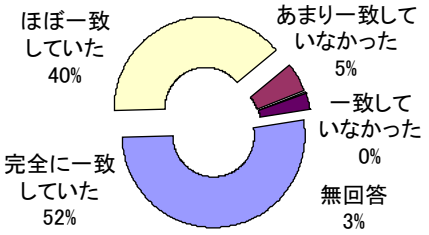
- JICAボランティアは、他国ボランティアやNGO、他援助機関のように必要な活動経費を持っていない
- JICAボランティアは、コミュニケーションに問題がある
- 他機関の方が誠意があり、積極的

●「どちらとも言えない」

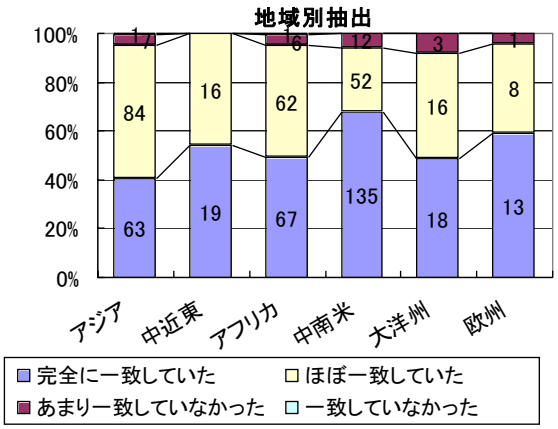
- 協力のタイプ、分野が異なるので比較できない
- ボランティアの仕事を他機関の資金支援と比べることは難しい。
- JICAボランティアは知識、技術があるが、他機関は親切で資金がある
- 各機関のボランティアは行動的で、よく働き職務に強い責任感を持ち、効率よく働く
- 全てのボランティアは、国に関わらず効果的で支援してもらっている

Q12 ボランティアの技術の種類は受入機関の必要としていた技術に一致していましたか。

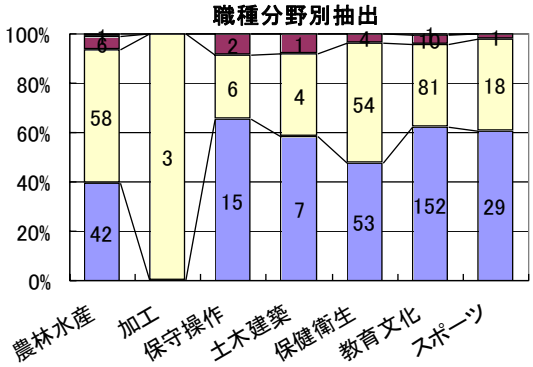
	回答数	
4. 完全に一致していた	315	52%
3. ほぼ一致していた	238	40%
2. あまり一致していなかった	29	5%
1. 一致していなかった	2	0%
無回答	17	3%
	601	100%



◆「完全に一致していた」、「ほぼ一致していた」を合わせると、92%（553件）が技術の種類が一致していたと回答している。



◆ どの地域も、「完全に一致していた」、「ほぼ一致していた」を合わせると90%を超えている。



◆ どの職種分野も、「完全に一致していた」、「ほぼ一致していた」を合わせると90%を超えている。

Q13 （Q12で1～2と回答した方へ）一致しなかった内容を教えてください。

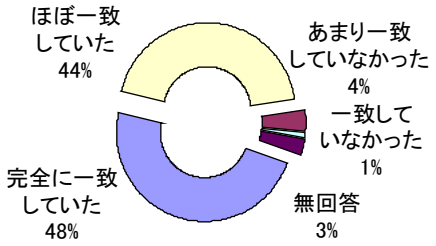
注 記述形式。
◆「コミュニケーション問題」はここでも一因として挙げられている。

◆ 回答例

（要請した技術の種類）	➡（ボランティアの有していた技術の種類）
・ 言語知識があること	➡ 限られた英語のみであった
・ 指導技術、プロジェクト管理	➡ 指導技術のみ

Q14 ボランティアの技術水準は受入機関の必要としていたレベルに一致していましたか。

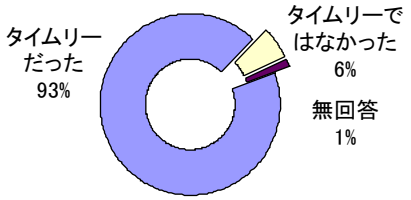
	回答数	
4. 完全に一致していた	288	48%
3. ほぼ一致していた	267	44%
2. あまり一致していなかった	23	4%
（技術が高すぎた	4）	
（技術が低かった	13）	
1. 一致していなかった	5	1%
（技術が高すぎた	1）	
（技術が低かった	3）	
無回答	18	3%
	601	100%



◆「完全に一致していた」、「ほぼ一致していた」を合わせると92%（555件）となり、技術の種類同様、必要とされていたレベルに一致していたといえる。

Q15 ボランティアが派遣されたタイミングはタイムリーでしたか。

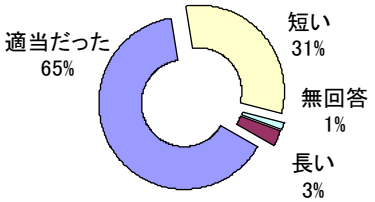
	回答数	
2. タイムリーだった	557	93%
1. タイムリーではなかった	35	6%
無回答	9	1%
	601	100%



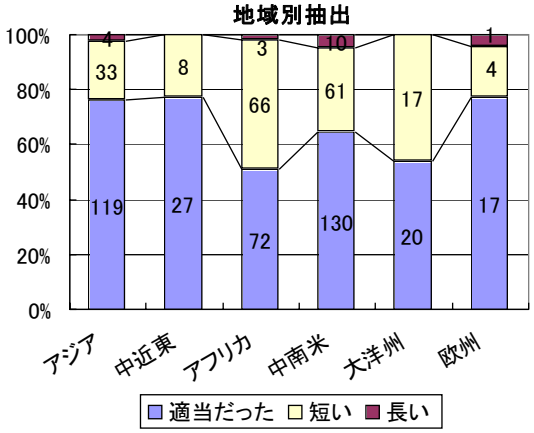
◆ 93%（557件）が、ボランティアの派遣されたタイミングは「タイムリーだった」と回答している。

Q16 ボランティアの派遣期間は適当でしたか。

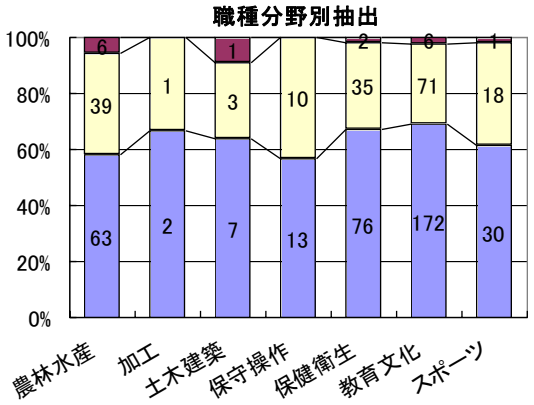
	回答数	
1. 長い	18	3%
2. 適当だった	385	65%
3. 短い	189	31%
無回答	9	1%
	601	100%



◆ 31%（189件）が「ボランティアの派遣期間は短い」と感じている。



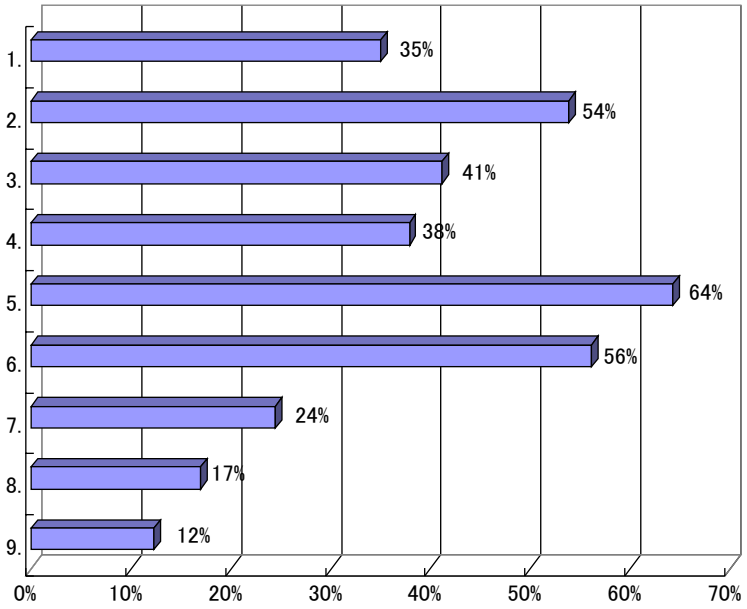
◆「アフリカ」、「大洋州」では、「短い」が50%近くに及んでいる。



＜活動のインパクト＞

Q17 ボランティアが派遣されたことでプラスとなった点は何ですか。（複数回答可）

	回答数	
1. 受入機関の方針、体制、システムの改善	211	35%
2. 受入機関のサービス・活動内容や規模の拡大	324	54%
3. 新規サービス・活動の開始	248	41%
4. 受入機関の広報効果、認知度の向上	228	38%
5. スタッフの技術・能力の向上	387	64%
6. 日本人の仕事への姿勢や取り組み方のスタッフへの影響	338	56%
7. 受入機関のインプットの改善（予算配分、人員配置、資機材など）	147	24%
8. 受入機関がサービスを提供する相手への効果	102	17%
9. その他	74	12%
	601	100%

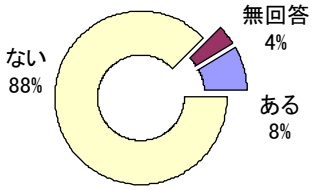


注 回答総数601件を100%とした。

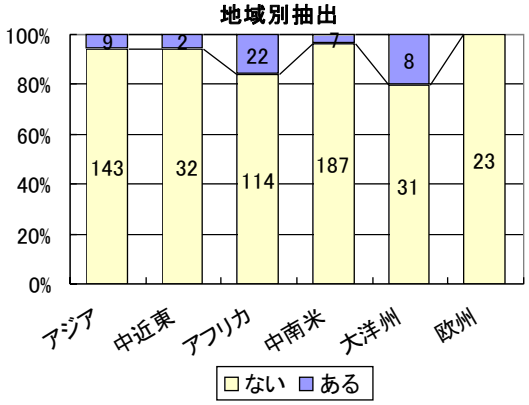
◆「スタッフの技術、能力の向上」（64%、387件）とともに、「日本人の仕事への姿勢や取り組み方のスタッフへの影響」（56%、338件）がプラスになった点として挙げられている。

Q18 ボランティアが派遣されたことでマイナスとなった点はありますか。

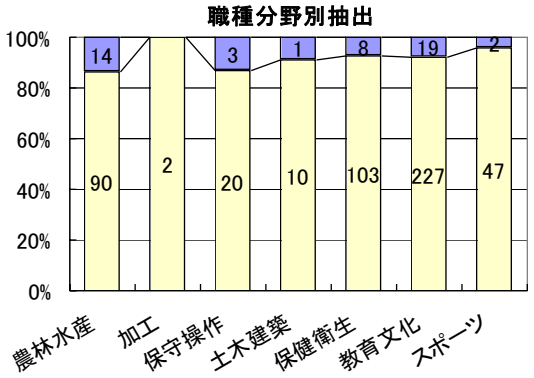
	回答数	
1. ある	48	8%
2. ない	530	88%
無回答	23	4%
	601	100%



◆「マイナスとなった点がある」と回答したのは8%（48件）である。。



◆「大洋州」(21%)、「アフリカ」（16%)は、「マイナスとなった点がある」の割合が他地域に比べ高い。



◆「農林水産」、「保守操作」（ともに13%）は「マイナス点となった点がある」の割合が他の職種分野に比べ高い。

Q19 （Q18で1と回答した方に）マイナスとなった点を以下にお書きください。

◆ 記述形式。回答数48件（8%）。主な内容は以下の通り。
- ▹ 語学力の不足、コミュニケーション問題
- ▹ 任期が短い、派遣時期のタイミングが悪い
- ▹ 文化･考え方の相違、住居の確保、健康状態

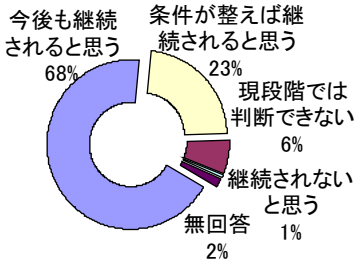
◆ 回答例

- ・言葉の面で不十分であり、コミュニケーションが難しい。語学研修の不足
- ・担当分野における広範な知識の欠如。コミュニケーションの困難さ
- ・年度の途中に来て、帰ってしまう
- ・仕事環境に慣れ始めたら任期が終わってしまう
- ・要請から時間が経ってから派遣された
- ・意思の疎通及び向上心の不足
- ・JOCVの住居の用意は、思っていたほど簡単ではなかった
- ・日本人の人生観、価値観、恋愛観にマイナスの影響が与えられた

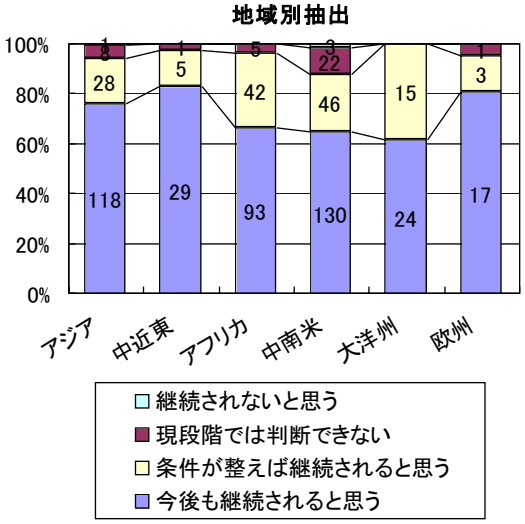
＜活動の自立発展性＞

Q20 ボランティアが従事した活動の今後の見込みはどうですか。

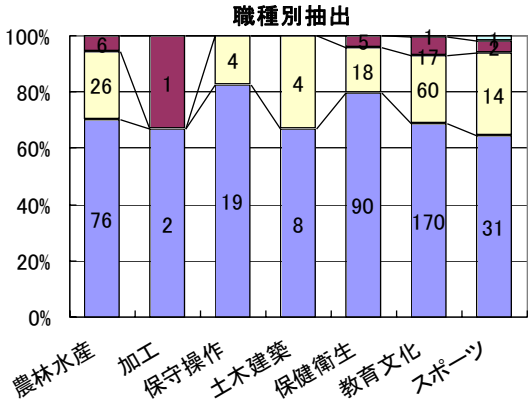
	回答数	
1. 今後も継続されると思う	411	68%
2. 条件が整えば継続されると思う	139	23%
3. 現段階では判断できない	37	6%
4. 継続されないと思う	4	1%
無回答	10	2%
	601	100%



◆ 68%（411件）が「今後も継続されると思う」と回答。また、23%（139件）が「条件が整えば継続されると思う」としている。



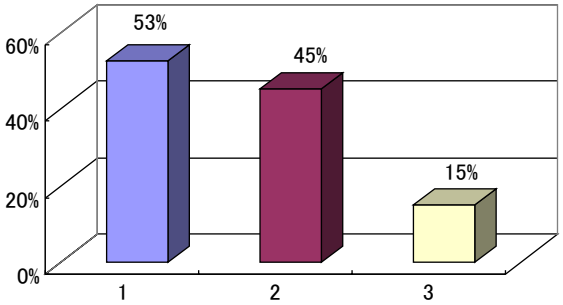
◆「中近東」、「欧州」では、「今後も継続されると思う」が80%を超えている。
◆「大洋州」は38%、「アフリカ」は30%が、「条件が整えば継続する」としている。



◆「保守操作」、「保健衛生」では、「今後も継続されると思う」が約80%に及ぶ。
◆「土木建築」（33%）、「スポーツ」（29%）は、「条件が整えば継続されると思う」の割合が約30%を占める。

Q21 （Q20で2と回答した方に）条件は何ですか。（複数回答可）

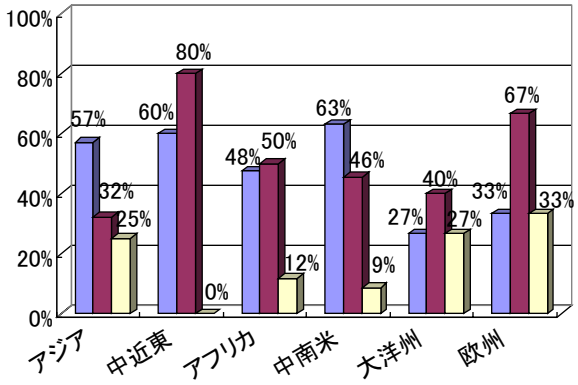
	回答数	
1. ボランティアと同レベルの技術や能力を有するスタッフがいること	**73**	53%
2. 予算が十分にあること	**63**	45%
3. その他（具体的に）	**21**	15%
	139	100%



注 Q20で2（条件が整えば継続されると思う）との回答数139件（23%）を100%とした。

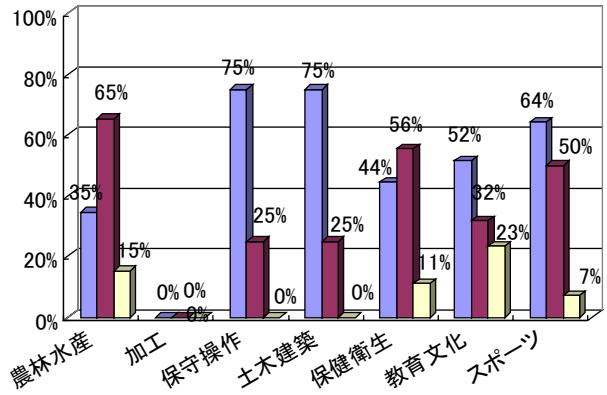
◆ 条件として、「ボランティアと同レベルの技術や能力を有するスタッフがいること」が、53%（73件）に挙げられ、技術を持った人的要素が求められている。

地域別抽出



◆「中近東」（80%）、「欧州」(67%)では、人的要素よりも、「予算が十分にあること」が最も強く求められている。

職種分野別抽出



◆「農林水産」、「保健衛生」では、人的要素よりも、「予算が十分にあること」が最も強く求められている。

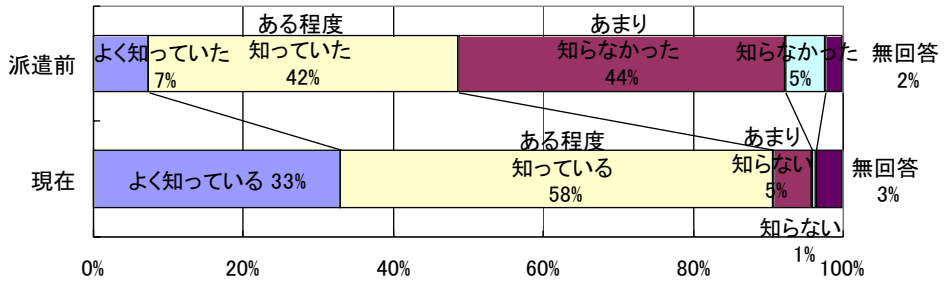
《視点Ⅱ》 開発途上国･地域と我が国との間の友好親善及び相互理解の深化

＜日本及び日本人に対する理解度＞

ボランティア活動やその他の活動結果、スタッフの日本に関する理解や知識がどのように変化したと思いますか。ボランティアが派遣される前と現在を比較してください。

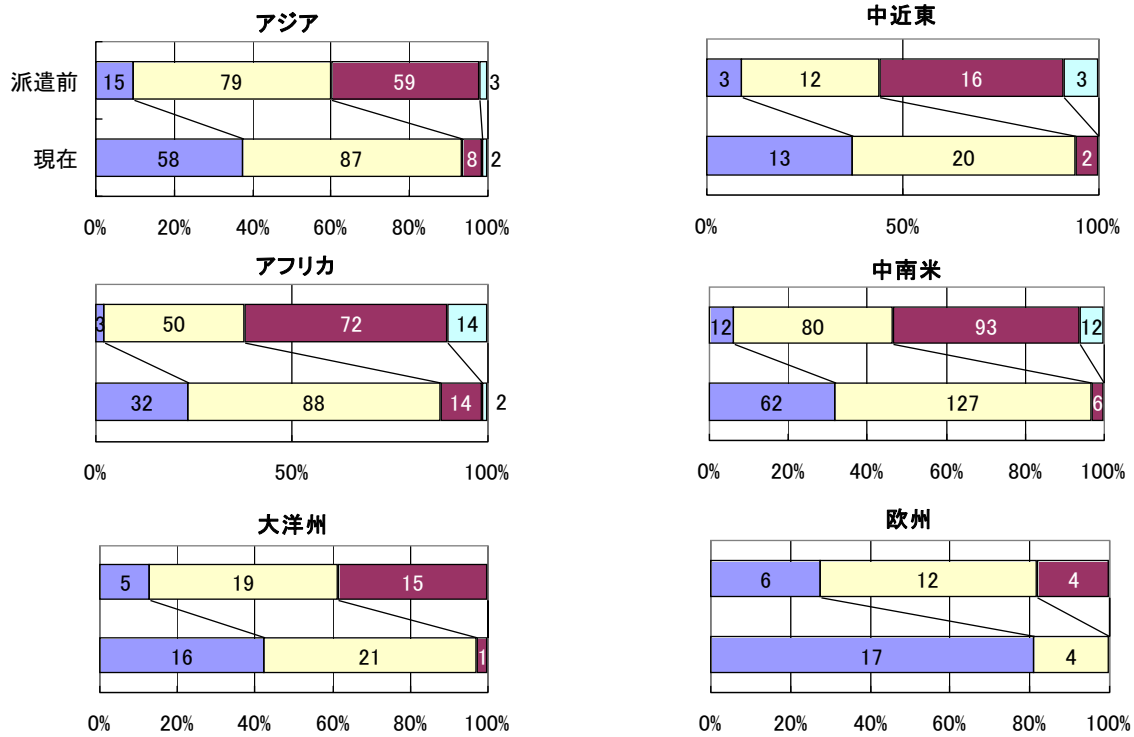
Q22 派遣前、スタッフは日本について･･･ *Q23* 現在、スタッフは日本について･･･

	派遣前		現在	
4. よく知っていた	44	7%	198	33%
3. ある程度知っていた	252	42%	347	58%
2. あまり知らなかった	259	44%	31	5%
1. 知らなかった	32	5%	4	1%
無回答	14	2%	21	3%
	601	100%	601	100%



◆「よく知っていた」、「ある程度知っていた」を合わせると、派遣前の49%（296件）から、現在は91%（545件）へと大きく伸び、日本に関する認識が非常に深まっていることがわかる。

地域別抽出



◆「中近東」、「アフリカ」、「中南米」では、「よく知っていた」、「ある程度知っていた」を合わせると、2倍以上の大きな伸びを示し、日本に関する認識の深まりがより表れている。

Q24 **スタッフの日本に関する理解や知識がどのように変化したのか、具体的にお書き下さい。**

◆ 記述形式。回答数457件（76%）。主な内容は以下の通り。

◆「日本の文化や生活、習慣、歴史、経済などに関する知識が増えた、理解が深まった」、「仕事への姿勢、取り組み方を学んだ」といった内容が多数を占めた。

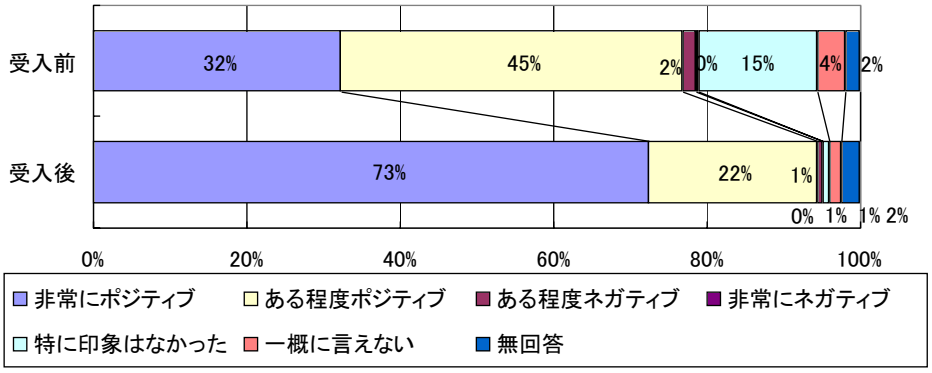
◆ 回答例

- 知識が深まっただけでなく、日本文化への理解が改善された
- 日本人の謙虚さがあったから、今日のように発展していると理解している
- 日本は技術的に進んだ国としか知らなかったが、日本人と非常に身近で働くことによって、仕事に対する積極的な姿勢、責任感、文化等を理解する機会となった
- 日本人は実に勤勉で、目標に合う方法で活動を計画する。スタッフはこのような機会に感謝し、見習っている
- 日本国民の税金による供与機材を大切に使用するようになった
- 時間とともに、日本人と中国人の違いが分かるようになった

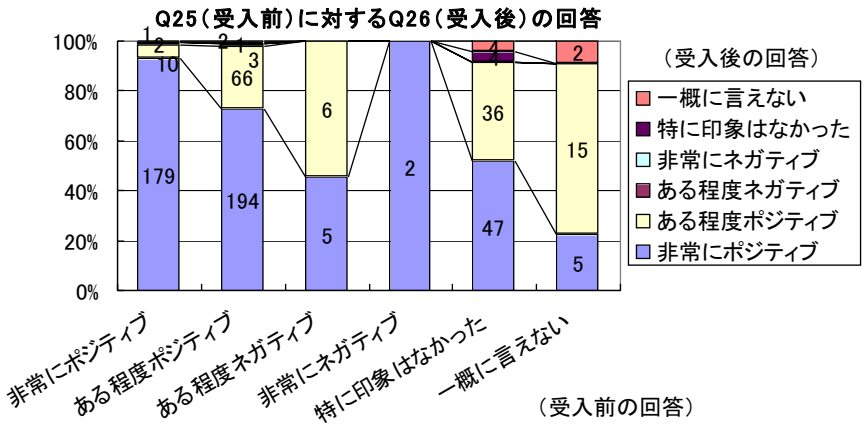
ボランティア受入前に比べて、日本や日本人についての印象は？

Q25 **受入前**　　*Q26* **受入後**

	受入前		受入後	
6. 非常にポジティブ	194	32%	434	73%
5. ある程度ポジティブ	267	45%	133	22%
4. ある程度ネガティブ	11	2%	5	1%
3. 非常にネガティブ	2	0%	0	0%
2. 特に印象はなかった	93	15%	5	1%
1. 一概に言えない	22	4%	9	1%
無回答	12	2%	15	2%
	601	100%	601	100%

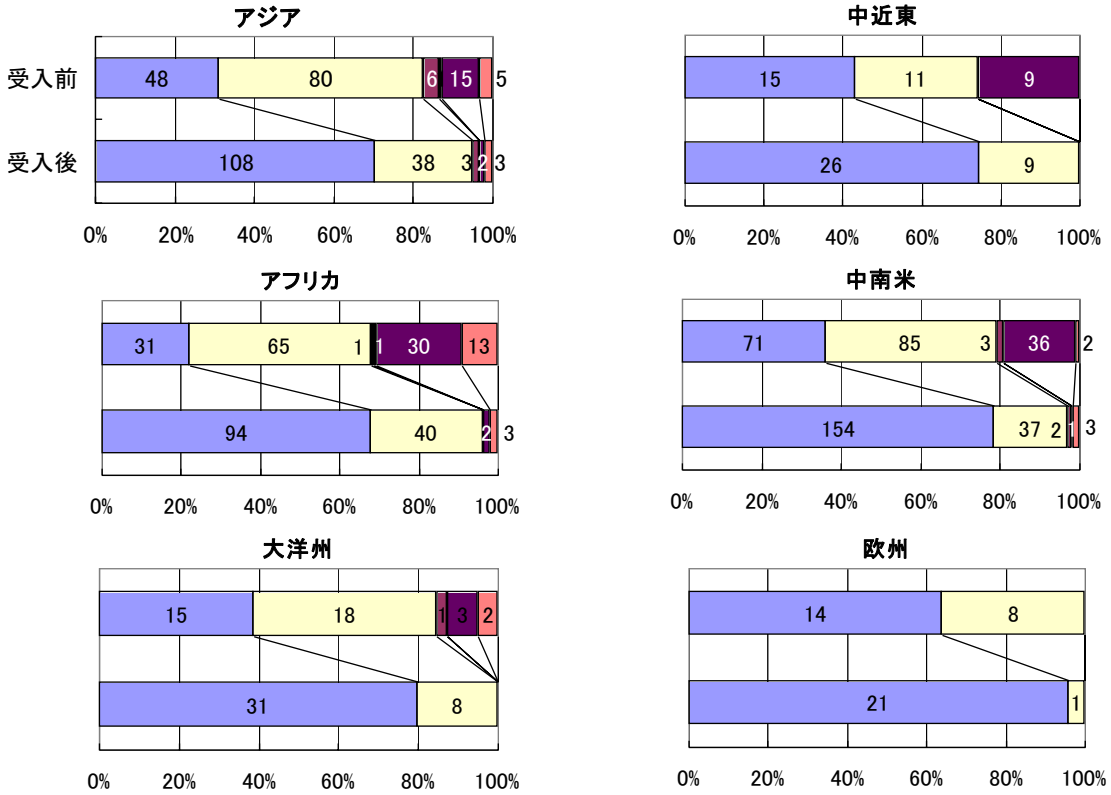


◆「非常にポジティブ」は、ボランティア受入前の32%（194件）から、受入後は73%（434件）に大きく伸びている。「ある程度ポジティブ」を合わせると、77%(461件）から95%（567件）に伸び、ボランティアの受入によって、日本や日本人の印象はポジティブに変化していることがわかる。



◆「ネガティブ」な印象は、そのすべてが「ポジティブ」な印象へ変化している。しかし一方で、「ポジティブ」から「ネガティブ」への変化もわずかであるが見られる。

地域別抽出



◆ どの地域も、受入後はポジティブな印象が大きく伸びている。

Q27 受入前と受入後に変化があった場合、その主な理由は何ですか。

◆ 記述形式。回答数332件(55%)。主な内容は以下の通り。

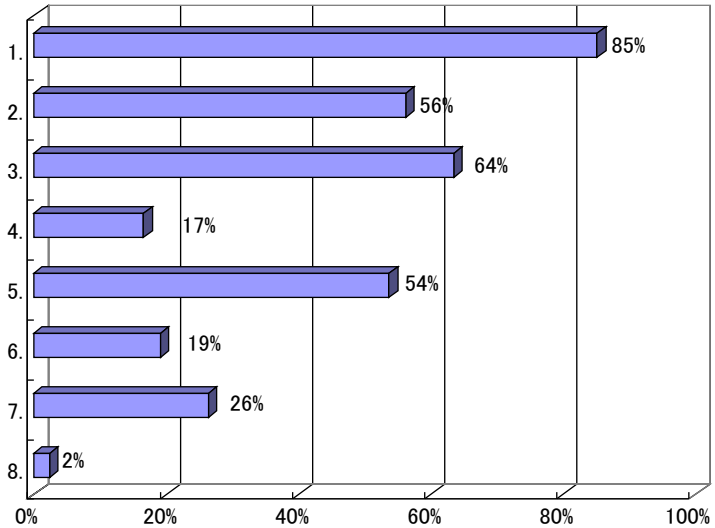
◆「仕事へのその姿勢や取り組み方」、「技術や経験、活動の成果」が多数挙げられ、ボランティアの活動が日本や日本人に対する印象の変化に大きな影響を与えていることがうかがえる。

◆ 回答例

- ボランティアがどれだけ一生懸命に打ち込んできたかを見ることができた
- ボランティアの率先する気持ちや姿勢が、地域スタッフによい効果を与えた
- ボランティアは勤勉で、仕事における時間厳守と責任感を示した
- 遠い国からの派遣されているにもかかわらず、ボランティアが私達の国を向上させるために日々努力してくれた姿に感動した
- 仕事中、時間外両方での、ボランティアとスタッフ間の相互影響が理解を深めた
- 2年間の共同生活、仕事を通じ、深い友情を結べた
- 話しでは聞いていたが、実際に一緒に働くことができたから
- 開発途上国を支援する日本の強い気持ちを感じとることができた
- ボランティアの存在が、地域住民や配属先スタッフの参加を一層促した
- 日本人は、よい仕事観を持つと思っていたが、現在は確かではなくなった
- 意思の疎通を欠いた

Q28 **ボランティアを通して、日本や日本人について知識・理解を深めたことは何ですか。（複数回答可）**

	回答数	
1. 仕事に対する姿勢や仕事の進め方	**512**	85%
2. 当該分野の日本の技術や制度	**338**	56%
3. 日本人の生活･行動様式	**382**	64%
4. 日本の政治や経済	**100**	17%
5. 日本の文化	**323**	54%
6. 日本の地理や歴史	**115**	19%
7. 日本語	**159**	26%
8. その他（具体的に）	**15**	2%
	601	100%



注 全回答数601件を100%とした。

◆「仕事に対する姿勢や仕事の進め方」（85%、512件）が圧倒的に最多。次いで、「日本人の生活・行動様式」（64%、382件）が続く。ボランティアの活動や日常の生活によって、日本人の価値観や行動様式が広く伝わっていることがうかがえる。

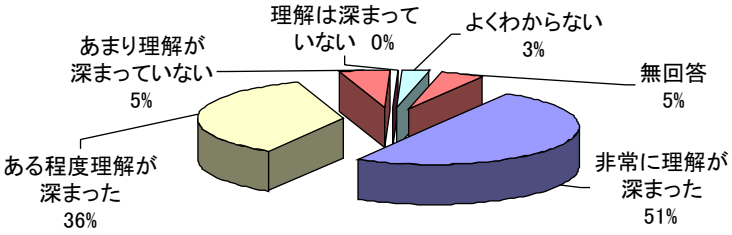
◆ その他回答例

- 日本人の正直な性格と、人への思いやりを痛感した。
- 日本人は非常に控えめで礼儀正しい

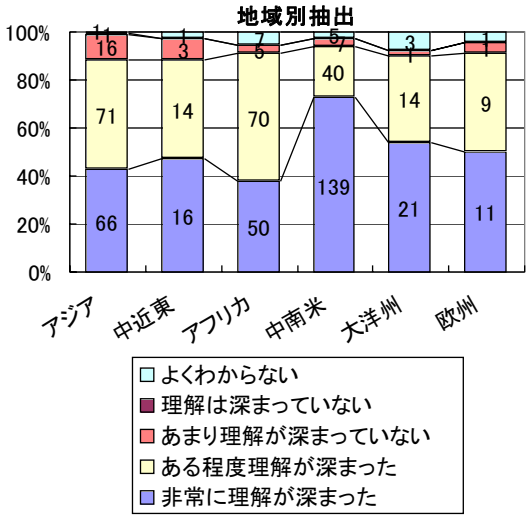
＜任国及び任国の人々に対する理解度＞

Q29 ボランティアは任国についてどの程度理解が深まったと思いますか？

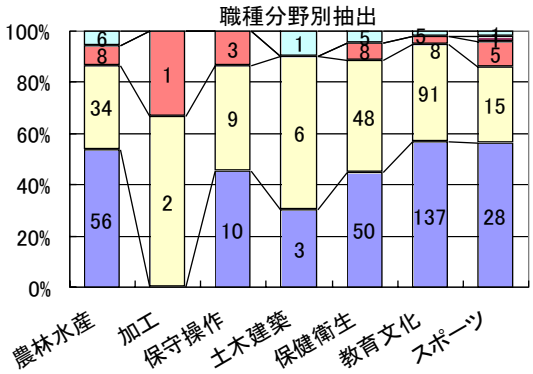
	回答数	
5. 非常に理解が深まった	303	51%
4. ある程度理解が深まった	218	36%
3. あまり理解が深まっていない	33	5%
2. 理解は深まっていない	1	0%
1. よくわからない	18	3%
無回答	28	5%
	601	100%



◆「非常に理解が深まった」、「ある程度理解が深まった」を合わせると87%（521件）。ほとんどの受入機関は、ボランティアが任国の理解を深めたと感じている。



◆「中南米」は、「非常に理解が深まった」が70%を超え、他地域を大きく上回っている。
◆一方で、「あまり理解が深まっていない」は、「アジア」が10%超で、他地域に比べ高い。



◆「教育文化」は、「非常に理解が深まった」、「ある程度理解が深まった」を合わせると95%に上り、他の職種分野に比べ高い。

Q30 （Q29で4～5と回答した方に）どのような点で理解が深まったのかお書き下さい。

◆ 記述形式。回答数450件(75%)。主な内容は以下の通り。

◆「習慣や文化、生活様式に関する理解が深まった」という内容が大多数を占めた。また、「言語」に関する言及も多く、ボランティアの学ぼうとする積極的な姿勢や上達について挙げられている。

◆ 積極的な習慣や文化への理解と、言語によるコミュニケーションが、派遣国についての理解を深める大きな要因として捉えられているようである。

◆ 回答例

- ボランティアの理解は、新しい環境をまねることによって深まった
- ボランティアは周囲のあらゆることを知り、学ぼうとしていた
- 慣習や文化を理解し、食事を楽しむこともできた
- 地域の人々ととてもよく付き合い、現地食を食べ、現地語をよく学んだ
- 地域家族と生活し、生活や文化のあらゆることを経験した。仕事や文化だけでなく、社会経済の問題を話すことで文化や伝統などについて理解を深めた
- 現地語を学び、管理行程や管理システム、国の政治をも理解した
- 仕事の技量や意欲に関する違いを認識したと思う
- 国や文化を理解するためには、もっと長い滞在が必要

以上

受益者へのアンケート調査結果

（平成17年度実施）

１．調査目的

本調査は、ボランティア事業の3つの視点のうち、「途上国の経済及び社会の発展又は復興への寄与」（視点Ⅰ）及び「途上国と我が国との間の友好親善及び相互理解の深化」（視点Ⅱ）が、ボランティアを通して間接的に利益を受ける受益者（学生や農民等の現地住民）レベルにおいて、どのように達成されているかを測るために実施するものである。

１７年度においては、主に１４年度３次隊、１５年度１次隊及び１５年度２次隊隊員の受益者のうち、１７年３月から１８年１月までの期間に回答があった８０７名を集計の対象として結果を取りまとめた。

２．評価結果概況

調査結果の詳細はそれぞれ別添の通りであるが、視点Ⅰ及び視点Ⅱにおける全体的な概況としては、次の通りである。

（1）視点Ⅰ

ア　活動の有効性

ボランティアの活動に対し「非常に満足」（７１％）、「ある程度満足」（２５％）と回答した受益者は９６％に及び、高い評価を示している。技術的な貢献だけでなく、仕事に対する姿勢や取り組み方を、満足度が高かった要因として挙げている者が多い。

イ　活動のインパクト

ここでも技術力の向上と共に、日本人の仕事への姿勢や取り組み方が多くの受益者に影響を与えたと考えている者が多数を占めている。

マイナス面については、語学やコミュニケーションの問題が最多を占めた。

（2）視点Ⅱ

ア　日本及び日本人に対する理解度

（ア）日本及び日本人に対してポジティブな印象を持つ受益者は、ボランティアの派遣後は９６％に及んでいる。特に「非常にポジティブ」と回答した者が派遣前後で約２．０倍に増えているほか、派遣前には「特に印象なし」は１８％を占めていたのに対し、派遣後は２％に減少している。特に変化が大きかったのは、アフリカであった。

（イ）　最も理解が深まったのは、「仕事に対する姿勢や進め方」（８４％）で、受益者の多くは日本人の価値観や行動様式にインパクトを感じていることがわかる。

イ　受益者からの要望事項

ボランティアの派遣期間をもっと長くしてほしいという要望が多かった。

３．受益者の声（抜粋）

- 日本人は当国の女性に対して敬意がないと思っていたが、隊員に会い、その考えは変わった。
- 隊員の仕事に対する姿勢や進め方はとてもよい。時間を大切にし、勤勉である。将来、当県で実行される JICA プロジェクトがあれば、働きたい。
- 熱心さや、特殊な科学的な仕事の進め方を学ぶことができた。また、地域での様々な目標対象との効果的なコミュニケーションや友好的なやさしいふるまいを学ぶことができた。
- 当国について理解しなかった。現地スタッフへの敬意が不十分。
- 以前は（日本について）堅苦しく融通の利かない印象があったが、快活でよく助けてくれる人たちであることを知った。効率的な業務の進め方と業務に対する責任感に感心した。
- 協力隊の協力活動は重要で、その専門知識と教授により我々の学部においては質を高めることができた。一方、JICA 事務所は配属先に対し、もっと協力隊を活用するよう働きかけるべきだと思う。
- ボランティアの選考に当たってはプロか否かではなく、ボランティアが活動したい内容の妥当性により判断すべきである。
- まさかこのような村に日本人が来てくれるとは思わなかった。彼が持っている良い部分のおかげでこの村を良くしてくれた。
- 技術的、社会的そして決して定量化出来ないようなあらゆる側面を学んだ。実り多い日々であった。

- 何よりも語学の勉強が必要。設備に関する供与がない。我々の技術力を向上させるための日本への研修がない。
- 他の者でボランティアの代わりが出来ない。
- ボランティアは時間に正確であり、学ぶことに対して積極的な姿勢を示すことを子供たちの心に刻んでくれた。
- ボランティアが去った後は、今一つプロジェクトがうまく進まない。
- 不平なく、自身の仕事を完璧に行う。
- 同僚と効果的なコミュニケーションをとれるようになるには２年間の任期は短い。
- 当国の教師は威張ってばかりだが、日本人の先生は人間味がある。日本人と直接接したことで日本人の良いところを知ることが出来た。良いところとは、人を尊敬、尊重する。時間を守る、遅れるときはその理由を説明してくれる、謝るといったことだ。先生対生徒という立場だけではなく、友人としてもつき合ってくれる。今までに受けたことのない対応だった。

以上

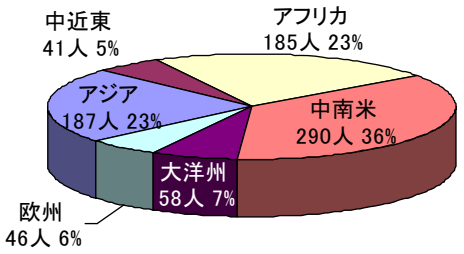
平成17年度　受益者アンケート調査結果

1.　アンケート実施概要

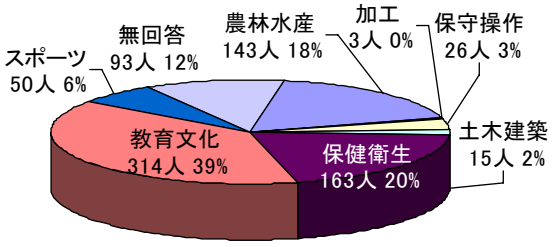
(1) 対象者　　:平成17年度に帰国したボランティア(主に14年度3次隊、15年度1次隊、2次隊隊員)の受益者
(2) 実施方法 :在外事務所が主体となり、訪問もしくは郵送や外部委託により行った
(3) 調査項目 :「受益者へのアンケート調査表」(別添2)参照
(4) 回収数　　:807通(平成18年1月末日までに回答があったもの)

アンケート回答者(対象ボランティア)の内訳

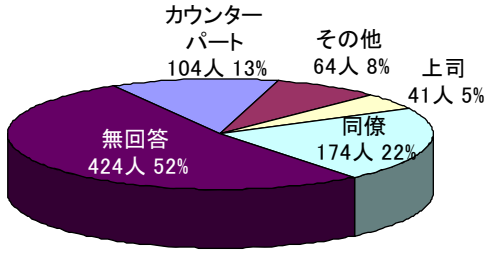
対象ボランティアの派遣地域



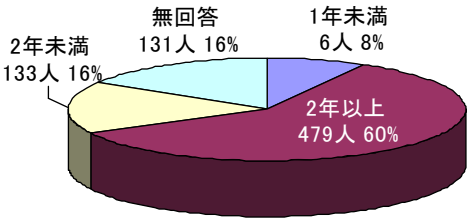
対象ボランティアの職種分野



ボランティアとの関係



ボランティアのサービスを受けた期間



2.　調査結果

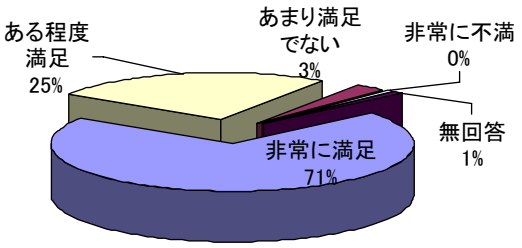
(※各質問に対する回答については「無回答」も含め100%として計算しているが、地域別・職種分野別等の抽出集計については「無回答」を除き100%として計算した。)
(※各質問の回答数、グラフ中の単位は件数)

《視点Ⅰ》 開発途上国・地域の経済及び社会の発展または復興への寄与

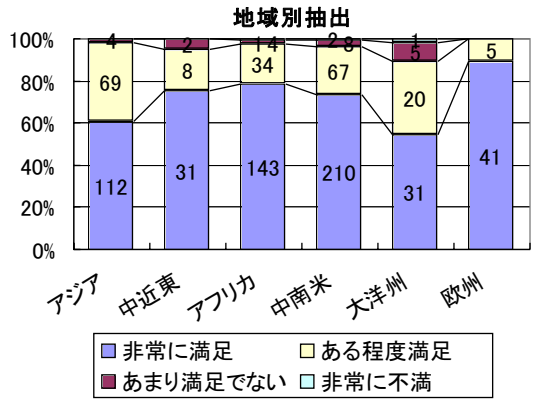
＜活動の有効性・達成度＞

Q1　ボランティアの活動は満足いくものでしたか。

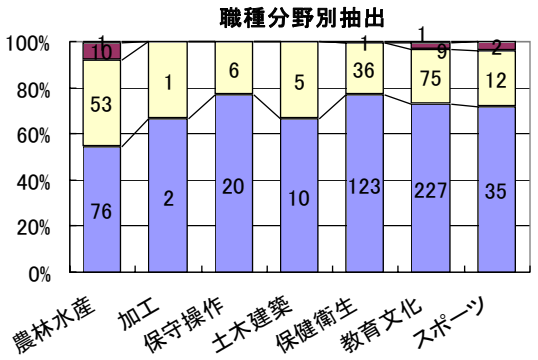
	回答数	
4. 非常に満足	568	71%
3. ある程度満足	203	25%
2. あまり満足でない	23	3%
1. 非常に不満	4	0%
無回答	9	1%
	807	100%



◆「非常に満足」、「ある程度満足」を合わせると、96%(771件)となり、高い満足度が得られていると言える。



◆ どの地域も、「非常に満足」、「ある程度満足」を合わせるとほぼ90%に達している。「欧州」は100%。



◆ どの職種分野も、「非常に満足」、「ある程度満足」を合わせると90%を超えている。

Q2　（Q1で3～4と回答した方に）満足した理由は何ですか。

◆ 記述形式。回答数673件（回答総数の83%。以下記述形式質問内表示も同じ）。主な内容は以下の通り。（　）内の言葉をキーワードとして分類した。

▹ ボランティアの有していた技術･指導
（新しい技術･知識、専門性、指導法、ワークショップ、ニーズとの一致など）

▹ 仕事への姿勢、取り組み方
（責任感、時間に正確、熱心、勤勉、行動的、積極的、率先など）

▹ 活動の成果
（技術や能力の向上、発展、成長、効果、貢献、有益、達成など）

▹ 周囲との関係、関わり方
（友好、良好な関係、現地語でのコミュニケーション、土地や人への尊敬など）

◆「ボランティアの有していた技術･指導」、「仕事への姿勢、取り組み方」、「活動の成果」が多数挙げられている。また、「周囲の人々との関係」についての言及も散見された。

◆ 回答例

- 活動に前向きで、行動的だった。仕事に対して高い責任感を持っていた
- 時間を守ること、仕事観、我々に利益となることを達成するための熱意を評価している
- 地域の人々に思いやりをもって耳を傾け、必要な時に応えてくれた
- 理解の困難な生徒の手助けのために、余った時間を喜んで費やしてくれた
- ボランティアは、我々生徒を尊敬してくれ、楽しく学べた
- 公私にわたり、子供達やスタッフのためにできることを常に考え、実行してくれた
- 生徒達の姿勢や行動を積極的に向上させた
- 学生の基礎学力の強化に効果を挙げた
- ボランティアのおかげで、ワクチン接種した子供が30%から70%になった
- 学校及び、家庭での衛生に関する行動。衛生に関する児童の行動が変わった
- 病院のサービスを利用する妊婦の来院が増えた。患者へのサービスが向上した
- 農業分野において技術革新をもたらした。機関の職員として研究調査に尽力した

Q3　（Q1で1～2と回答した方に）満足が得られなかった理由は何ですか。

◆ 記述形式。回答数22件（3%）。主な内容は以下の通り。
- ▹ 言語、コミュニケーションの問題
- ▹ 任期が短い、時間の不足
- ▹ 成果が得られなかった
- ▹ 技術・知識の不足、ニーズとの不一致

◆「成果が際立ったものではなかった」、「目標を達成できなかった」等、「満足する成果が得られなかった」という内容が多く挙げられている。

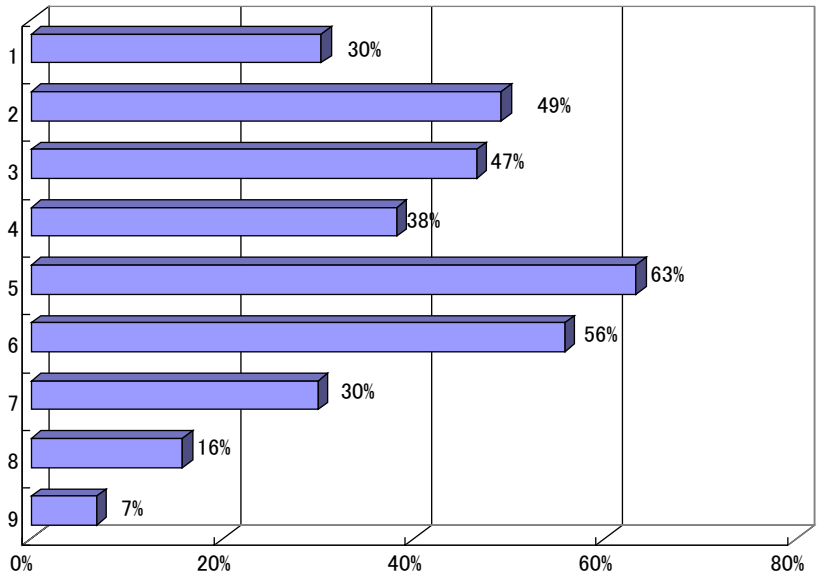
◆ 回答例

- ・ 語学が不十分だったため、コミュニケーションがうまく取れなかった
- ・ 過剰なプログラムの変化。時間の不足
- ・ 月ごとの実行計画や結果がなく、活動の成果も少ない
- ・ 活動方法に一貫性がなかった
- ・ 派遣初期のボランティアはたくさんのものを持って来てくれたが、最近のボランティアは物資も知識も与えてくれない
- ・ ボランティアの技術はニーズに合っていなかった

＜活動のインパクト＞

Q4　ボランティアが派遣されたことでプラスとなった点は何ですか。（複数回答可）

	回答数	
1. 受入機関の方針、体制、システムの改善	**245**	30%
2. 受入機関のサービス・活動内容や規模の拡大	**397**	49%
3. 新規サービス・活動の開始	**376**	47%
4. 受入機関の広報効果、認知度の向上	**309**	38%
5. スタッフの技術・能力の向上	**511**	63%
6. 日本人の仕事への姿勢や取り組み方のスタッフへの影響	**451**	56%
7. 受入機関のインプットの改善（予算配分、人員配置、資機材など）	**242**	30%
8. 受入機関がサービスを提供する相手への効果	**128**	16%
9. その他	**55**	7%
	807	100%



注 回答総数807件を100%とした。

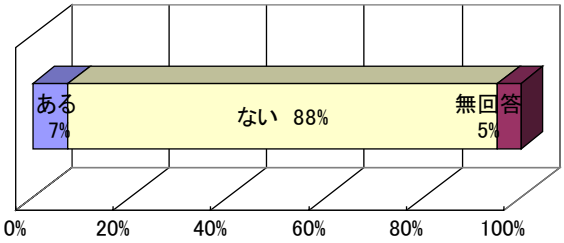
◆「スタッフの技術・能力の向上」（63%、511件）が最多。次いで、「仕事への姿勢や取り組み方のスタッフへの影響」（56%、451件）が挙げられている。

◆ その他回答例

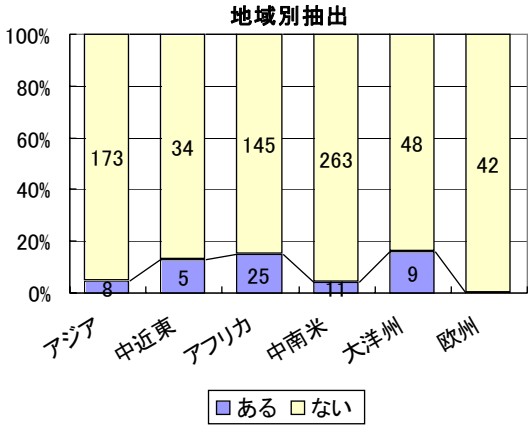
- 仕事文化や見解の交流機会を得られた
- 仕事の方法や、取り組み方の進歩
- 他機関との連携の方法。モニタリングやスーパーバイズに関する提案
- 他のサービスとのパートナーシップの可能性を知った
- JICAやボランティアの役割の理解と、日本についての知識の向上
- 教員不足を補った
- 児童が保健衛生啓発に関して、父兄、学校、地域をつなぐ役割を果たすようになった
- 目標を達成するための方法や技術。ボランティア帰国後も創造ある雰囲気を残してくれた
- スタッフや生徒が日本語やその文化に触れることにより、生徒の登録数が増えた

Q5 ボランティアが派遣されたことでマイナスとなった点はありますか。

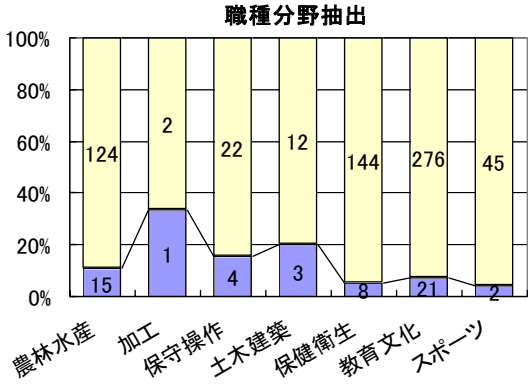
	回答数	
1. ある	58	7%
2. ない	705	88%
無回答	44	5%
	807	100%



◆「マイナスとなった点がある」と指摘したのは7%（58件）。



◆「大洋州」16%、「アフリカ」15%、「中近東」13%では、「マイナスとなった点がある」との回答が10%を超えている。



Q6　（Q5で1と回答した方に）マイナスとなった点を以下にお書き下さい。

◆ 記述形式。回答数54件(7%)。主な回答は以下の通り。
- ▹ 言語、コミュニケーションの問題
- ▹ 任期が短い、任務未達成
- ▹ 現地で代わりをできる人材がいない
- ▹ ボランティアの健康問題、欠勤

◆「言語、コミュニケーションの問題」、「任期が短く、計画を終えられない」といった内容が主なマイナス点として挙げられている。

◆ 回答例

- 現地語が未熟なことにより活動に支障が生じた。当該分野の能力の欠如
- 同僚と効果的なコミュニケーションをとるには2年間は短い
- 日本人の指導者をようやく理解するに至ったとき試合シーズンが終わり、その技術を活かすことができなかった
- 与えられた期間に任務を達成できない
- 学期終了前の帰国は、授業や生徒に様々な影響を与える
- 他の者ではボランティアの代わりができない
- ボランティアの帰国後は、プロジェクトがうまくすすまない
- 機材と予算の問題のために、目標に殆ど到達できなかった
- 長期間欠席していたので、生徒は授業を受けられなかった
- 当国を理解しなかった。現地スタッフへの敬意などが不十分であった

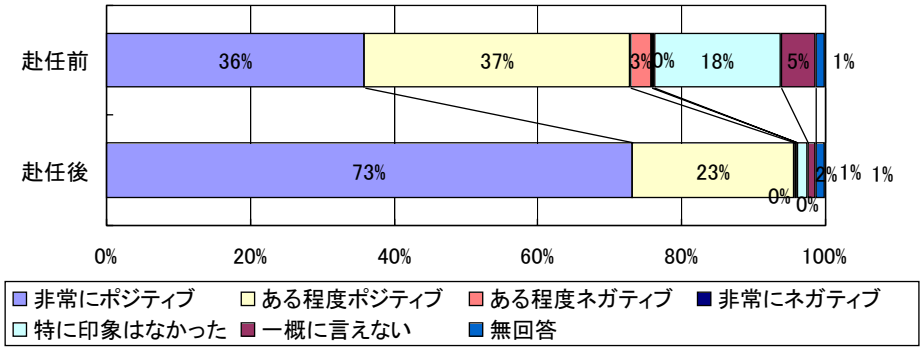
《視点Ⅱ》 開発途上国･地域と我が国との間の友好親善及び相互理解の進化

＜日本及び日本人に対する理解度＞

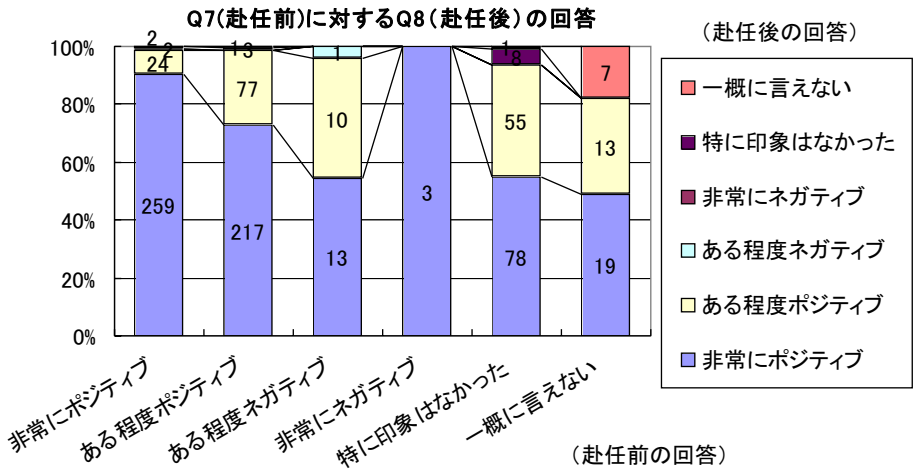
ボランティア赴任前、赴任後の日本や日本人についての印象は？

Q7　赴任前、　*Q8*　赴任後

	赴任前		赴任後	
6. 非常にポジティブ	289	36%	590	73%
5. ある程度ポジティブ	299	37%	182	23%
4. ある程度ネガティブ	24	3%	3	0%
3. 非常にネガティブ	3	0%	0	0%
2. 特に印象はなかった	143	18%	13	2%
1. 一概に言えない	39	5%	9	1%
無回答	10	1%	10	1%
	807	100%	807	100%

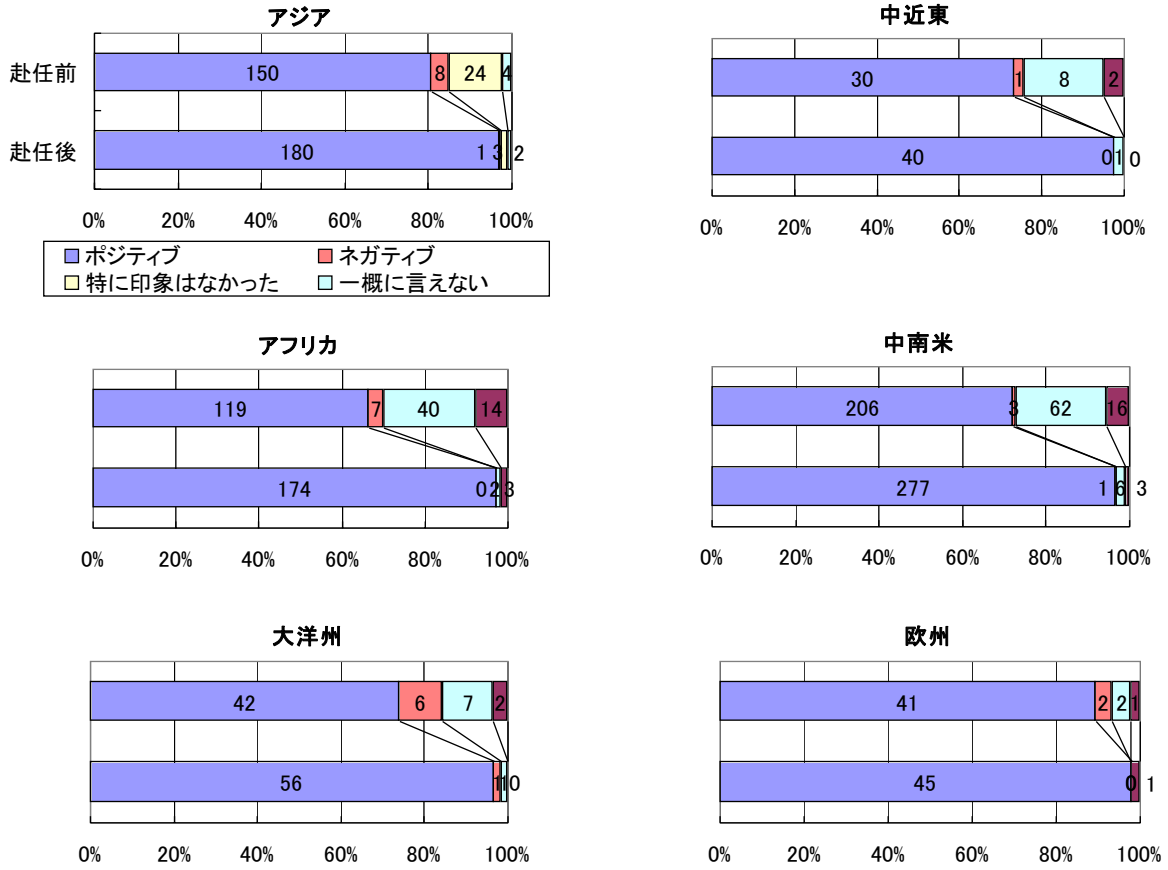


◆「非常にポジティブ」が、36%（289件）から73%（590件）へ倍増。「非常にポジティブ」、「ある程度ポジティブ」を合わせると、73%（588件）から96%（772件）に伸び、「ネガティブ」な印象はわずか3件となっている。日本や日本人の印象は、ボランティアやその活動を通じて、大きくポジティブに変化している。



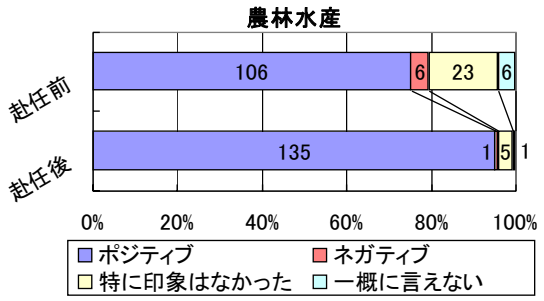
◆「ネガティブ」な印象は、そのほとんどが「ポジティブ」な印象へ変化している。また、「特に印象なかった」、「一概に言えない」と回答していた者はすべて「ポジティブ」な印象へ変化し、「ネガティブ」な印象は持っていない。

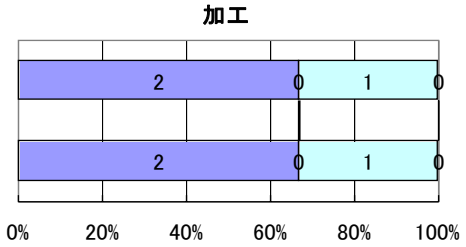
地域別抽出

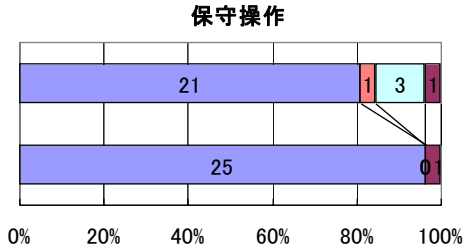


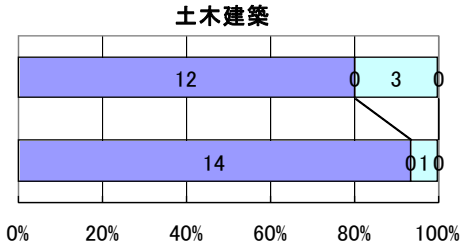
◆ ボランティアの赴任後は、どの地域もほぼ100%が「ポジティブ」な印象をもっている。

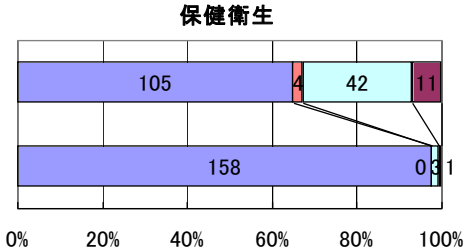
職種分野別抽出

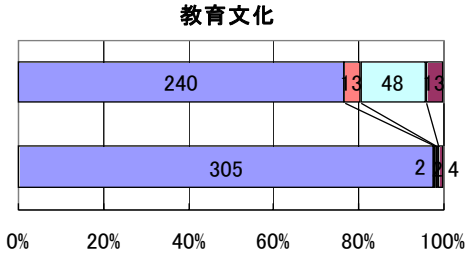


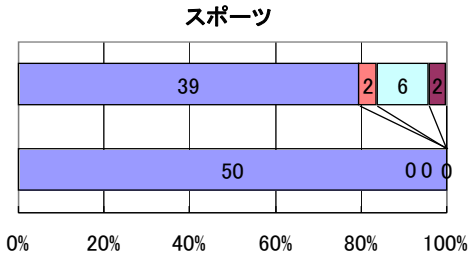












◆「加工」を除くどの職種分野も、赴任後は、ほぼ100%が「ポジティブ」な印象を持っている。

Q9　赴任前と赴任後に変化があった場合、その主な理由は何ですか。

◆ 記述形式。回答数398件（49%）。主な内容は以下の通り。
- ▹ 技術や知識の向上、具体的成果
- ▹ 仕事への姿勢、取り組み方
- ▹ ボランティアの指導
- ▹ 日本や日本人、JOCVへの理解、相互文化交流

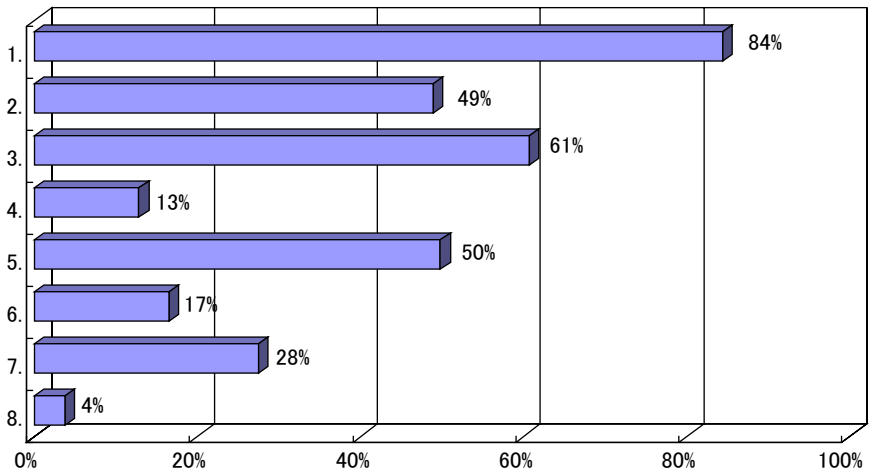
◆「技術や知識の向上、具体的成果」、「仕事への姿勢、取り組み方」に関する記述が多数挙げられている。ボランティアの活動が日本や日本人の印象の変化に大きな影響を与えていることがうかがえる。

◆ 回答例

- 同僚職員が可能な限りボランティアの活動を模範とした
- スタッフがより勤勉、献身的になった。組織へ所属する意識がとても向上した
- 日本人ボランティアを初めて受入れた。我々の福祉向上のための彼らの情熱や能力を理解し、大きな感銘を受けた
- 経験を通じ、ボランティアを信頼するようになり、彼の指導を信じるようになった
- ボランティアと働く機会を持てたことにより、業務における決定や一貫性の観念を理解することができた
- 一緒に働き熱意を感じた。多くを学び、日本や日本人について理解を深めた
- 生徒や教員は、彼の人間性と学校や地域への貢献によって、本当に彼を尊敬している
- サービス利用者に有益な効果や、部署のイメージを高めた
- お金をかけない方法での活動を示してくれた。これは当国の通常の方法と異なるものだった

***Q10*　ボランティアを通して、日本や日本人についての知識・理解を深めたことは何ですか。**
（複数回答可）

	回答数	
1. 仕事に対する姿勢や仕事の進め方	**681**	84%
2. 日本の技術や制度	**395**	49%
3. 日本人の生活･行動様式	**490**	61%
4. 日本の政治や経済	**104**	13%
5. 日本の文化	**402**	50%
6. 日本の地理や歴史	**134**	17%
7. 日本語	**222**	28%
8. その他	**31**	4%
	807	100%



注 回答総数807件を100%とした。

◆ 84%（681件）が、「仕事に対する姿勢や仕事の進め方」に知識･理解を深めたと回答しており、活動を通じたボランティアの姿が反映されているものといえるだろう。
次いで、「生活･行動様式」が61%（490件）、「文化」が50%（402件）に達し、活動だけでなく、日常生活での関わりの深さもうかがえる。

***Q11*　その他特に気づいた点がありましたら、お書き下さい。**

◆ 記述形式。回答数351件（43%）。主な内容は以下の通り。

- ▹ 仕事への姿勢、取り組み方
- ▹ ボランティアの任期延長、後任の要望
- ▹ 技術や知識の向上、活動の具体的成果
- ▹ 周囲との関係、文化交流
- ▹ 日本政府、JICAへのその他の要望
- ▹ マイナス点への指摘

◆「仕事への姿勢、取り組み方」、「ボランティアの任期延長、後任の要望」が多数挙げられている。また一方で、「語学の問題への指摘」や、「日本での研修を望む」といった要望も言及されている。

◆ 回答例

- 日本人は誠実で、教育水準も高くよく働く。働く姿を見て人々が何かを学んだように思う
- 人と人との協力は、国籍や文化の違いに拘らず、よい国際関係構築に貢献できる
- 学校へのボランティア派遣は、生徒達の異文化体験や文化交流において重要だ
- ボランティアである先生が時間を守る。何かにつけて説明してくれる。先生対生徒という立場だけではなく、友人としてもつき合ってくれる。今までに受けたことのない対応だった
- ボランティアは私の指導者で模範だ。時々あきらめかけたがいつも励ましてくれた
- 日本人は信頼でき、最高の仕事仲間、友達になれた
- 最初は言葉の問題があったが徐々に適応した。今では友人以上となっている
- もっと組織的であったら、ボランティアの存在をもっと有効に利用できただろう。いずれにせよ彼は誠心誠意を尽くして活動を行った
- 期間の延長を望む。彼らとの接点を維持し、日本文化にもっと精通していきたい
- 目標を達成するためには活動期間が短か過ぎる
- 任期が短い。3年～5年を望む
- 我々がさらに意見や刺激を得るためにボランティア派遣を望む
- さまざまな分野の隊員が来ることを期待している
- 活動やコミュニケーションがとりやすいように、語学力をもっとつけてから活動を行った方がよりよい
- ボランティアは語学の面で苦労しているため、よりよい語学研修を受けさせるべき
- 言葉の問題のため、もっとたくさん話したいことがあったができなかった
- 我々の代表が日本のシステムを身につけるために主に公衆衛生分野において、日本で技術研修を経験出来ればよいと思う
- JOCV派遣の意味をはっきりと認識している。日本政府の外交政策をより理解した
- 協力隊の活動は重要で、その専門知識と教授により我々の学部においては質を高めることができた。一方、JICA事務所は配属先に対し、もっと協力隊を活用するよう働きかけるべきだと思う
- 介在する分野が多様化する中、地域の具体的なニーズを考慮するとよりよいだろう
- 十分な教育を受け専門分野における知識を持ったボランティアを派遣してくれ、新しい技術の指導にあたってくれたことに対してJICAに感謝したい
- 課せられた仕事に不満だったようで仕事に対しては消極的であった

ボランティアからの受益内容

◆ 記述形式。回答数512件（63%）。主な内容は以下の通り。

- ▹ 技術や知識、能力の向上
- ▹ 仕事への姿勢、取り組み方
- ▹ 日本や日本人に関する知識、日本語等の日本文化への理解
- ▹ 物的支援

◆「技術や知識、能力の向上」では、各職種分野での具体的事例、指導方法の改善や、新しい技術の導入等が多く挙げられている。

◆「仕事への姿勢、取り組み方」では、熱意や勤勉、時間を守ることなどについての記述が多数挙げられている。

◆ 回答例

- ボランティアが活動を始める前の年と比べて、数学の成績が向上した
- 新聞記事の紹介等で組織の印象が向上した
- 組織的に練習することを、コーチとして学んだ
- 手に入るもので道具を作る技術を吸収した
- 教員不足の補助。時間を守ることや勤勉さを学んだ
- 仕事に対する考え方と、姿勢を改めたこと。科学への興味が増した
- 障害児へのケアの方法だけでなく、子供達を育てる責任感を増進させた
- 正しい姿勢と仕事があれば、より生産的になれるという自信を持った
- 日本に関するよい印象。文化や言語への大きな関心
- ボランティアとの温かい人間関係や、知識の交換。「世界の笑顔のために」プログラムによる機材の提供や、ボランティアが撮影し残してくれた写真は特によい思い出になる

以上

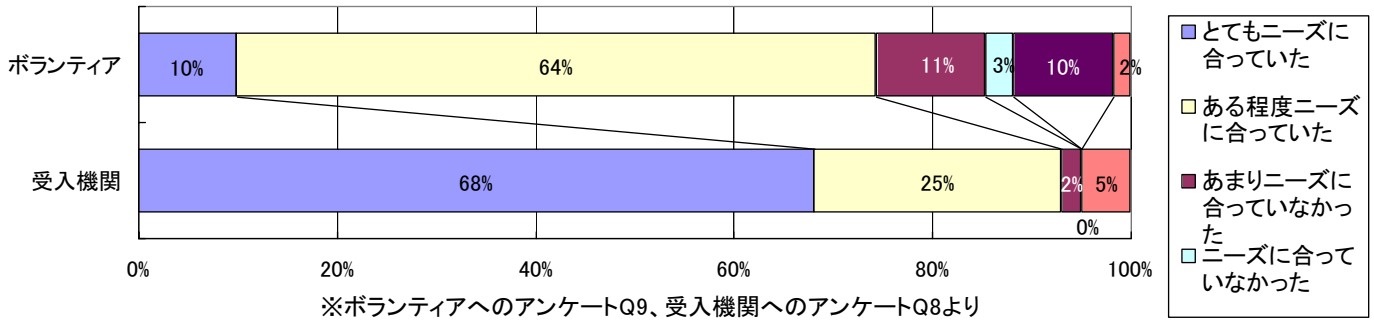
参考　3アンケート調査結果に共通する質問からの考察

◆ 視点Ⅰ、Ⅱに関して、ボランティア、受入機関、受益者へのアンケートに共通する質問の結果を比較し、考察する。

視点Ⅰ： 開発途上国･地域の経済及び社会の発展又は復興への寄与

＜活動目標･計画の妥当性＞

◎ ボランティアの活動計画は、配属先のニーズに対応していたか

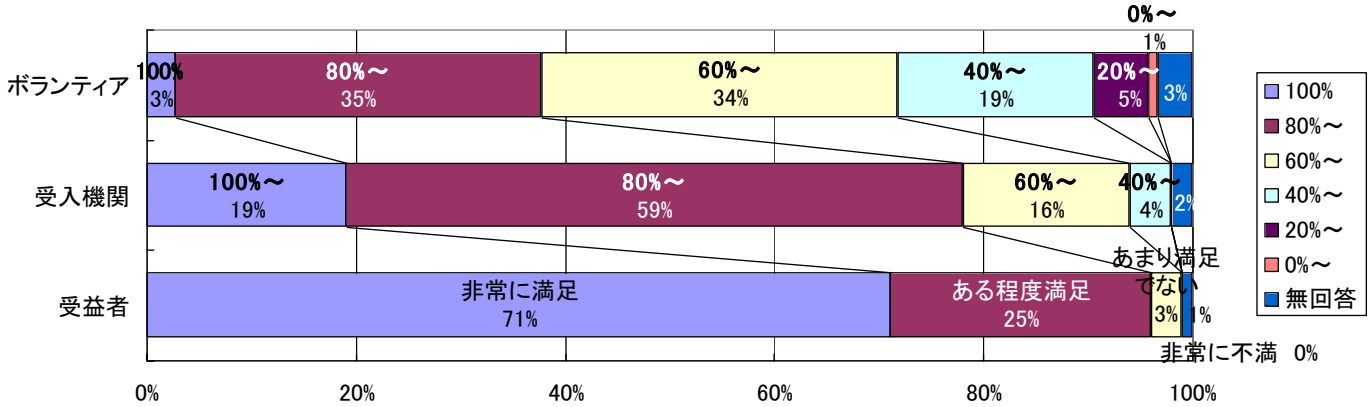


※ボランティアへのアンケートQ9、受入機関へのアンケートQ8より

◆ ボランティアにおいては、「とてもニーズに合っていた」と回答している者は10%に過ぎないが、受入機関はそれを大きく上回る68%に及び高く評価している。ただし、「ある程度ニーズに合っていた」を合わせると、ボランティアにおいては74%に及び、受入機関の93%と大差はなくなる。

＜活動の達成度･有効性＞

◎ ボランティアの活動の達成度/満足度

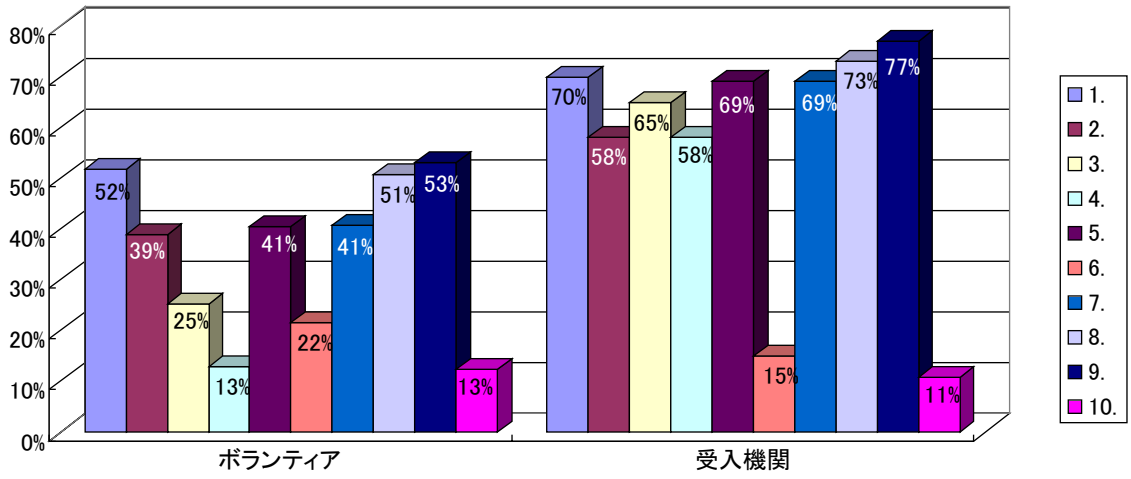


（注）ボランティア及び受入機関は達成度、受益者は満足度
※ボランティアへのアンケートQ3及びQ5、受入機関へのアンケートQ4、受益者へのアンケートQ1より

◆ 本質問も、受入機関や受益者はボランティアを大きく上回る評価をしていることがうかがえる。

◎ 促進要因（達成状況が60%以上になった理由）

	ボランティア	受入機関
1. 配属先が協力的だった	52%	70%
2. 同僚（カウンターパート）が意欲的だった	39%	58%
3. ボランティアが指導力・積極性を発揮できたから	25%	65%
4. ボランティアが十分な技術を持っていたから	13%	58%
5. 活動の内容が配属先のニーズと合っていた	41%	69%
6. 活動の内容が配属先の内容と合っていなかったが、配属先と調整してニーズの合う活動ができたから	22%	15%
7. 配属先（ボランティア）との意思疎通やコミュニケーションがうまくできた	41%	69%
8. （ボランティアが）現地の文化・習慣に馴染むことができたから	51%	73%
9. （ボランティアと）配属先や関係者との人間関係が非常によかったから	53%	77%
10. その他	13%	11%

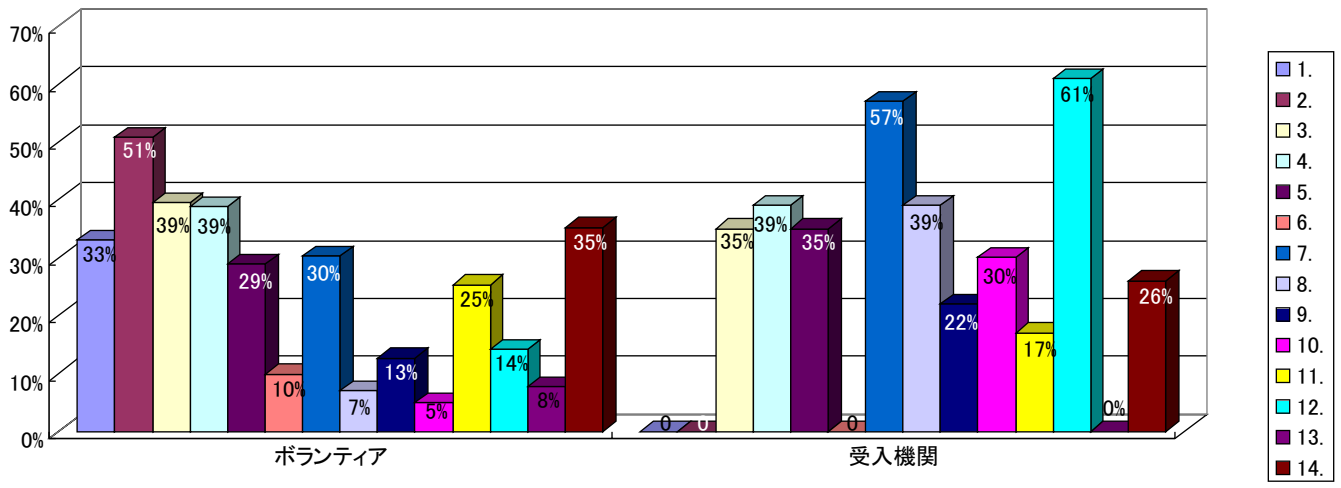


※ボランティアへのアンケートQ6、受入機関へのアンケートQ6より

◆ ボランティア、受入機関ともに回答の多い3項目は同様の結果となっており、関係者との良好な人間関係や、現地文化への適応等を重要視している点で一致している。一方、ボランティアの技術や指導力に関しては、受入機関とボランティアの評価で差異が見られるが、いずれにせよ全体的に受入機関の方が高い評価となっている。

◎ 阻害要因（達成状況が60%未満であった理由）

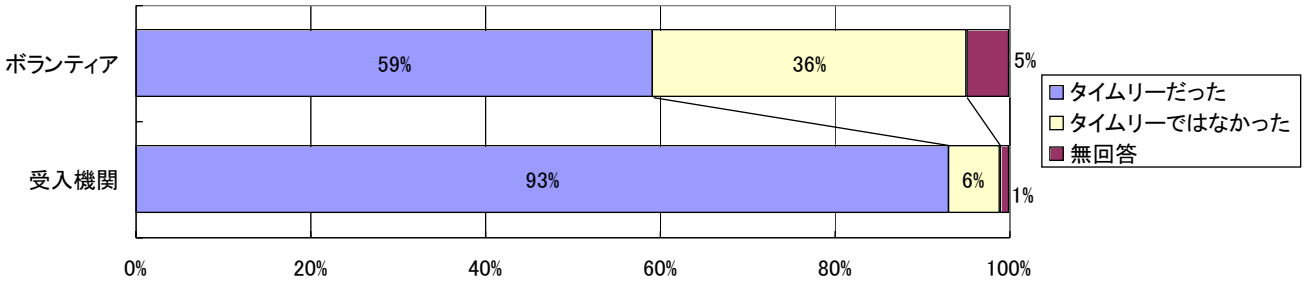
	ボランティア	受入機関
1. 配属先が非協力的だった	33%	項目なし
2. 同僚（カウンターパート）が意欲的でなかった	51%	項目なし
3. ボランティア側の積極性が足りなかった	39%	35%
4. （ボランティアの）技術力が不足した	39%	39%
5. 活動内容が配属先のニーズと合っていなかった	29%	35%
6. 配属先が、ボランティアと専門家との違いを分かっていなかった	10%	項目なし
7. 配属先（ボランティア）との意思疎通やコミュニケーションがうまくできなかった	30%	57%
8. （ボランティアが）現地の文化・習慣に馴染むことができなかった	7%	39%
9. （ボランティアと）配属先や関係者との人間関係がよくなかった	13%	22%
10. （ボランティアが）体調を崩してしまった	5%	30%
11. 技術移転の対象者がいなかった	25%	17%
12. 活動に不可欠なものがなかった、調達できなかった	14%	61%
13. （ボランティアが）派遣期間中に配属先や活動地域が変更になった	8%	0%
14. その他	35%	26%



※ボランティアへのアンケートQ7、受入機関へのアンケートQ7より

◆ ボランティアは、同僚の意欲や自分自身の積極性の不足を挙げる者が多いが、受入機関は、活動に不可欠なものがなかった、調達できなかったとする物的要因や、コミュニケーションの問題を指摘している者が多く、阻害要因への見解は異なっている。

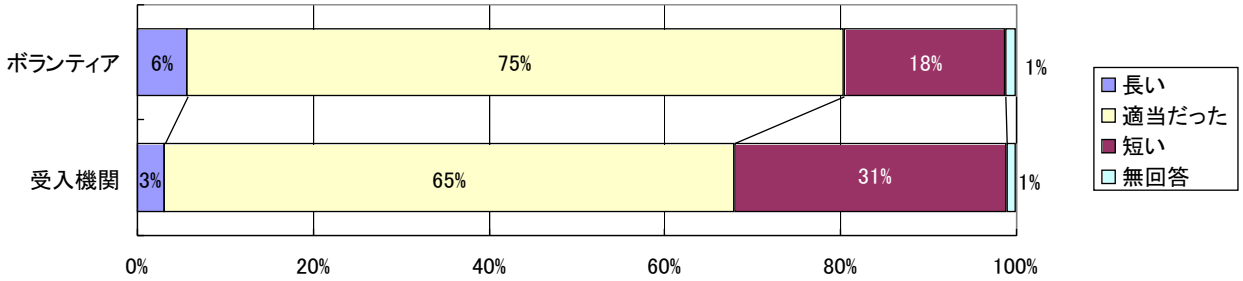
◎ 派遣のタイミングはタイムリーであったか



※ボランティアへのアンケートQ12、受入機関へのアンケートQ15より

◆ ボランティアは59%がタイムリーだったと回答するにとどまっているが、受入機関は93%に上り、高く評価している。

◎ 派遣期間は適当であったか



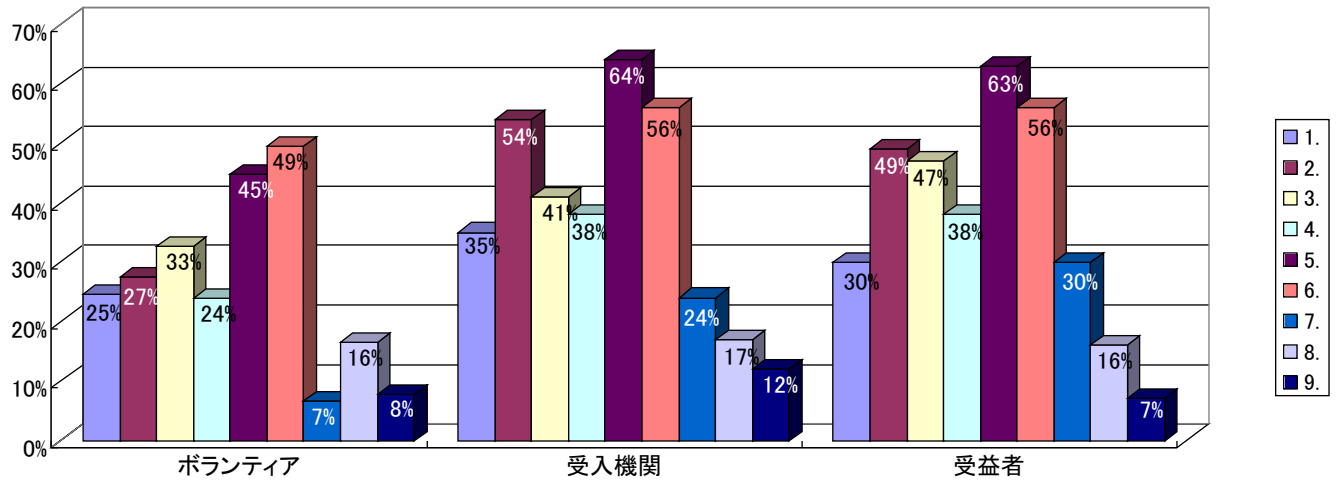
※ボランティアへのアンケートQ13、受入機関へのアンケートQ16より

◆ ボランティアは75%が適当だったと回答しているのに対し、受入機関は65%にとどまり、短いと回答している者は31%に及ぶ。　　C

＜活動のインパクト＞

◎ ボランティアの派遣によってプラスになった点

	ボランティア	受入機関	受益者
1. 配属先の方針、体制、システムの改善	25%	35%	30%
2. 配属先のサービス･活動内容や規模の拡大	27%	54%	49%
3. 新規サービス･活動の開始	33%	41%	47%
4. 配属先の広報効果、認知度の向上	24%	38%	38%
5. 配属先のスタッフの技術･能力の向上	45%	64%	63%
6. 日本人の仕事への姿勢や取り組み方のスタッフへの影響	49%	56%	56%
7. 配属先のインプットの改善（予算配分、人員配置、資機材等）	7%	24%	30%
8. 配属先がサービスを提供する相手への効果	16%	17%	16%
9. その他	8%	12%	7%



※ボランティアへのアンケートQ17、受入機関へのアンケートQ17、受益者へのアンケートQ4より

◆ 3者とも、回答の多い2項目は同様の結果となっている。技術面の向上だけでなく、仕事への姿勢や取り組み方が伝わっていることを高く評価している点で共通している。

◎ ボランティアの派遣によってマイナスになった点

◆ 記述形式による主な回答内容

《ボランティア》
・ボランティアへの依存、働かなくなった
・配属先及びスタッフへの負担増

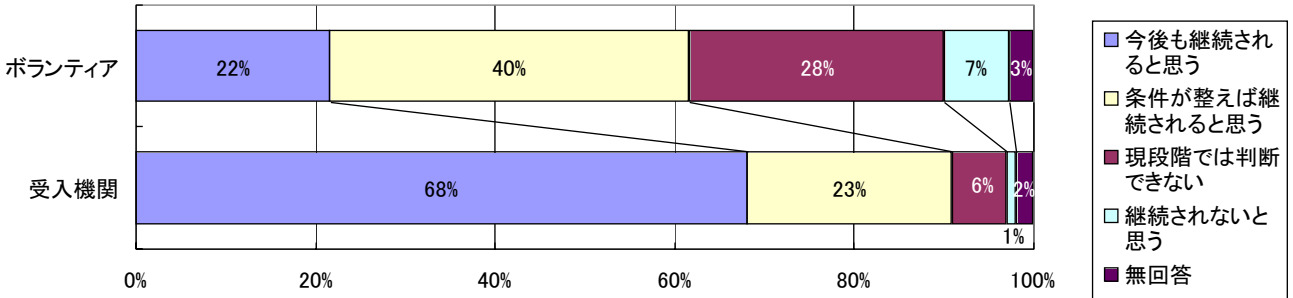
《受入機関･受益者》
・語学力不足･コミュニケーションの問題
・任期が短い･派遣時期のタイミングが悪い
・現地で代わりをできる人材がいない
・文化･考え方の相違

※ボランティアへのアンケートQ19、受入機関へのアンケートQ19、受益者へのアンケートQ6より

◆ 受入機関、受益者はほぼ共通して、語学力･コミュニケーションの問題、任期が短い等を指摘している者が多い。一方ボランティアは、ボランティアや援助への依存が強くなったことへの指摘が多く、活動を行った結果のマイナス点を指摘している者が多い。

＜活動の自立発展性＞

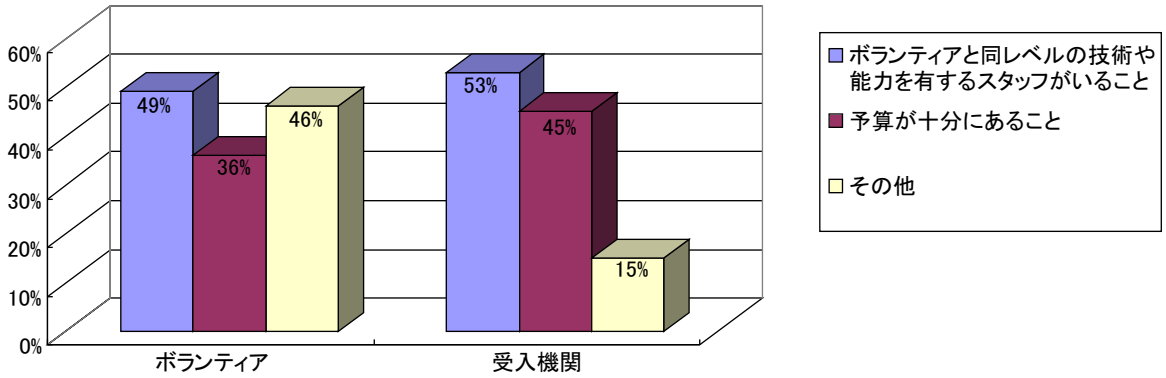
◎ ボランティアの活動の今後の見込み



※ボランティアへのアンケートQ20、受入機関へのアンケートQ20より

◆ 受入機関の68%が、今後も継続されると回答しているのに対し、ボランティアは22%と大きく下回る。

◎ 継続のための条件



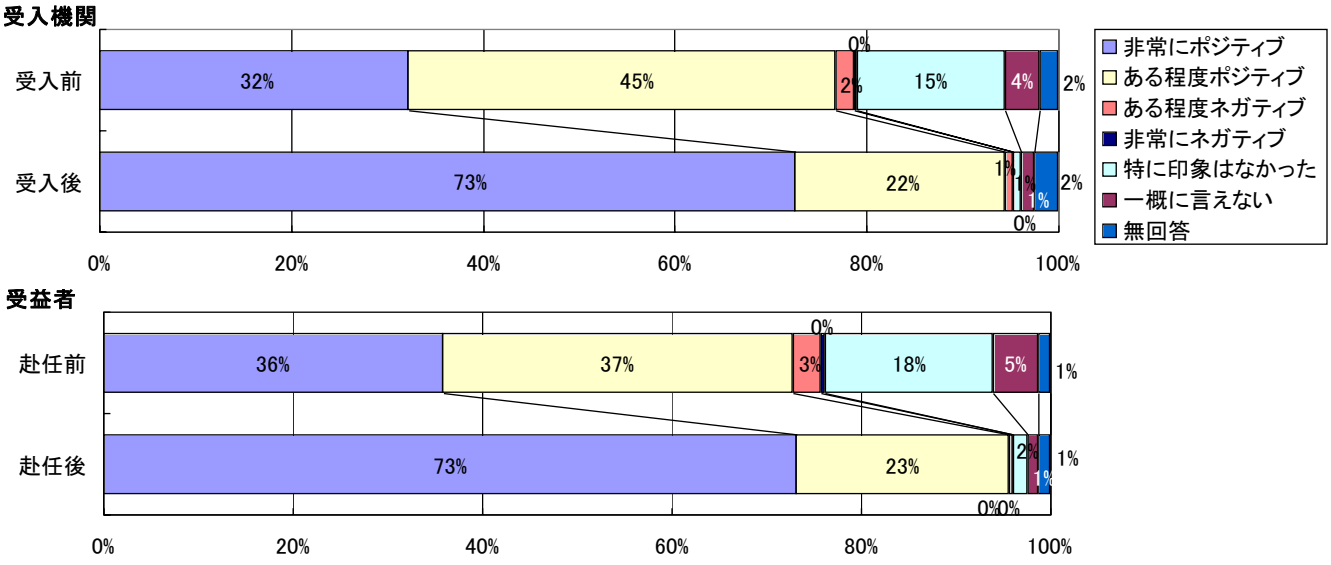
※ボランティアへのアンケートQ21、受入機関へのアンケートQ21より

◆ ボランティア、受入機関ともに、約5割がボランティアと同レベルの技術や能力を有するスタッフがいることという人的要因を挙げており、十分な予算という物的要因以上に条件として重要視している。

視点Ⅱ　開発途上国･地域と我が国との間の友好親善及び相互理解の深化

＜日本及び日本人に関する理解度＞

◎ 日本や日本人についての印象の変化（ボランティアの赴任前後での変化）

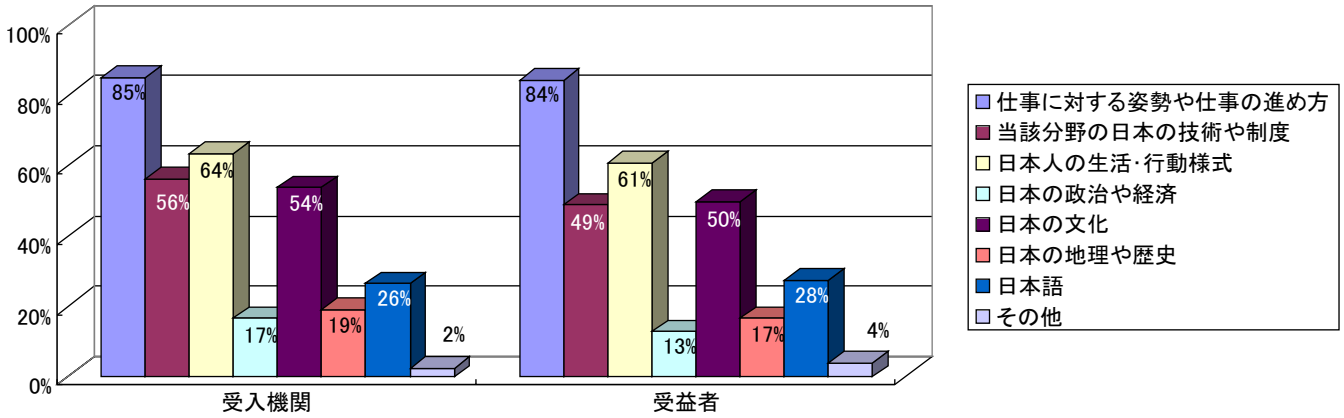


※受入機関へのアンケートQ25、26　受益者へのアンケートQ7、8より

◆ 受入機関、受益者ともにほぼ同様の結果となっており、日本や日本人の印象はボランティアの派遣によってポジティブへと大きく変化している。

◎ 日本や日本人に対して知識･理解を深めたこと

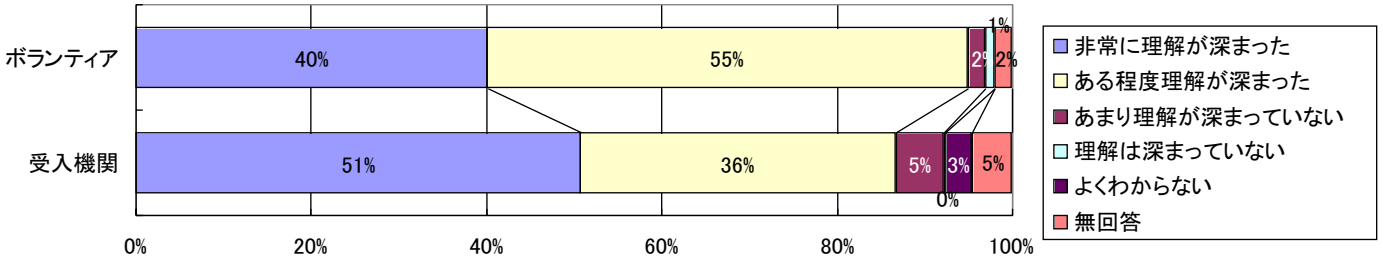
	受入機関	受益者
1. 仕事に対する姿勢や仕事の進め方	85%	84%
2. 当該分野の日本の技術や制度	56%	49%
3. 日本人の生活･行動様式	64%	61%
4. 日本の政治や経済	17%	13%
5. 日本の文化	54%	50%
6. 日本の地理や歴史	19%	17%
7. 日本語	26%	28%
8. その他	2%	4%



※受入機関へのアンケートQ28、受益者へのアンケートQ10より

◆ 受入機関、受益者ともにほぼ同様の結果となっており、仕事に対する姿勢や仕事の進め方に最も理解を深めている。

②　任国及び任国の人々に対する理解度



※ボランティアへのアンケートQ37、受入機関へのアンケートQ29より

◆「非常に理解が深まった」、「ある程度理解が深まった」を合わせると、ボランティアは95%、受入機関も87%に上り、ボランティアの任国や任国の人々に対する理解はおおむね深まっていると評価している。

以上

本邦におけるボランティア関係者への
アンケート調査結果

（平成17年度実施）

１．調査目的

本調査は、活動中ボランティアの留守家族及び本邦所属先関係者に対し、ボランティア自身から発信された情報により、どのように途上国に対する認知度・理解度を深めたかを見るためにアンケート調査を実施するものであり、ボランティア事業の3つの視点のうち、「途上国と我が国との間の友好親善及び相互理解の深化」（視点Ⅱ）についての評価に資するものである。

調査時点（平成17年7月）を起点に派遣後1年程度を経過した隊員（主に15年度2次隊、3次隊及び16年度1次隊）の留守家族及び本邦所属先関係者のうち、回答があった631名を集計の対象として取りまとめた。

２．評価結果概況

調査結果の詳細は別添の通りであるが、視点Ⅱにおける全体的な概況としては、次の通りである。

（1）ボランティアから受信した情報

ア　全回答者の93％の関係者は、ボランティアの活動について何らかの情報を受信しており、その受信媒体としては電子メールが圧倒的に多い（82％）。

イ　受信内容については、活動状況（86％）や派遣国の人々の様子（83％）が最も多い。

（2）派遣国やボランティア活動に関する認知度・理解度の変化

ア　ボランティアからの情報を受信したことにより、74％の関係者は派遣国に対する理解が深まったとしており、具体的な変化として以下のような事例が挙げられている（以下抜粋）。

- 地図を良く見るようになった。今では派遣国のみならず世界各地の社会、文化に興味を持つようになった。

- どこにあるかも知らなかったが、いろいろ調べ実際に訪問した。自分の目で確かめて本当に良かった。
- 郵便局の人も知らなかったが、荷物を送ることで知識が広がったようだった。
- 家族の者がアラビア語を勉強するようになった。
- 本校に国際理解に関するコーナーができた。

また、派遣国への理解が深まったことにより派遣国へ行ってみたいと回答した関係者は74％に及び、12％がすでに派遣国を訪れている。

イ　一方、ボランティア活動についての知識や理解についても、情報を受信したことにより74％が深まったと回答している。また、ボランティア活動に興味を持つに至った関係者も83％に及んでいる。具体的な変化としては以下のような事例が挙げられている（以下抜粋）。

- ボランティアについて自分にできることを考えるようになった。できることがあればやってみたい。
- 井戸を掘るといった技術支援の面を思い描いていたが、現地の人々と共に考え生活し心を通わせることでボランティア自身が成長させてもらっていると感じた。
- 海外協力の大切さを広めたいと思い、勤務先の高校に JICA 職員を招いてボランティア講座をしてもらった。

以上

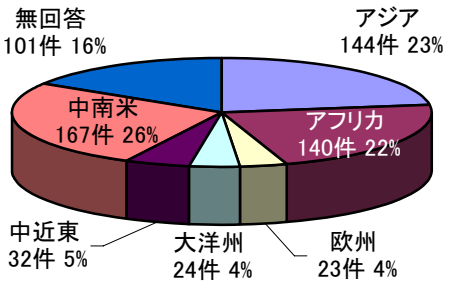
平成17年度　本邦におけるボランティア関係者アンケート調査結果

1.　アンケート実施概要

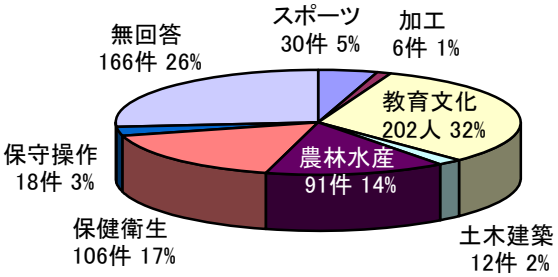
(1) 対象者　：平成17年7月現在、派遣後1年を経過した隊員（15年度2次隊、3次隊、16年度 1次隊）の本邦関係者を対象とした。本邦所属先205件(対象者数の15%)、及び留守家族1,136件(同85%)の計1,341件
(2) 実施方法：郵送による送付、及び回収
(3) 実施期間：発送　平成17年7月中旬
　　：回収　平成17年7月中旬～8月末
(4) 回収総数：631通（回収率47.1%）

アンケート回答者（対象ボランティア）の内訳

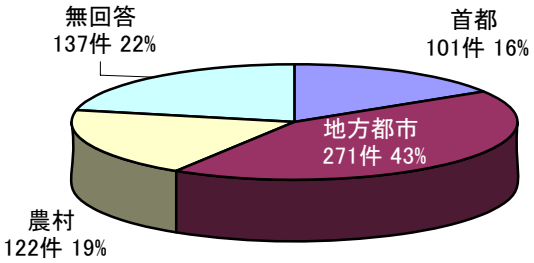
対象ボランティアの派遣地域



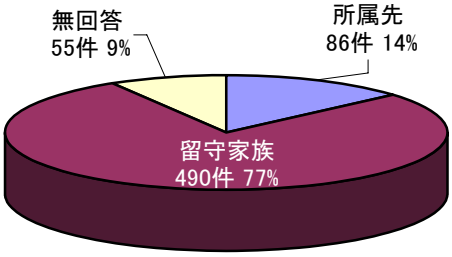
対象ボランティアの職種



対象ボランティアの任国での地域



ボランティアとの関係



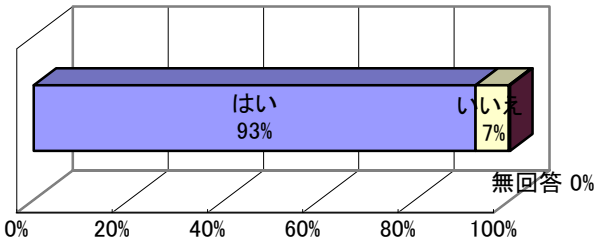
	回答数（件）
＊回答者	**576**
・**留守家族**	**490**
親	455
姉弟	10
夫婦	6
・**所属先**	**86**
上司	24
同僚	40

2. 調査結果

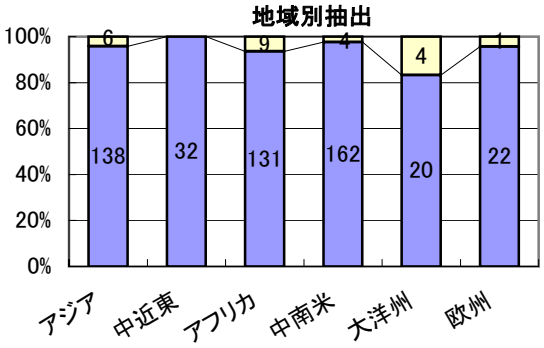
（※各質問に対する回答については「無回答」を含め100%として計算しているが、地域別・職種分野別等の抽出集計については「無回答」を除き100%として計算した。）
（※各質問の回答数、グラフ中の単位は件数）

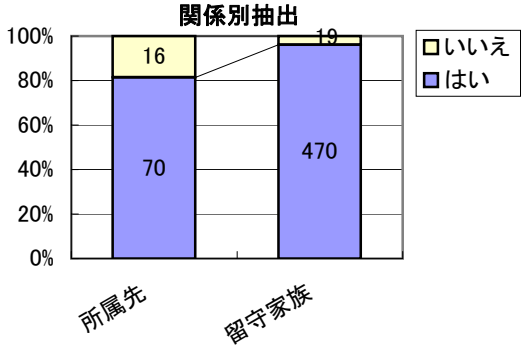
質問1 現在派遣中のボランティアから派遣国に関することや、ボランティアの活動について情報を受信されましたか。

	回答数	
1. はい	585	93%
2. いいえ	44	7%
無回答	2	0%
	631	



◆ 本邦関係者の93%（585件）が、ボランティアからの情報を受信している。

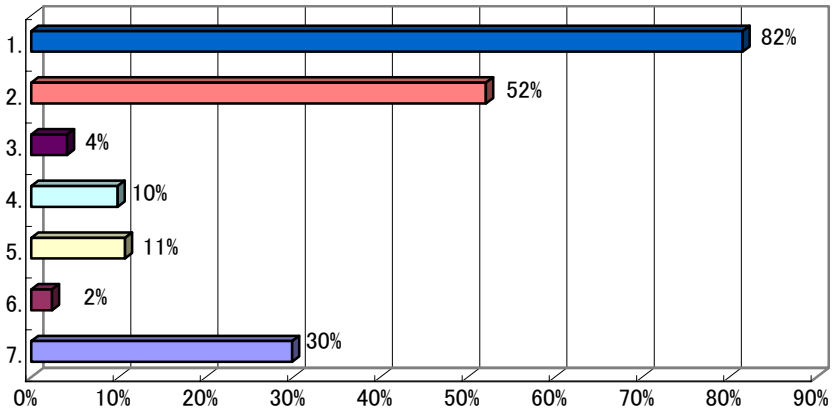




◆「大洋州」を除く地域で、90%以上が情報を受信している。「中近東」では100%であった。
◆「留守家族」では96%、「所属先」では81%が情報を受信している。

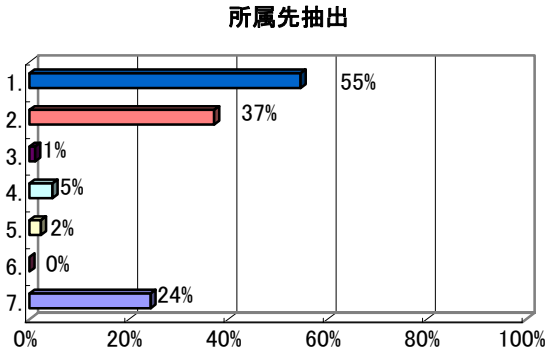
質問2（質問1で1.と回答された方に）具体的にどのような媒体で受信されましたか。（複数回答可）

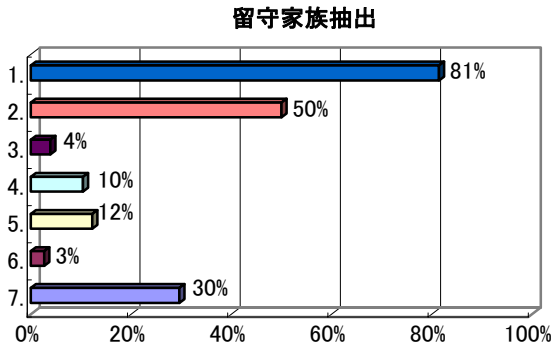
	回答数	
1. E-mail	477	82%
2. 手紙	305	52%
3. 現地におけるメディア（新聞・テレビ・ラジオ等）	24	4%
4. 日本の新聞	58	10%
5. 日本のテレビ	63	11%
6. 日本のラジオ	14	2%
7. その他	175	30%
	585	100%



注 質問1で1.との回答者585人を100%とした。

◆ 82%（477件）が回答しているE-mailが最多で際立っている。52%（305件）の手紙が続いた。複数の媒体を介して受信しているようである。
◆ その他は、30%（175件）が挙げているが具体的な回答は多く得られなかった。

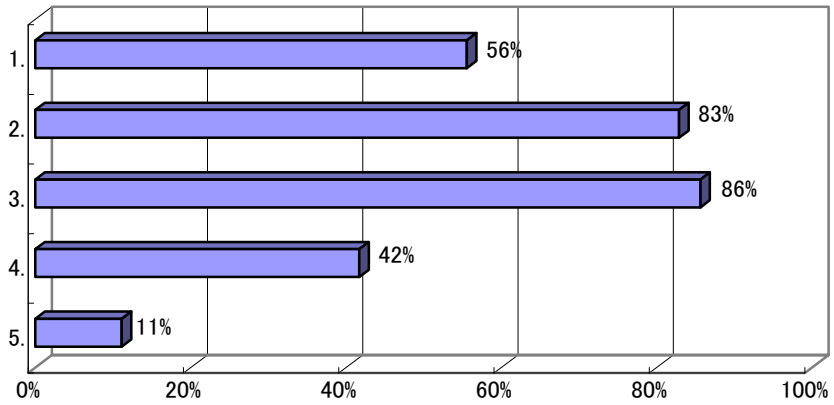




◆ その他　　回答数
・ インターネット（HP、ブログ等）　13
・ 電話　29
・ 一時帰国　2
・ 隊員報告書　3　など

質問3（質問1で1.と回答された方に）具体的にどのような情報を受信されましたか。
（複数回答可）

	回答数	
1. 派遣国の文化・歴史・言語等	**325**	56%
2. 派遣国の人々の様子	**485**	83%
3. ボランティアの活動状況	**501**	86%
4. ボランティアの友好・親善活動	**244**	42%
5. その他	**65**	11%
	585	100%



注 質問1で1.との回答者585人（93%）を100%とした。
◆「ボランティアの活動状況」、「派遣国の人々の様子」が共に80%を超え受信されている。

◆ 記述形式で具体的に回答していただいた。回答数は267件。
◆ 回答例

- 活動の難しさや、一人では現地の人々と協力して活動することに限界があること。本当にその国のためになっているのかなどの悩み。
- 国民性や文化の違いによる心の葛藤。
- 勤務先のHP上で活動についてのレポートが報告されている。参加した目的や経緯、活動状況など全般に報告されている。
- 現地文化の伝わる物を職場に送ってもらい、皆で海外文化を楽しみにしている。会報にも寄稿してもらい、広く活動の理解を得ている。
- 結婚式に出席した時のことや、ホームステイ先の家族構成、そこでの生活のこと。
- ビデオにより活動の生の様子が送られてきた。遠い国が身近に感じられた。

- 派遣国の人たちの人情味、人に対する愛情や優しさなど。活動の内容や交流の様子。人々の労働、仕事への意欲、衣装や文化など。
- 生活状況から習慣やものの考え方、価値観など、様々な事柄の原因が貧困から来ていることが分かる。
- 生徒が学校に行きたくても、子供が家事に従事しているために困難な状況。

- メールでのやり取りで一緒に暮していたときよりもお互いの考え方を知り合えたことは、予想外の収穫だった。
- 通信状況が悪く、なかなか連絡が取れず非常に困る。

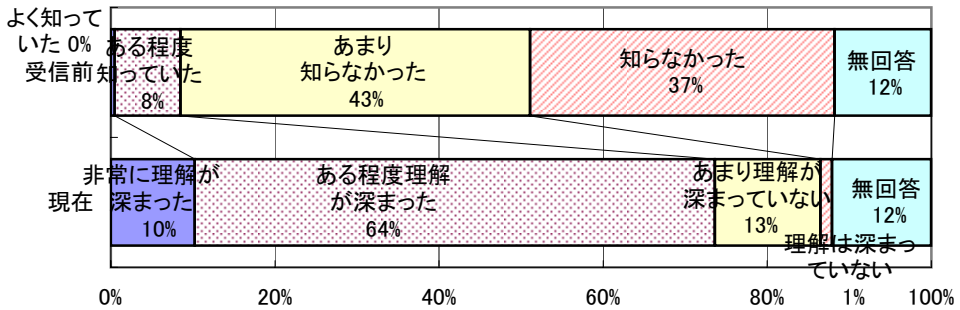
情報受信前と現在とを比較して、あなたのボランティアの派遣国に関する知識や理解は深まりましたか。

質問4 受信前、派遣国について・・・

	回答数	
4. よく知っていた	3	0%
3. ある程度知っていた	51	8%
2. あまり知らなかった	266	43%
1. 知らなかった	236	37%
無回答	75	12%
	631	100%

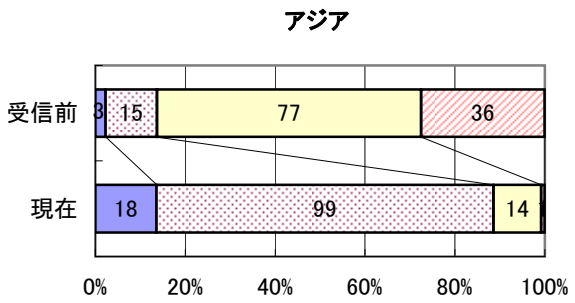
質問5 現在、派遣国について・・・

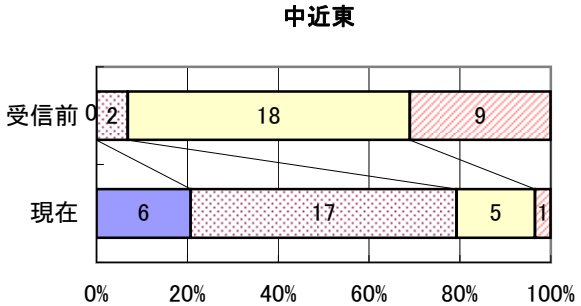
4. 非常に理解が深まった	65	10%
3. ある程度理解が深まった	398	64%
2. あまり理解が深まっていない	82	13%
1. 理解は深まっていない	9	1%
無回答	77	12%
	631	100%

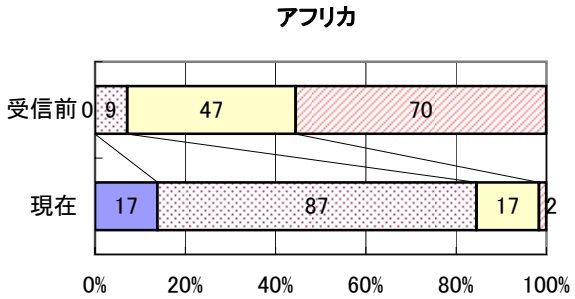


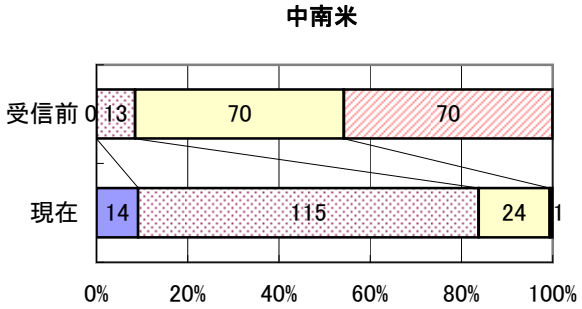
◆ 受信前、「よく」、「ある程度」を合わせた「知っていた」は、8%(54件)に過ぎなかったが、現在、「非常に」、「ある程度」を合わせた「理解が深まった」は、74%(463件)と大きな伸びを示し、受信者の派遣国に関する理解の深まりを表している。

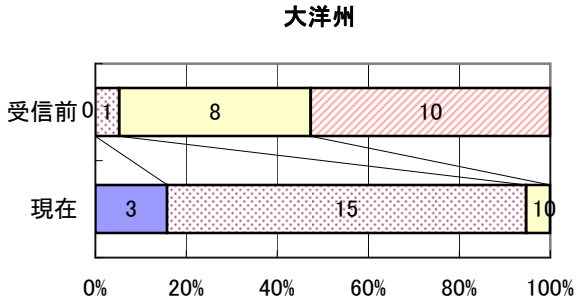
地域別抽出

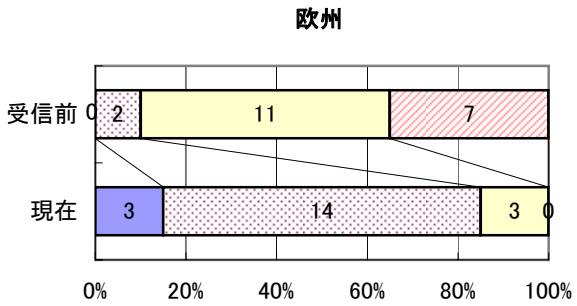






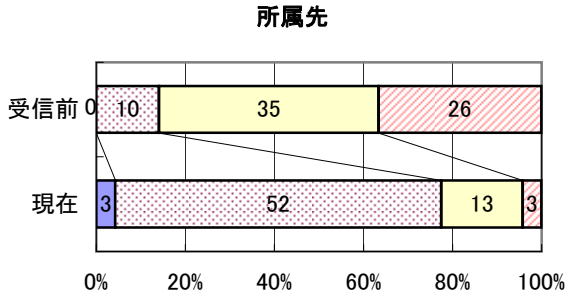


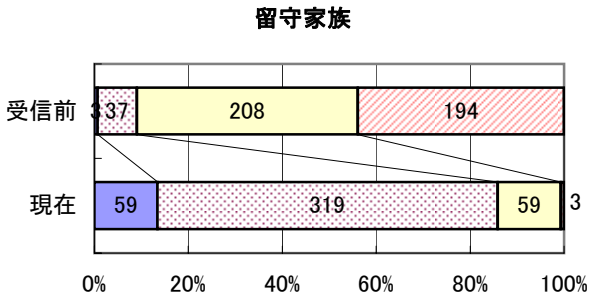




◆ 受信前では、派遣国について「よく知っていた」はアジア以外の地域はゼロである。各地域とも、受信前と現在ではその認知度は大きく伸びている。

関係別抽出





◆ ボランティアの派遣国について、所属先は受信前に「よく知っていた」の回答はゼロである。受信者の派遣国に関する知識や理解は、ボランティアからの情報受信によって深まっている。

質問6（質問4及び質問5で受信前と現在で変化があった方に）派遣国に関する認識がどのように変化したのか、変化の例やエピソードを具体的にお書き下さい。

◆ 記述形式。回答数366件。
◆「派遣国について、名前も、どこにあるかも知らなかったが、現在は・・・。」という回答が多数見られ、様々なエピソードが寄せられた。

◆ 回答例

- 場所はもちろん存在さえ知らなかったが、活動状況を知り、関心を持つようになった。
- どこにあるかも知らなかったが、いろいろと調べ、実際に訪問した。自分の目で確かめて本当に良かった。
- バナナのことくらいしか知らなかったが、その生活は昔の日本に似ていることを知った。
- 地図を良く見るようになった。今では派遣国のみならず、各地の社会、文化に興味を持つようになった。
- TVや雑誌で見る都市ではなく、地方の生活の様子を知ることができた。貧富の差や教材を自分で作ることから始まるという話は、日本では想像できないし、興味深い。
- 郵便局の人も知らなかったが、私が荷物を送ることで知識が広がったようだ。
- 日本の地図では端にあり、映画を思い出すだけだったが、今は地図の中心部に存在する感じです。
- 家族のものがアラビア語を勉強するようになった。
- 日本人のような勤勉性や、働くということの認識の違いを感じた。
- 飛行機を降りて派遣先まで列車で17時間かかると聞いて、国土の広さを具体的に痛感。
- 元々ゼロに近い知識。資源のない小さな国が貧しさにあえぎつつも、国として何とか世界に出て行こうとする思いと、思うようにすすまない焦りと、教育の大切さを実感。
- 本校に、国際理解に関するコーナーができた。

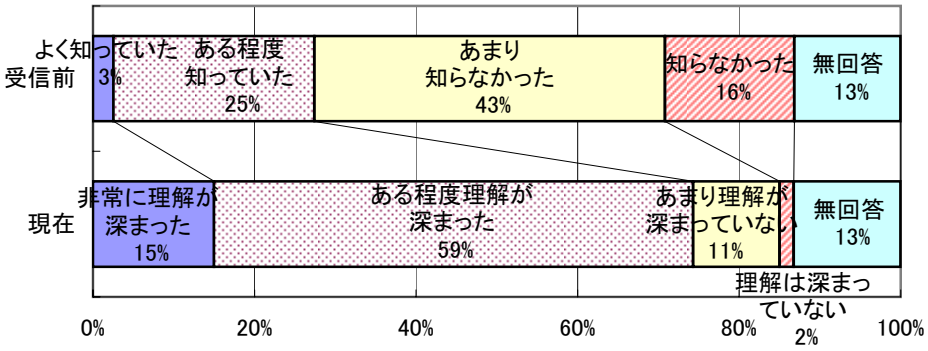
情報受信前と現在とを比較して、あなたのボランティアの活動に関する知識や理解は深まりましたか。

質問7 受信前、ボランティアの活動について・・・

	回答数	
4. よく知っていた	16	3%
3. ある程度知っていた	157	25%
2. あまり知らなかった	274	43%
1. 知らなかった	101	16%
無回答	83	13%
	631	100%

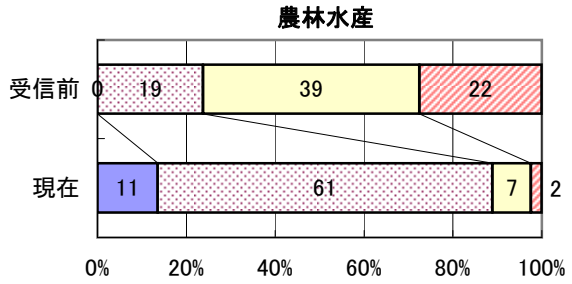
質問8 現在、ボランティアの活動について・・・

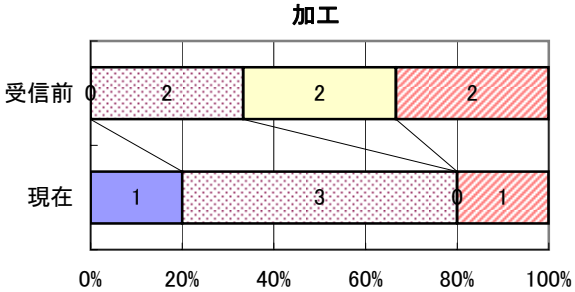
	回答数	
4. 非常に理解が深まった	94	15%
3. ある程度理解が深まった	376	59%
2. あまり理解が深まっていない	67	11%
1. 理解は深まっていない	11	2%
無回答	83	13%
	631	100%

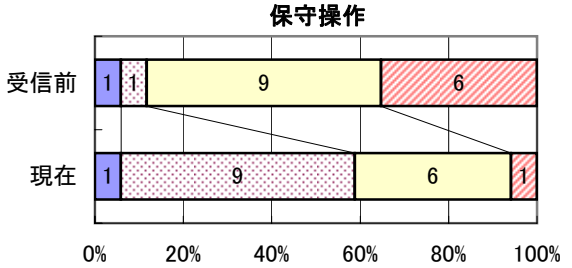


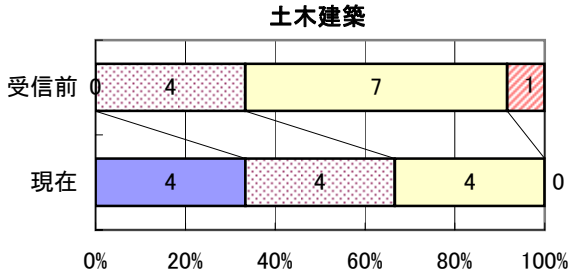
◆ 受信前、「ある程度」を含む「知っていた」は28%（173件）であったが、現在では74%（470件）へと伸び、受信者のボランティアの活動についての理解の深まりが表れている。

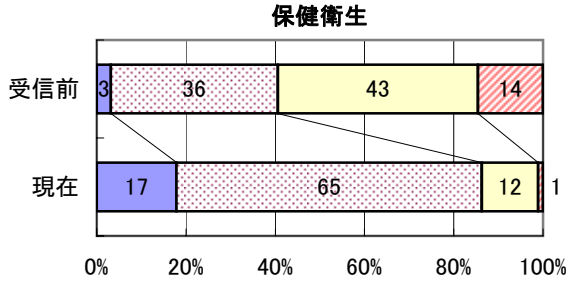
職業分野別抽出

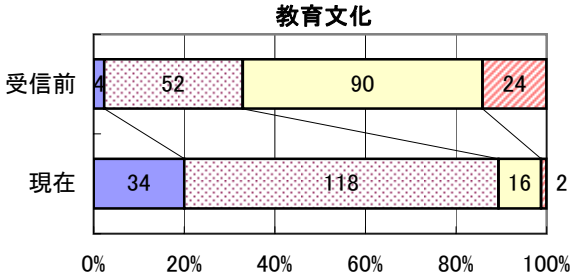


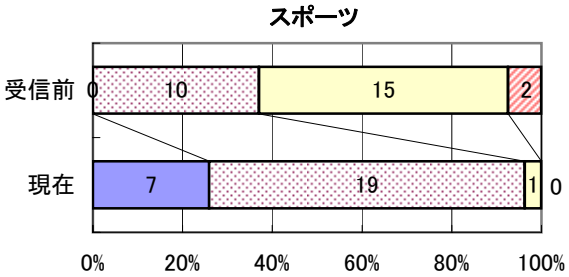






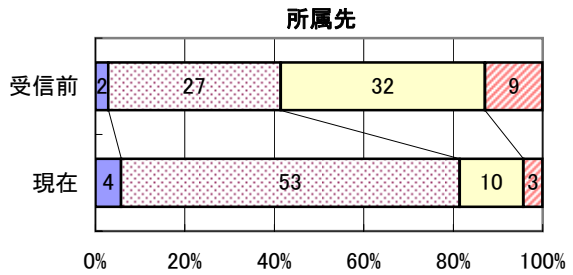


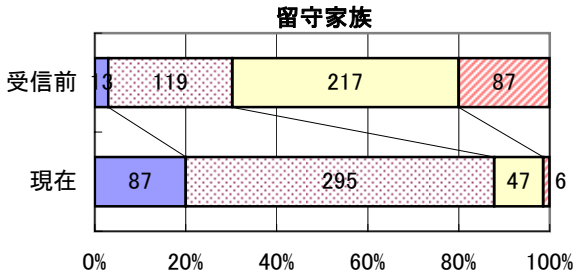




◆ 各職種とも、情報受信によって、現在は高い伸び率で「理解が深まった」と回答している。中でも、「農林水産」は、受信前「知っていた」が23%であったが、現在では89%が「深まった」と回答し最も伸びている。

関係別抽出





◆「ある程度」を含む、「知っていた」から「理解が深まった」への伸びは、所属先では41%から81%、留守家族では30%から88%で、ともに大きく伸びている。

質問9（質問7及び質問8で受信前と現在で変化があった方に）ボランティアの活動に関する認識がどのように変化したのか、変化の例やエピソードを具体的にお書き下さい。

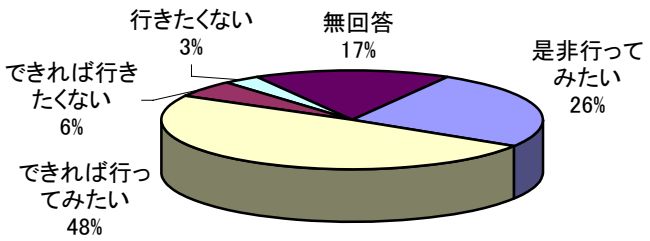
◆ 記述形式。回答数301件。
◆ 派遣国での活動環境やその苦労に対する認識、その中でのボランティアの充実感や成長を感じるといった回答が多く寄せられた。また、「自分にできることを考える、実行するようになった」「日本での生活を見直した」など、ボランティア活動が身近になったという回答も多かった。ボランティア活動を賞賛すると同時に、ボランティア事業のあり方についての言及も散見され、関心の高さがうかがえた。

◆ 回答例

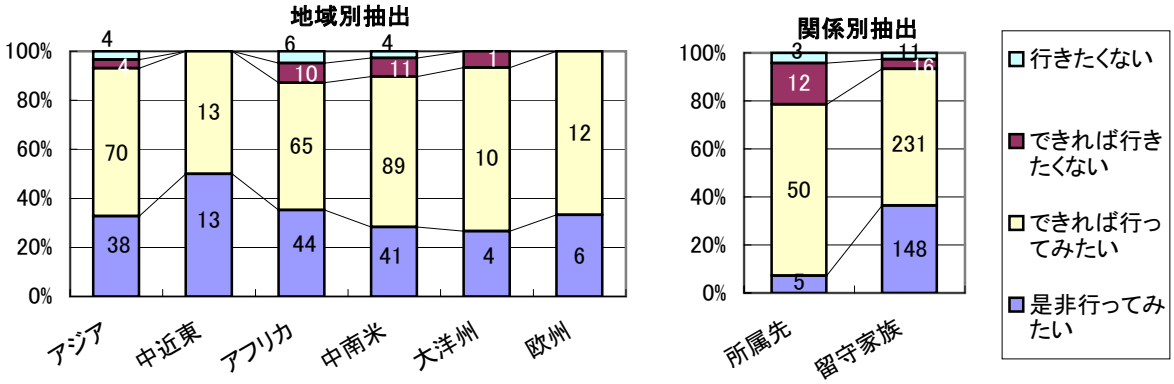
- JICAの活動やボランティアの活動に、夫婦ともども関心を持つようになった。
- ボランティアについて、自分にできることを考えるようになった。できることがあればやってみたい気持ちもある。
- ボランティア活動が専門分野だけにとどまらないでいると感じた。訪問し、より強く感じたことが有意義だった。
- 井戸を掘ったりの技術支援面を思い描いていた。そういった面が中心であろうが現地の人々と共に考え生活し、心を通わせることでボランティア自身が成長させてもらっていると感じた。
- 一般的援助ではなく、相互に交流することで得るものが多い。世界の広さ、人々の生活の多様さを知り、日本での生活を見直そうと思った。
- 海外協力の大切さを広めたいと思い、勤務先(高校)にJICA職員を招いてボランティア講座をしてもらった。
- 「時間がかかるのだろう」、「このようにしたら」、など無関心だったことを自分なりに考えるようになった。
- ボランティア活動が結果的にその国に評価されないこともあるようだ。活動が一時的にならないように期待する。

質問10 ボランティアからの情報によって、ボランティアが派遣されている国へ行ってみたいと思われましたか。

	回答数	
4. 是非行ってみたい	161	26%
3. できれば行ってみたい	311	48%
2. できれば行きたくない	35	6%
1. 行きたくない	19	3%
無回答	105	17%
	631	100%



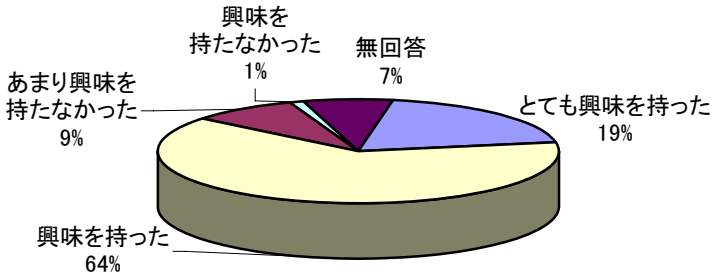
◆「是非行ってみたい」、「できれば行ってみたい」を合わせると74%(472件)に及ぶ。また、質問としてはないが、「実際に派遣国を訪問した」という回答者が、77件(全回答者の12%)に上り、情報受信によって、その国への関心が高まっていることがうかがえる。



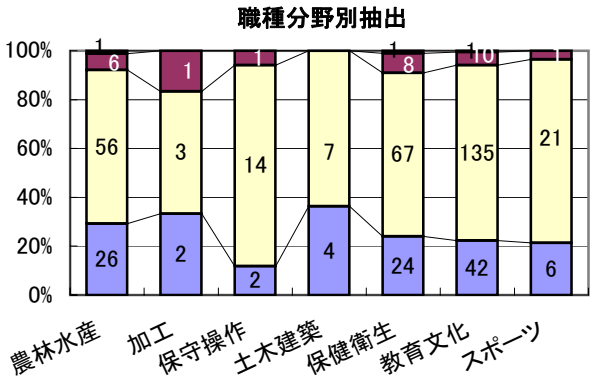
◆ 地域別では、「アフリカ」以外は、「できれば」を合わせた「行ってみたい」と90%以上が回答し、「中近東」、「欧州」では、100%が「行ってみたい」と回答している。
◆ ボランティアとの関係別では、「留守家族」の90%超が「行ってみたい」と回答しているのに対し、「所属先」は80%未満であった。

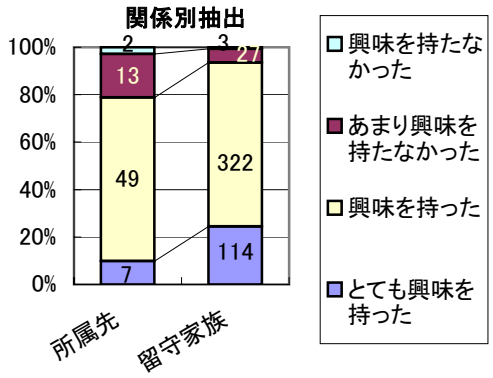
質問11 ボランティアからの情報によって、ボランティア活動に興味をもたれましたか。

	回答数	
4. とても興味を持った	122	19%
3. 興味を持った	402	64%
2. あまり興味を持たなかった	55	9%
1. 興味を持たなかった	7	1%
無回答	45	7%
	631	100%



◆「興味を持った」、「とても興味を持った」を合わせると、83%(524件)に上る。前問に続き情報受信によって、ボランティア活動への興味が増していることがわかる。





◆ 職種分野別では、「加工」を除き、「興味を持った」が90%を超えている。
◆ ボランティアとの関係別は、前問と同様に「留守家族」の90%以上が「興味を持った」と回答しているが、「所属先」は80%未満であった。

以上

帰国ボランティアへのアンケート調査結果

（平成17年度実施）

１．調査目的

本調査は、ボランティア事業の3つの視点の1つである「ボランティア経験の社会への還元」（視点Ⅲ）について、帰国ボランティアがどのような社会還元活動を実施しているのか、また市民社会へどのように参加貢献しているのかを測定するため、帰国後2年及び帰国後5～7年を経過した元ボランティアに対してそれぞれアンケート調査を実施したものである。

１７年度においては、１５年度（主に１２年度３次隊～１３年度２次隊）及び１０～１２年度に帰国した隊員（主に７年度３次隊～１０年度２次隊）のうち、回答があった1,314名（15年度397名及び10～12年度917名）を集計の対象として結果を取りまとめた。

２．調査結果概況

調査結果の詳細はそれぞれ別添の通りであるが、視点Ⅲにおける全体的な概況としては、次の通りである。

（1）社会還元の媒体であるボランティア自身の変化

ア　ボランティアに参加したことにより自身の内面がポジティブに変化したと評価している者は多い。国際理解が深まった（99％）ことはもちろん、ほとんどの者が価値観（91％）や人間性（87％）、問題解決能力（80％）の向上を認めている。その他忍耐力、自立性、積極性といった自身の成長や日本・日本人の意識が向上したと感じている者も多い。

イ　これに対して、ボランティアへの参加が自身の技術向上に役立った、キャリアアップに影響を与えたと感じている者は全体の60％程度に過ぎず、「周囲の関係者の不理解・低評価（ボランティアへの参加は遊びに行って来ただけ、物好き・変わり者といったイメージ等）」、「実務のブランク」、「逆カルチャーショックによる疎外感（日本の価値観に対する違和感、日本のマイナスの面がクローズアップ等）」といったネガティブなインパクトを感じている者が少なくない。

ただし JICA のボランティア事業に参加したことにより、帰国後他のボランティア活動へ参加するようになった者は多い（59％）。

（2）帰国後のボランティアの進路状況

ア　現職参加者については、復職後に退職する者の割合が年を経るにつれて増えている（帰国後2年を経過したボランティアの場合15％であるのに対し、帰国後5～7年を経過したボランティアの場合には、25％に増加している。）。

イ　現職参加者以外の者（現職参加であったが帰国後元の職場へ復帰しなかった者も含む。）については、民間企業に進む者が最も多い（帰国後5～7年の場合には43％。）が、JICA 関係の業務に就く者も多い（同13％。）。なお国際機関へ進んだ者はわずか12人のみ（同1.3％）である。

（3）直接還元

ア　帰国後にボランティアがその経験や任国、国際協力について何らかの紹介活動を行った割合は9割弱に及ぶ。具体的な活動としては、募集説明会や国際協力出前講座等 JICA の制度を通じて実施した者が多いが、テレビやラジオに出演して紹介を行ったり（帰国後2年の場合には10％、帰国後5～7年の場合には11％。）、執筆活動を行った者（同14％、14％）もいる。また約24％が小・中・高等学校で講演している。

イ　これらの活動により一般市民が国際協力について理解や認識を高めるよい機会になっていると感じている者は、帰国後2年、5～7年ともに93％に達しており、社会還元に対する認識は高いと言える。

　ただしネガティブなコメントとして、「プレゼンテーションスキルが足りないのでうまくアピールできない。」、「元々興味を持っている人を対象とした事例が多く、全く一般の市民を対象としたものは少ない」といった声も聞かれ、社会還元を行うためのボランティアに対する研修の充実や還元する環境の整備が望まれる。

（4）間接還元

　帰国後に何らかの形で市民社会の活動に参加した者は約6割に及ぶ。自治体が実施する国際交流活動に参加している者が最も多く（帰国後2年、5～7年ともに15％）、NGO/NPO の活動に参加した者は帰国後2年の場合には14％、帰国後5～7年の場合には13％であるが、NGO/NPO を立ち上げたのはともに1％のみであった。

（5）JICA の支援体制

　帰国後のキャリア形成に関する JICA の支援（求人情報の提供、キャリア・パスに関するアドバイス、進路開拓支援）については、あまり利用されていないのが現状であるが、進路相談カウンセラーについては93％が「よく利用する」、「時々利用する」と回答しており、86％が同制度の有益性を評価している。

NGO/NPO に関する JICA の支援制度（インターン制度）についてはほとんど利用されていない（１％）が、これについてはそもそも予算が年間５００万円程度であり２件程度しか採択できないことも利用率が低い要因である。

以上

平成17年度　帰国ボランティアアンケート調査結果

（帰国後2年を経過したボランティア）

1．アンケート実施概要

(1) 対象者　：平成15年度に帰国した協力隊員　969人

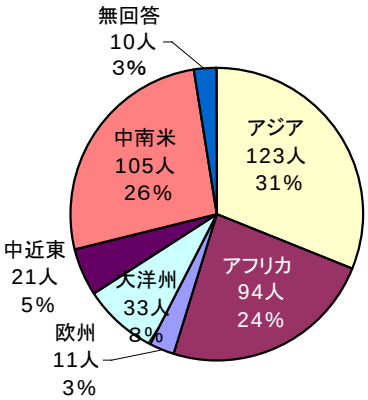
(2) 実施方法　：郵送による送付、及び回収

(3) 実施期間　：発送　平成17年10月下旬　回収　平成17年10月下旬～12月末日

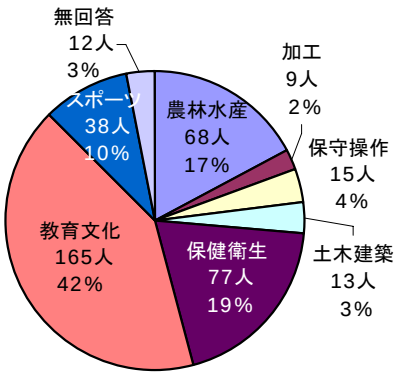
(4) 回収総数　：397通　(回収率41.0%)

アンケート回答者の内訳

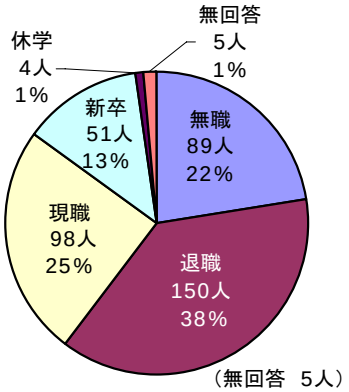
ボランティアの派遣地域



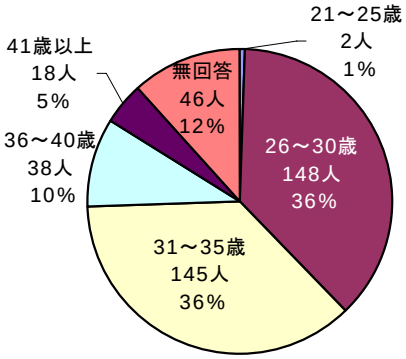
ボランティアの職種



ボランティアの参加形態



ボランティアの年齢層



2．調査結果概要

- ◆ 帰国後のキャリアパスについては、「民間企業」が32%（126人）で最多、ついで「国家･地方公務員」が13%（50人）であった。
- ◆ 派遣前と帰国後を比較すると、「国際理解（深まったか）」は、「非常に変化した」、「ある程度変化した」の総数が99%(393人)に上り、「価値観（前向きに変化したか）」も91%(360人)と、プラスに評価している。
- ◆ 帰国後のキャリア形成支援については、各項目において、「利用したことがない」、「存在を知らない」が59%～81%に及び、ボランティア自身に認知されていない現状が明らかになった。
- ◆ 帰国後、ボランティア経験や国際協力について紹介する活動は、「募集説明会･任国事情の講師」が最多（231人）であったが、「職場で活動内容を紹介」（148人）が続いた。その他にも、学校や地域、様々な機会で積極的な活動が行われていることがわかった。
- ◆ 帰国後、45%(177人)が「任国との連絡や交流を継続している」。また、13%(50人)が「NGO/NPOの活動に参加」しており、「NGO/NPOを立ち上げた」のは1%(2人)であった。

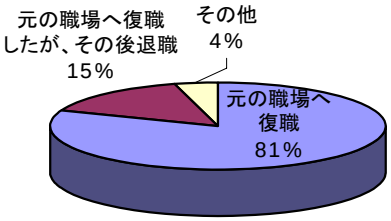
3. 調査結果

第Ⅰ部

※各質問においては、「無回答」を除いた数字を100%として計算した。
※回答数（グラフ中の数字を含む）の単位は人

質問1： 帰国後の進路について教えてください。

・現職参加だった方

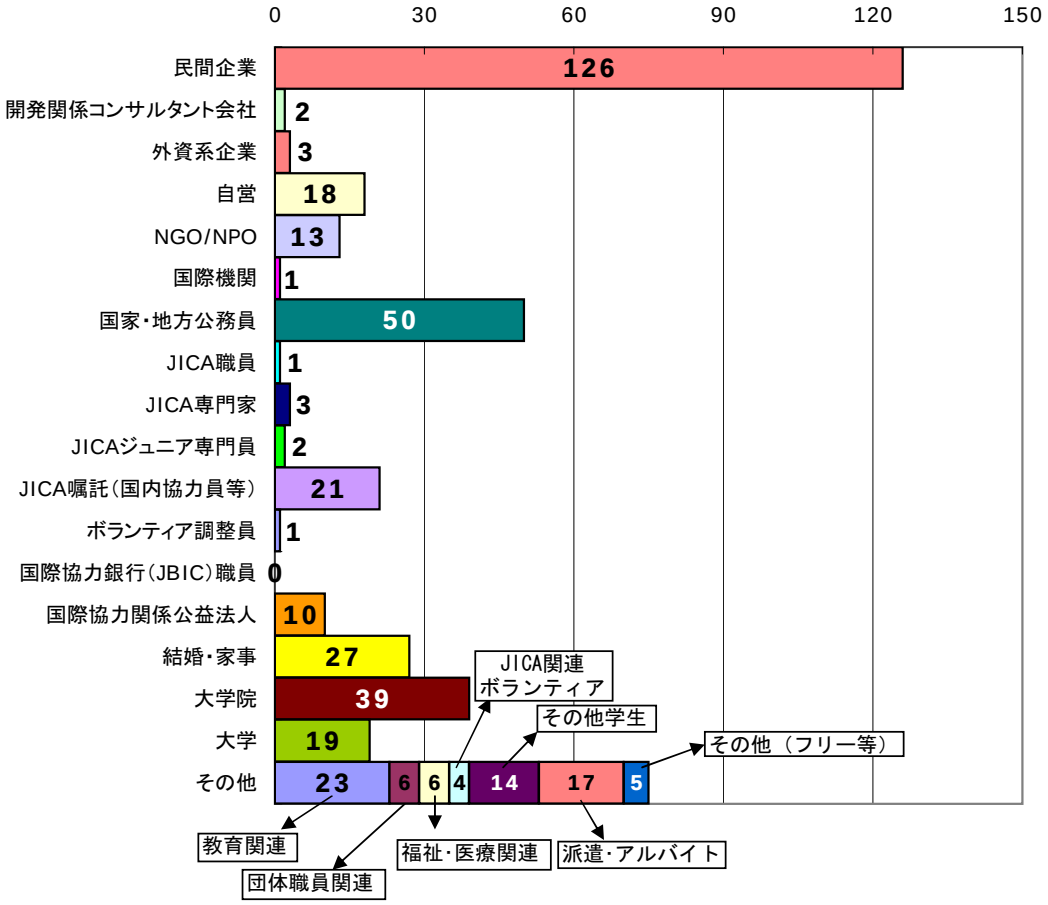


◆ 回答者は99人（25%）。

◆ 現職参加者では81%(80人)が帰国後も復職し、継続勤務をしているが、15%(15人)が復職後、退職している。

元の職場へ復職	80
元の所属先に復職したが、その後退職した	15
その他	4

・現職参加でなかった方と現職参加だったがその後退職された方に、帰国から現在までのキャリアパスについて（複数回答）



◆ 回答者総数は397人。

◆ 「現職参加ではなかった方」と「現職参加だったがその後退職された方」の、帰国後のキャリアパスについては32%(126人)が「民間企業」へ就職。ついで、13%(50人)が「国家・地方公務員」であった。

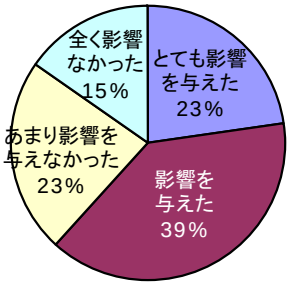
◆ 「大学院」、及び「大学」へは15%(58人)が進学。「JICA職員」や「JICA嘱託」を含むJICA関連への進路は7%(28人)にとどまった。

◆ 「結婚・家事」については、7%(27人)。 その他19%(75人)のうち、23人(その他の30%)が講師、教職員などの教育関連の業種へ就職している。

質問2： ボランティアに参加したことは、あなたのキャリア形成に影響を与えましたか？

2-1．キャリアアップ

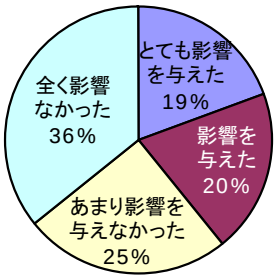
評　価（評　点）		回答数
4	とても影響を与えた	89
3	影響を与えた	151
2	あまり影響を与えなかった	90
1	全く影響なかった	60



◆「とても影響を与えた」、「影響を与えた」を合わせると62%(240人)。しかし反面、「キャリアダウン」に影響を与えたとの回答も見られる。

2-2．留学・進学

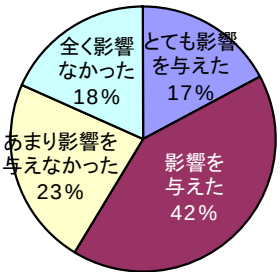
評　価		回答数
4	とても影響を与えた	65
3	影響を与えた	67
2	あまり影響を与えなかった	84
1	全く影響なかった	120



◆ 39%(132人)が「とても影響を与えた」、「影響を与えた」と回答している。実際の進学者は58人。

2-3．他のボランティア活動への参加

評　価		回答数
4	とても影響を与えた	62
3	影響を与えた	148
2	あまり影響を与えなかった	82
1	全く影響なかった	66

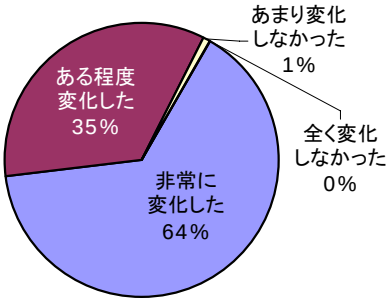


◆「とても影響を与えた」、「影響を与えた」と59%(210人)が回答しており、帰国後のボランティア活動に少なからず影響を与えていることがうかがえる。

質問3： 次の項目について派遣前と帰国後を比較してください。

3-1. 国際理解（深まったか）

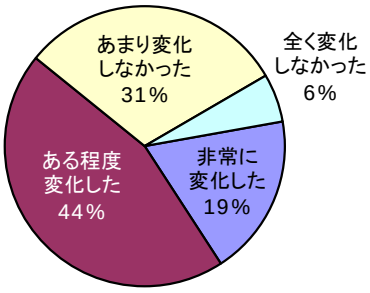
評　価（評　点）		回答数
4	非常に変化した	256
3	ある程度変化した	137
2	あまり変化しなかった	3
1	全く変化しなかった	0



◆「非常に変化した」、「ある程度変化した」と回答したのは、ほぼ全員の99％（393人）を占めており、ボランティア活動を通して国際理解は確実に深められている。

3-2. 自身の技術やスキル（向上したか）

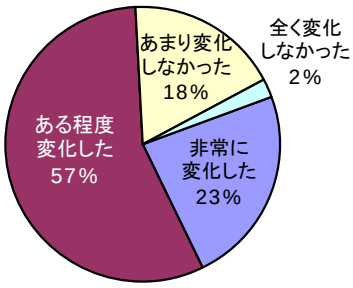
評　価（評　点）		回答数
4	非常に変化した	73
3	ある程度変化した	178
2	あまり変化しなかった	121
1	全く変化しなかった	22



◆「非常に変化した」、「ある程度変化した」と回答したのは63％（251人）。しかし、後述の「ボランティア活動に参加することで、ネガティブなインパクトはありましたか」という質問に対しては、「スキル・アップが出来ない」等の意見も挙げられている。

3-3. 問題解決能力（向上した）

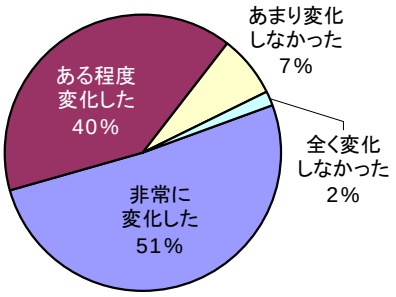
評　価（評　点）		回答数
4	非常に変化した	91
3	ある程度変化した	221
2	あまり変化しなかった	70
1	全く変化しなかった	9



◆ 80％(312人)が「非常に変化した」、「ある程度変化した」と回答した。

3-4. 価値観（前向きに変化したか）

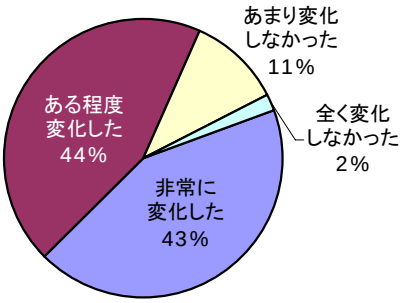
評　価（評　点）		回答数
4	非常に変化した	202
3	ある程度変化した	158
2	あまり変化しなかった	28
1	全く変化しなかった	7



◆ 91%(360人)が「非常に変化した」、「ある程度変化した」と回答した。

3-5. 人間性（強くなったか）

評　価（評　点）		回答数
4	非常に変化した	169
3	ある程度変化した	174
2	あまり変化しなかった	42
1	全く変化しなかった	8



◆「非常に変化した」、「ある程度変化した」を合わせた87%(343人)が、人間性が強くなったと回答している。

3-6. その他（具体的に）

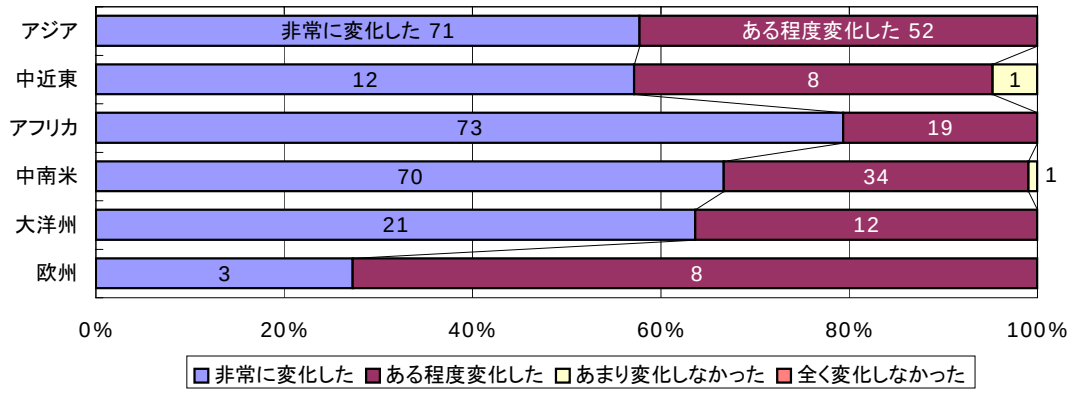
＊ 自己啓発・意識向上 （適応力、忍耐力、自立性、積極性、進路開拓等）	**21**
＊ 視野の広がり （広い視野、多角的な見方、世界的な視野の広がり等）	**11**
＊ 語学力・コミュニケーション能力の向上	**7**
＊ 日本に対する理解 （日本に対する問題意識、日本人としての意識向上等）	**6**
＊ 人間関係の拡大 （人脈・交友関係の広がり、新たな友人等）	**6**
＊ 人生観 （人生観の再認識、家族愛等）	**4**
＊ その他 (情熱を失った等、後ろ向きの変化）	**7**

◆「自己啓発・意識向上」(21人)や「視野の広がり」(11人)の他、「語学力・コミュニケーション能力の向上」、「日本に対する理解」、「人間関係の拡大」など、プラス面に言及する回答が多数であった。

＜派遣地域別＞　抽出データ

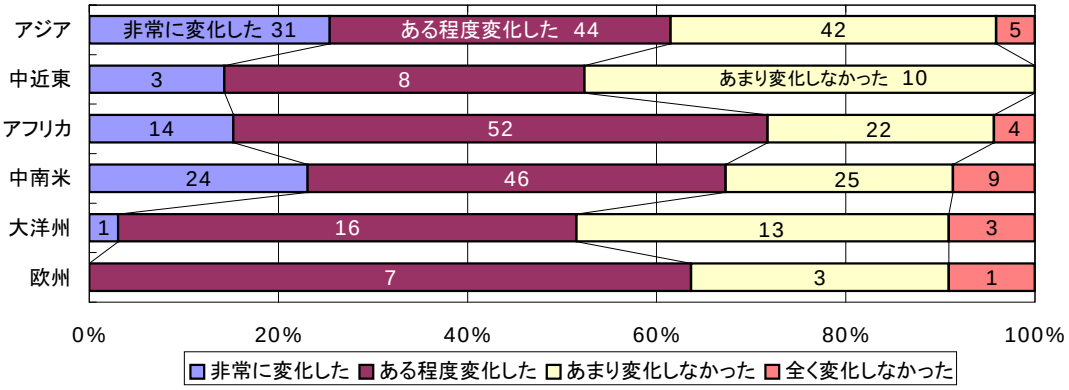
質問3a：次の項目について派遣前と帰国後を比較してください。

3a-1．国際理解（深まったか）



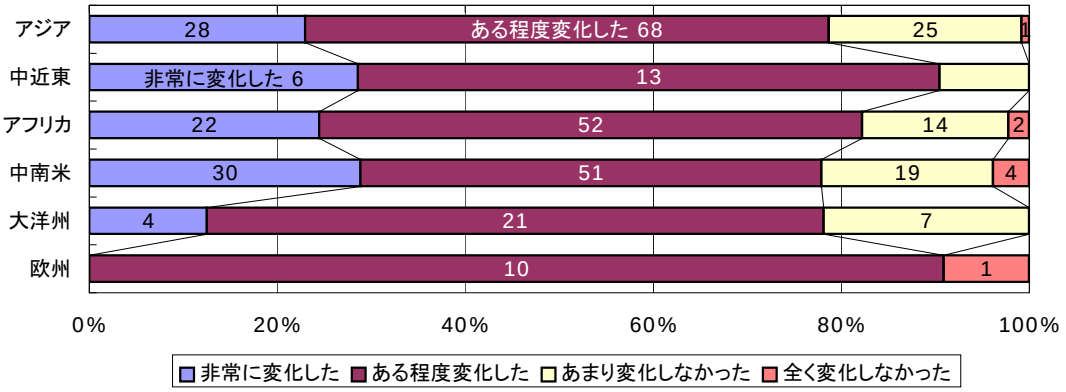
◆ 全ての派遣地域で、ほぼ100％が「非常に変化した」、「ある程度変化した」と回答している。特に、アフリカでは、「非常に変化した」が80％弱にのぼり、他地域よりも高い。

3a-2．自身の技術やスキル（向上したか）



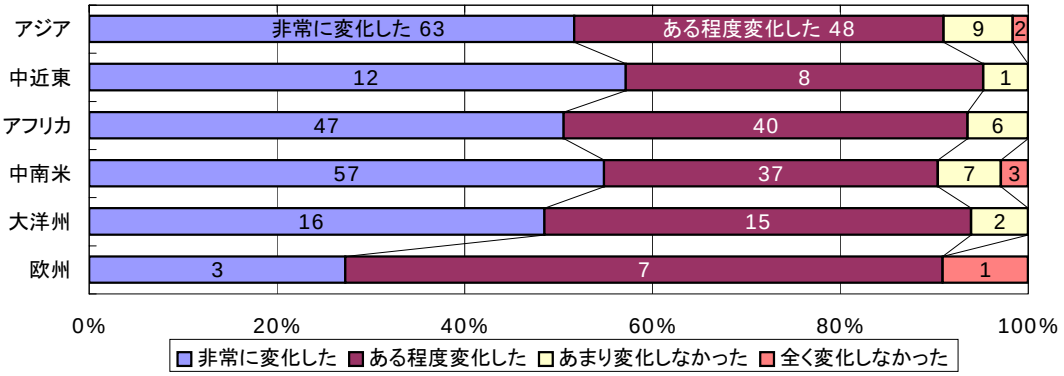
◆「非常に変化した」、「ある程度変化した」は、中近東、大洋州では約50％と他の地域に比べ低い。約70％を示したアフリカが最高値であった。

3a-3．問題解決能力（向上したか）



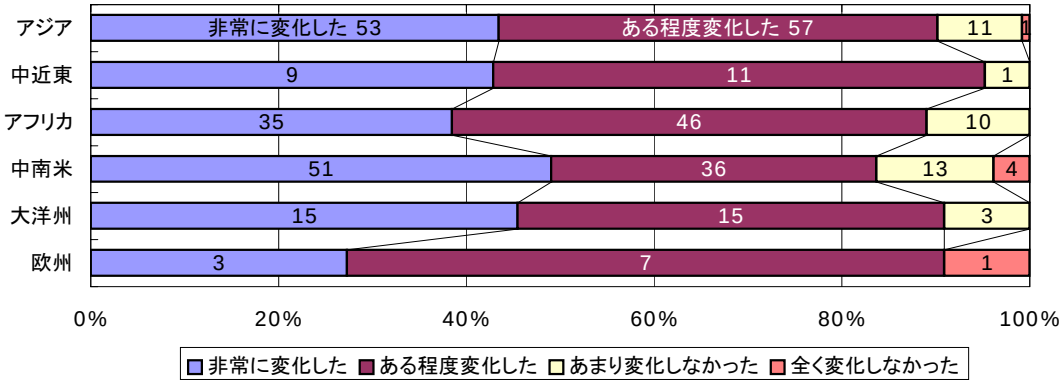
◆ 中近東、欧州では、「非常に変化した」、「ある程度変化した」を合わせると90％にのぼる。他の地域においても、80％前後であり、地域に関わらず問題解決能力の向上が認められる。

3a-4. 価値観（前向きに変化したか）



◆ 地域別に大きな違いはなく、全ての地域で90％以上が価値観の前向きな変化があったことを認めている。

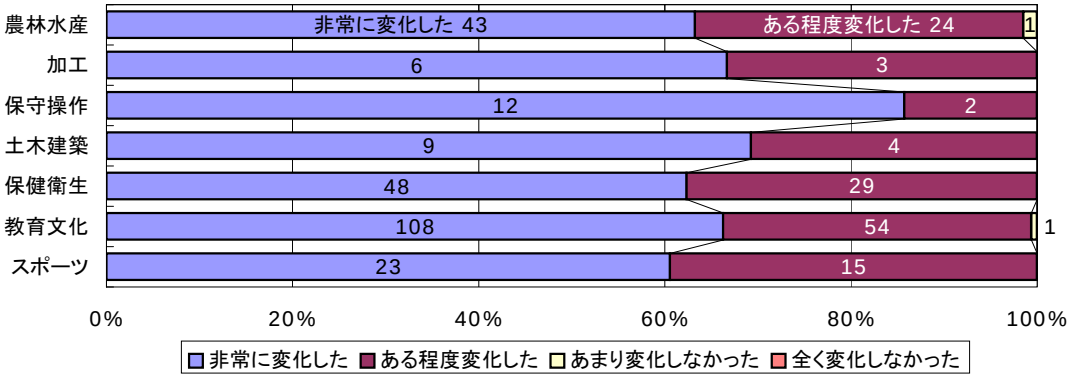
3a-5. 人間性（強くなったか）



◆ 地域別の大きな違いは見られない。中南米は、「非常に変化した」、「ある程度変化した」が他地域に比べ若干低い。

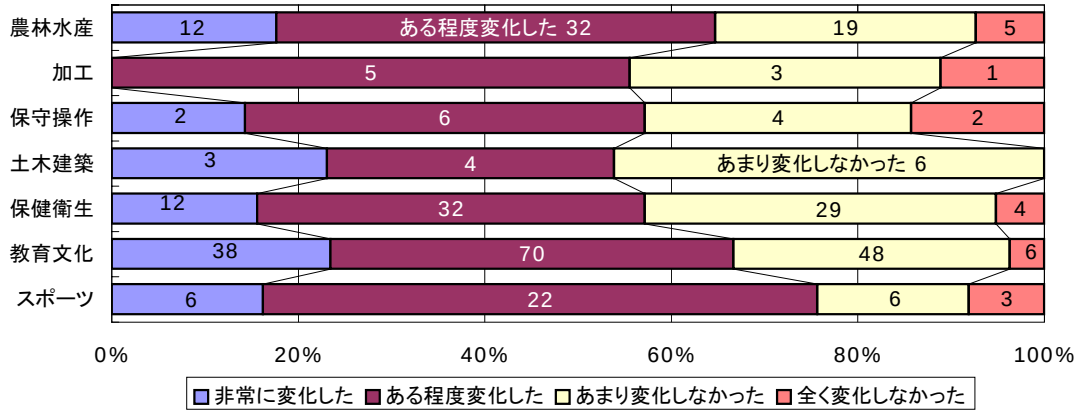
＜派遣職種別＞抽出データ
質問3b：次の項目について派遣前と帰国後を比較してください。

3b-1. 国際理解（深まったか）



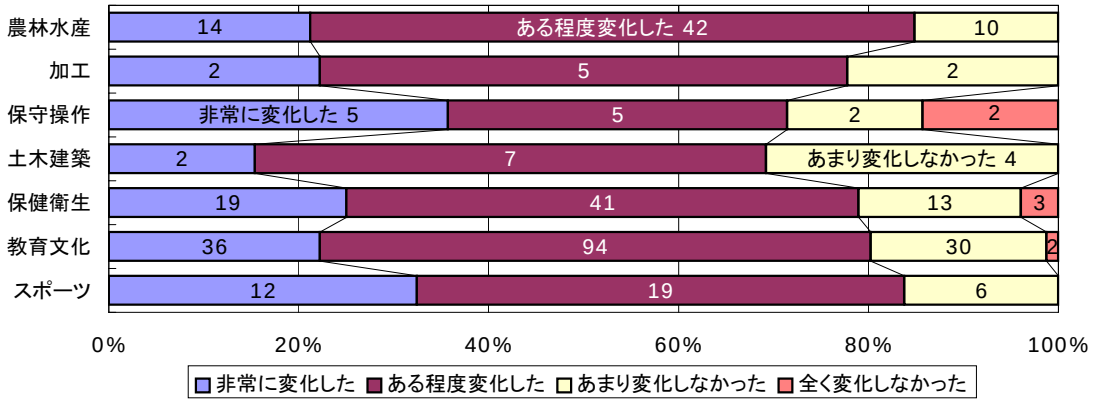
◆ 職種に関わらず、国際理解は深まっている。「保守操作」は、「非常に変化した」が他の職種に比べ、80％超と突出して高い。

3b-2. 自身の技術やスキル（向上したか）



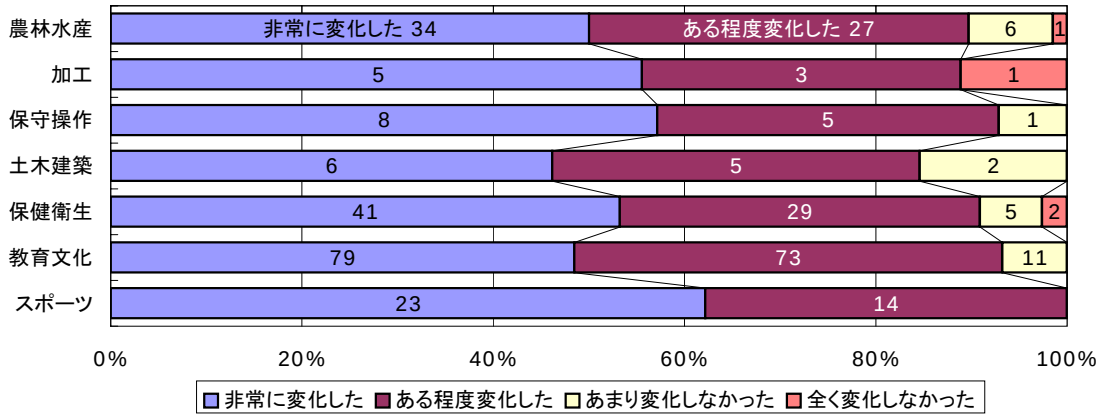
◆「スポーツ」では、70％超が「非常に変化した」、「ある程度変化した」と回答。その他の職種は、60％前後にとどまっている。

3b-3. 問題解決能力（向上したか）



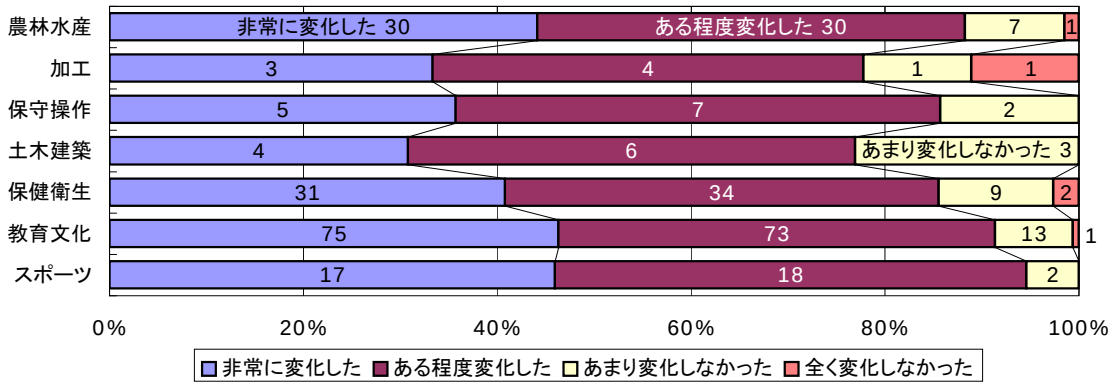
◆「農林水産」が、問題解決能力の向上を最も認めている（85％）。逆に最も低いのは「土木建築」で69％であった。

3b-4. 価値観（前向きに変化したか）



◆ 大きな違いは見られず、全職種で、90％前後が価値観の前向きな変化を認めている。「スポーツ」は100％であった。

3b-5. 人間性（強くなったか）



◆「加工」、「土木建築」では、「非常に変化した」、「ある程度変化した」が80％未満となっている。

＊ボランティア活動に参加することで、ネガティブなインパクトはありましたか。
ある場合には具体的にお書きください。　　（複数回答）

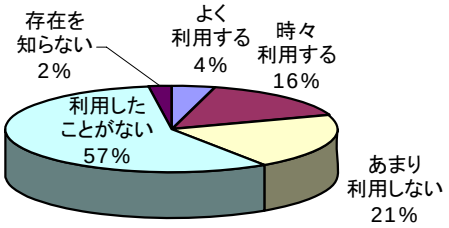
《スキル・キャリアアップが出来ない》 ・2年間の実務、キャリア両面でのブランク ・キャリア（技術面）が後退した
《就職難》 ・帰国後の就職への不安 ・新卒参加での2年間はどのように役立つのか疑問 ・先入観を持つ企業が多く、活動内容を聞かずに門前払いする企業もある
《周囲・職場からの低評価》 ・職場では、ほとんどの人が「遊んでいただけ」と思っている ・会社、同僚からの評価が下がる ・日本で使い物にならない人間が行くところだと言われ続けた ・「物好き」「変わり者」というイメージ ・不安定な生活になることに対する周囲の心配
《逆カルチャーショック》 ・日本の技術、システムについていけない ・浦島太郎状態 ・仕事の中で、価値観の違いによる違和感や無駄を感じることが多い ・日本の嫌な面に初めて気づいた ・典型的日本人のライフスタイルや価値観に興味を感じなくなった。周囲から浮いている
《派遣国に対して》 ・東洋人に対する偏見、拝金主義 ・途上国の実態（向上心、努力、創意工夫のなさ） ・何かをしてもらうことが当たり前になっている面が見受けられ悲しかった ・テロ、事故などの危険性。銃社会の恐ろしさ ・現地の人々の生活向上のためにと思い活動したが、今までの生活を変えることがよかったのだろうかと疑問に思う
《JICA・国際協力活動について》 ・援助の現場では、いかに無駄が多いか分かった ・ODAの中には、途上国の発展に役立っているとはとても思えないものもある ・国際協力のあり方や援助の意味、提供する側の意識など考えさせられた

《隊員に対して》 ・隊員や事務所スタッフが援助することに傲慢になる。謙虚さを失くすことに良い印象は持たない
《限界感》 ・自分の力のなさに対してネガティブになることがあった ・個人レベルでは、国際協力というより国際交流で終わる気がする

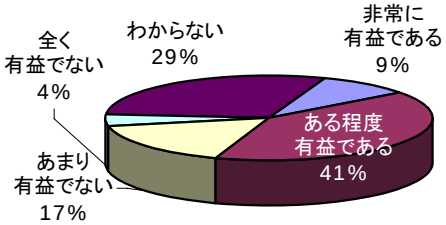
質問4： JICAでは帰国後のキャリア形成に関して様々な支援を実施していますが、1～6の活動・支援について、当てはまる数字を記入してください。

4-1. 青年海外協力隊事務局からの求人情報の提供

利　用　状　況



印　　象

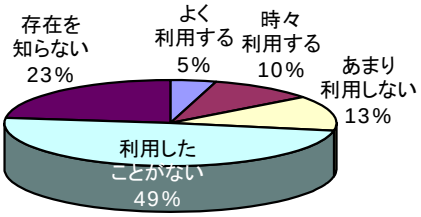


◆ 利用されていない割合は59%（221人）にのぼる。「東京中心の情報」との地方からの不満の声もあった。

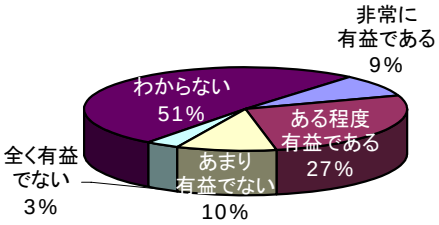
◆ 以下の「帰国後のキャリア形成支援」に関する問いでも利用されていない支援制度が多い。

4-2. JICA Partnerからの求人情報の提供

利　用　状　況



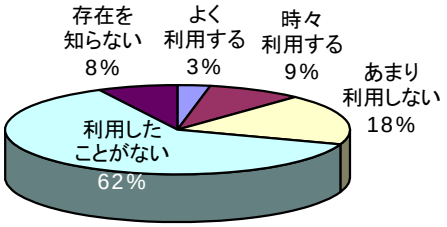
印　　象



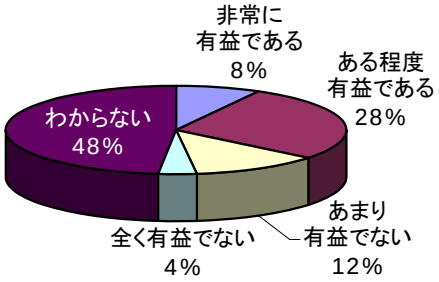
◆ 23%(86人)が「存在を知らない」、49%(183人)が「利用したことがない」と回答しており、利用率は良くない。

4-3. 就職活動・キャリアパスに関するアドバイス

利　用　状　況

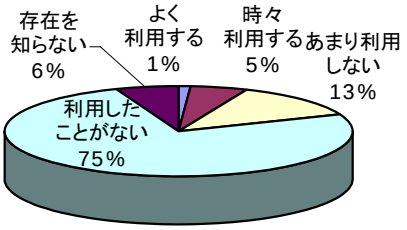


印　　象

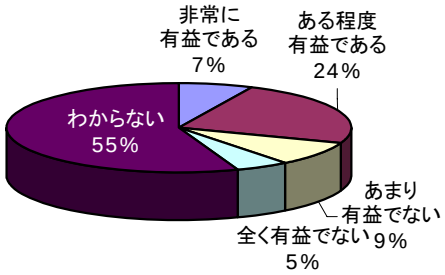


4-4. JICAによる進路開拓支援セミナーの開催

利　用　状　況



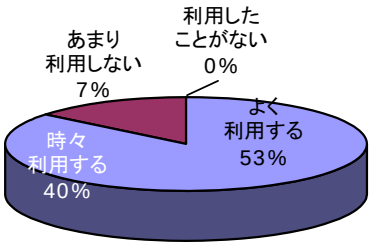
印　　象



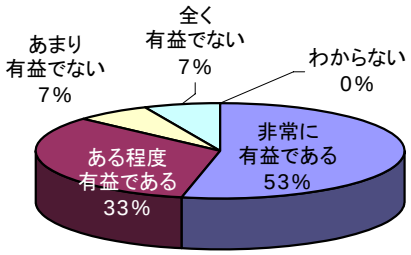
◆ この問いも同様に、「利用状況」では、6%（21人）が「存在を知らない」、75%(275人)が「利用したことがない」と回答し（合計81%）、「印象」も55%(191人)が「わからない」と回答している。

4-5及び6.　（具体的な支援を記入）

利　用　状　況



印　　象

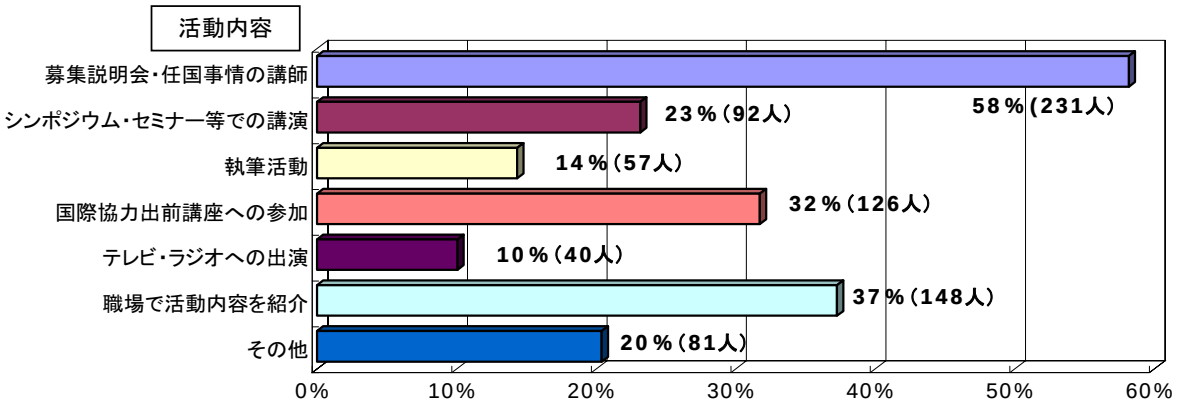


◆ 支援制度の中では、「進路相談カウンセラー」も利用されており、その印象は概ね良好であったが、「非協力的だった」、「否定的だった」とのコメントも若干見られた。

◆ その他、「JOCAのネットワーク情報を利用している」、「頼らずに自分で進路を決定した方が良い」等のコメントもあった。

第Ⅱ部

質問5: 帰国後、ボランティア経験や任国、あるいは国際協力について紹介するような活動を実施しましたか？（複数回答）



※100％＝397人（回答者総数）

《具体的な活動内容（記入のあった例）》

● 講演・活動紹介等の対象先
- 大学・専門学校等　26
- 小・中・高等学校　101
- その他団体・組織等　41

・授業（総合的な学習の時間等）
・ボーイスカウト・ガールスカウト
・教育関連（教職員・PTA等、大学院で研究）
・地域団体学習会（市民講座・婦人会・高齢者等）
・ロータリークラブ
・職業に関わる研修会
・NGO/NPO　など

● 執筆活動（取材協力・寄稿等）
- 専門誌・機関紙等　17
- 自治体・地域広報　12
- 新聞　等　4

● その他
- 写真展やコンサート開催
- 国際交流イベントに参加
- 留学生の受入れ
- 語学ボランティア　等

◆ 何らかの活動をした者は356人（90％）。

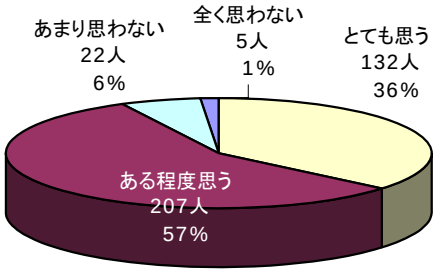
◆ 募集説明会や任国事情の講師、国際協力出前講座などのJICA（関連団体含む）主催以外では、「職場等での活動内容を紹介」の回答(37％、148人)が最も多く、ついでシンポジウムやセミナー等での講演(23％、92人)が続いている。テレビ・ラジオや執筆活動など、メディアでの紹介も多数の回答があった。

◆ 小・中・高校における、「総合的な学習の時間」、「国際理解」等の授業で紹介されたケースは100件以上に及んだ。

◆ その他では、写真や衣装などの展示会の開催や、各地域で行われている国際交流イベントへの積極的な参加、留学生の受入れなど、多岐に渡る活動が挙げられた。

質問6： 上記の活動は、日本の市民があなたの任国や国際協力について理解や認識を高めるよい機会になっていると思いますか？

評　価　（評　点）		回答数
4	とても思う	132
3	ある程度思う	207
2	あまり思わない	22
1	全く思わない	5



＊「2．あまり思わない」「1.全く思わない」と回答した方にお聞きします。それはどうしてですか？

- 興味や関心を持っていない。興味を持つ人と、持たない人の両極端である。
- 一般的に認知されていないから、関心も薄く、理解されにくい。
- 隊員の視点と、日本の市民のそれとに、大きなギャップを感じる。
- 実際に行うことと、日本で思い描くことは異なる。生で感じないと認識を高めるのは至難の業だと感じたが、行うことに意味はあるとも思った。
- 来訪者が限られているうえ、プログラムにも問題があるように思う。
- 自分の体験を、「どれだけ上手く紹介できるか」は大きな要因。帰国後最低1回の報告会（興味のある人だけが来るのではない場。出前講座等）を取り入れてはどうか？

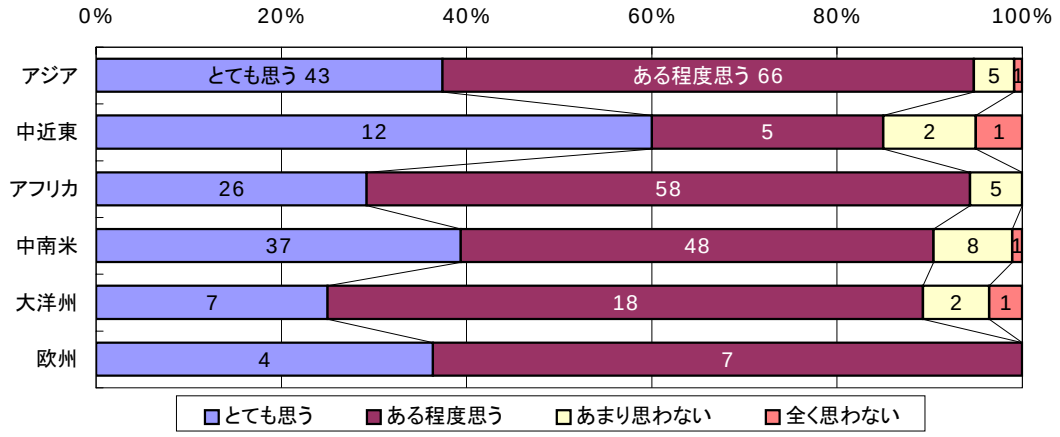
◆「とても思う」、「ある程度思う」を合わせると93％（337人）が、理解・認識を高める機会になっていると回答。国際協力を紹介する活動に対する意識が高いことがうかがえる。

◆「2.あまり思わない」、「1.全く思わない」の理由では、日本人の途上国への関心の薄さを挙げる一方、体験の伝え方（話し方）や、プログラム構成の不十分さ、機会のあり方まで幅広く意見が寄せられた。

＜抽出データ＞

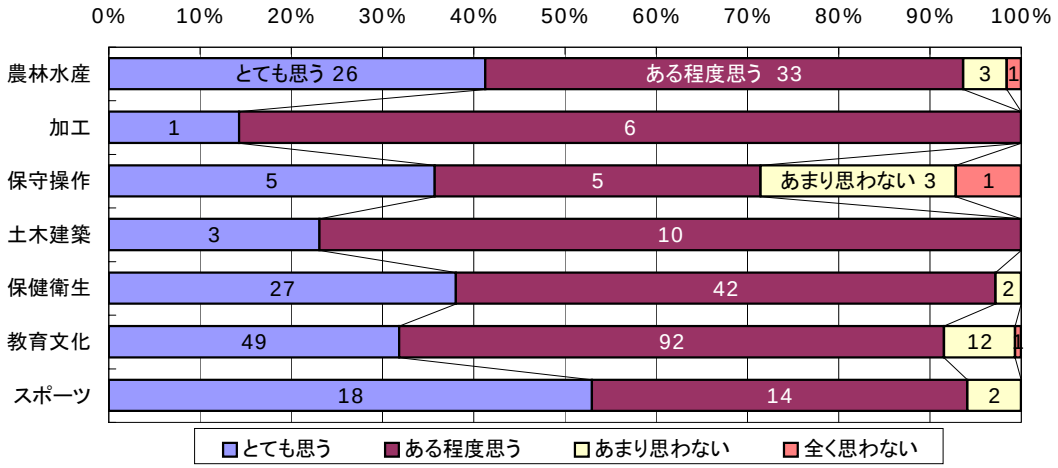
質問6a：上記の活動は、日本の市民があなたの任国や国際協力について理解や認識を高めるよい機会になっていると思いますか？

派遣地域別



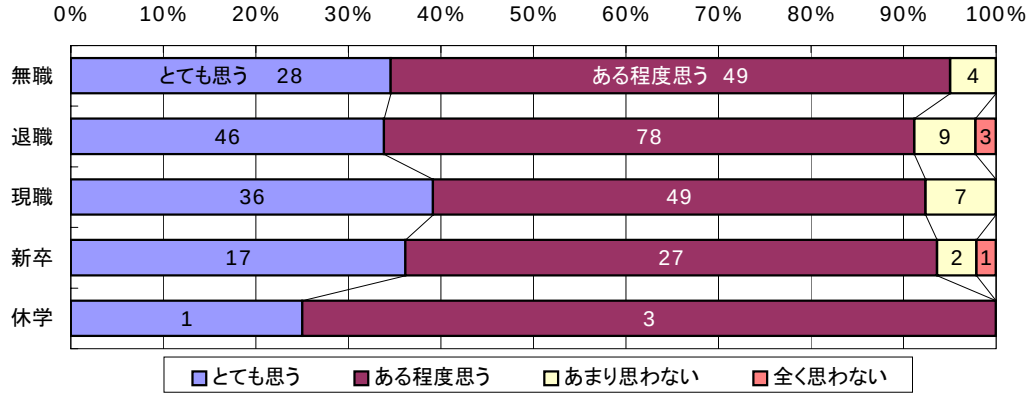
◆ どの地域においても、「とても思う」、「ある程度思う」を合わせると、80％を超える。

派遣職種別



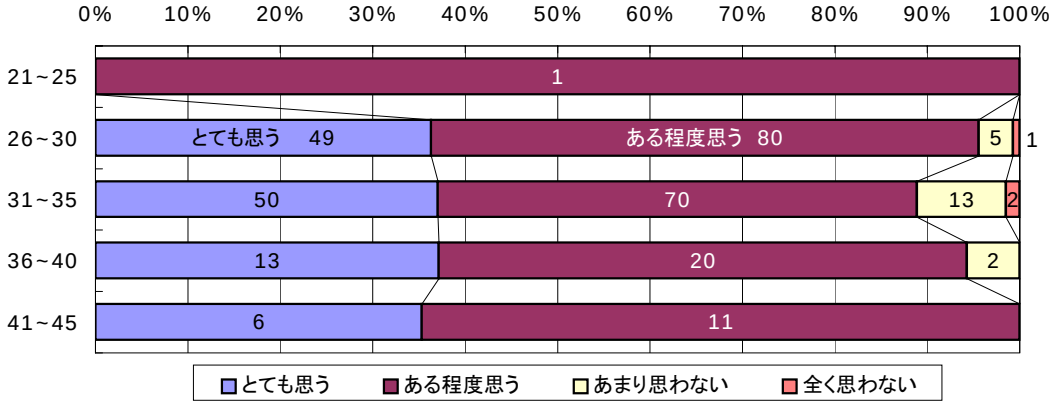
◆「保守操作」は、「あまり思わない」の比率が比較的高く、「とても思う」、「ある程度思う」の合計が80％を割っている。

参加形態別



◆　全参加形態で「とても思う」、「ある程度思う」が90%を超え、参加形態による違いは見られない。

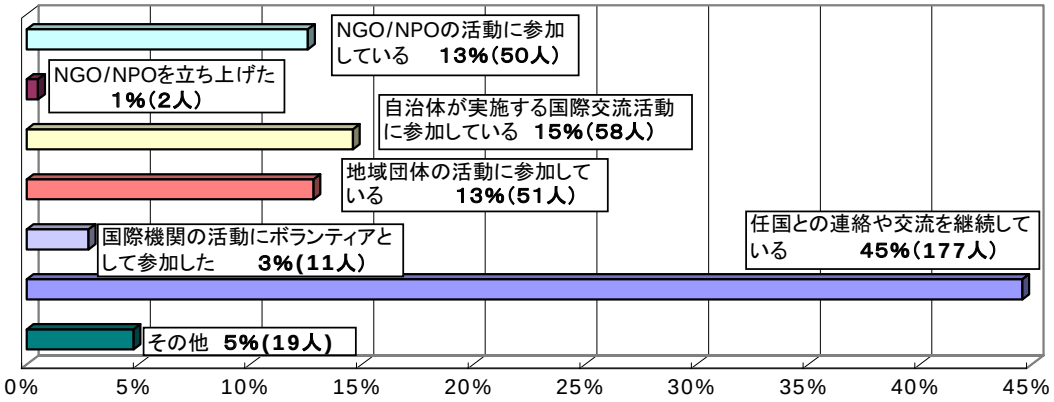
年齢別



◆「31～35歳」で、「あまり思わない」、「全く思わない」が10％超となり、他の年齢層と比べ高い結果となっている。

第Ⅲ部

質問7:　帰国後、以下の活動に参加、あるいは以下のような活動を行っていますか。(複数回答)



※100%＝397人（回答者総数）

＊その他(具体的に　)の記載内容

- OB会活動
- 大学で留学生のボランティアチューター・留学生の受入れ
- 青年招聘の日本での活動内容について協力
- 任意団体の理事として、中南米日系人との交流
- 内閣府の青年国際育成事業に参加　　など

◆ 何らかの活動を行った者は237人(60%)。

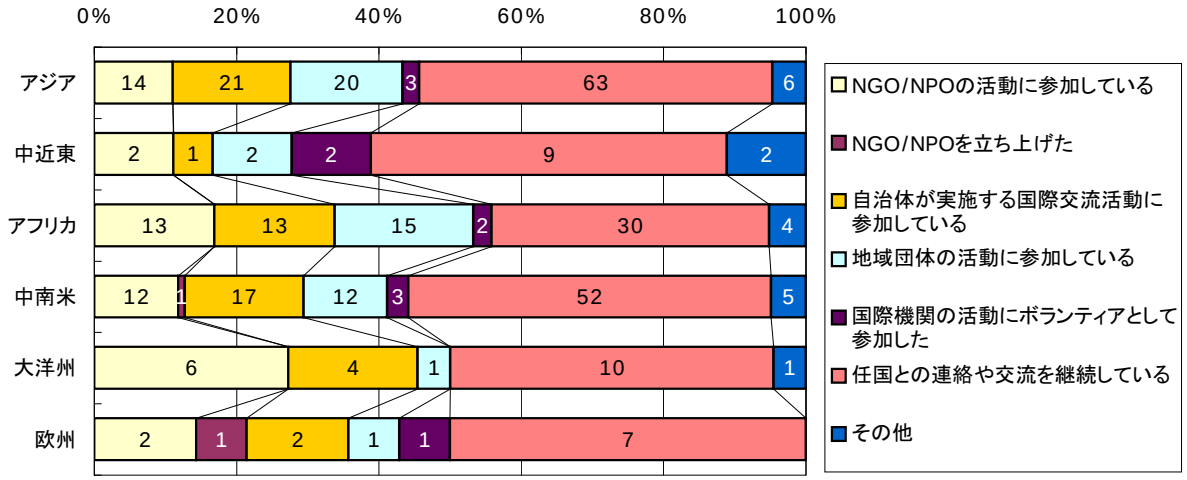
◆ 45%(177人)が、帰国後も「任国との連絡や交流を継続している」。以下、「自治体が実施する交流活動に参加している」15%(58人)、「地域団体の活動に参加している」13%(51人)「NGO/NPOの活動に参加している」13%(50人)が続く。

◆ 帰国後に何らかの形で、NGO/NPO活動に関わった者は、全体の14%(52人)であった。

＜抽出データ＞

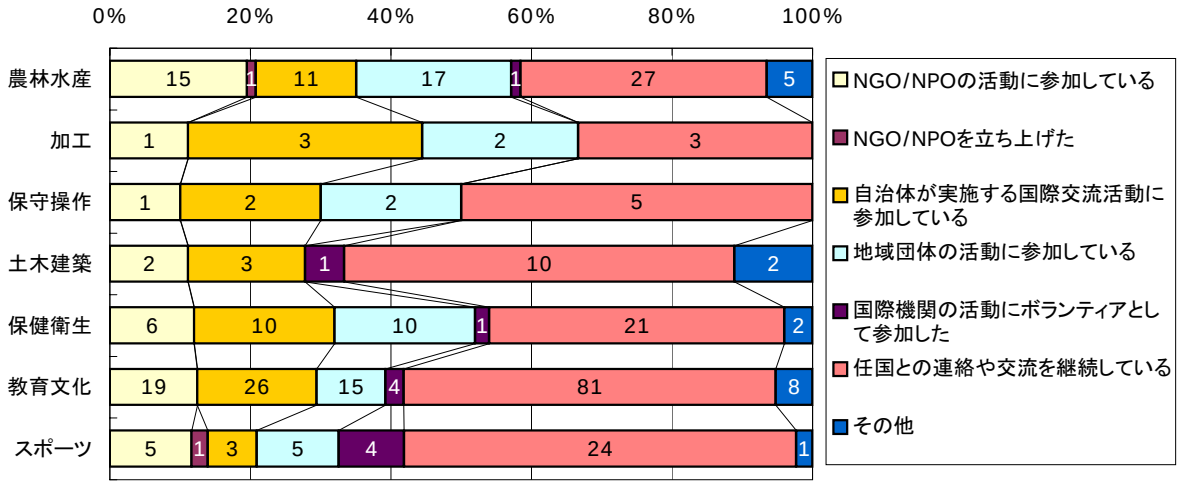
質問7:　帰国後、以下の活動に参加、あるいは以下のような活動を行っていますか。

派遣地域別



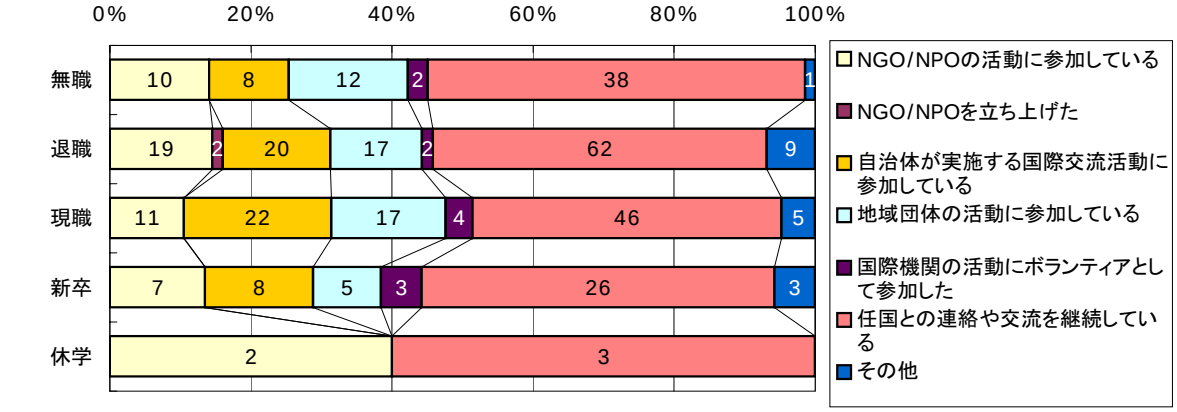
◆ 大洋州は、30%弱が「NGO/NPOの活動に参加している」と回答し、他地域に比べ高い。

派遣職種別



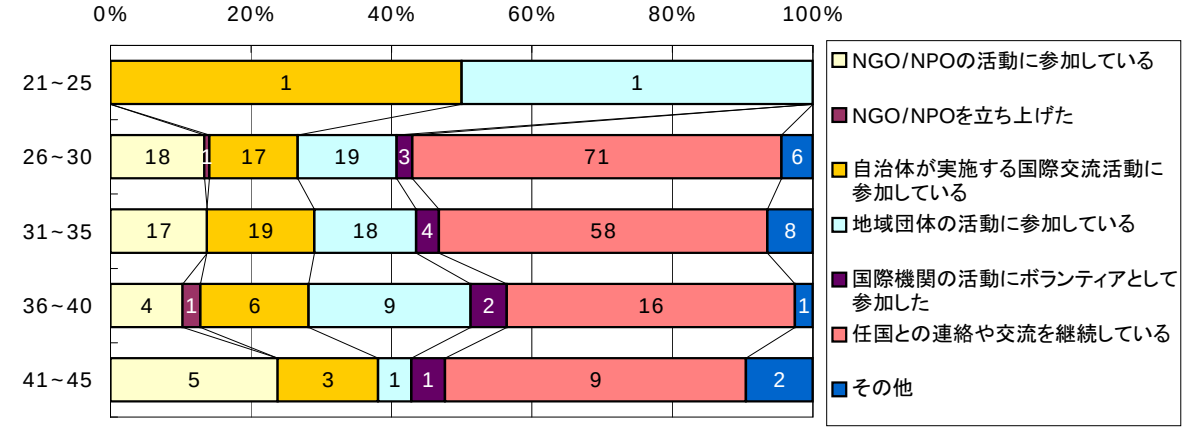
◆「農林水産」は、「NGO/NPOの活動に参加している」が約20％と、他の職種よりも高い。

参加形態別



◆「現職参加」は、「自治体が実施する国際交流活動に参加している」、「地域団体の活動に参加している」が、他に比べ高い割合を占めている。

年齢別



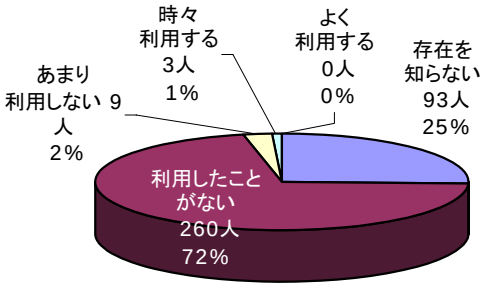
◆ 低年齢層の方が、「任国との連絡や交流を継続している」割合が高い。

質問８：JICAでは様々な帰国後の支援を実施していますが、以下について、当てはまる数字を記入してください。

1.NGO/NPOの立ち上げの支援

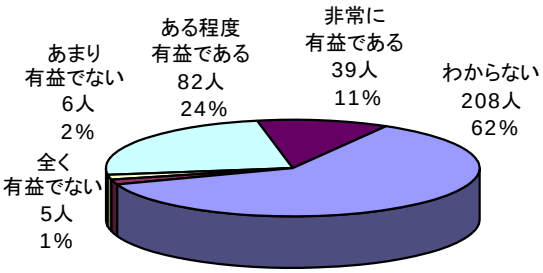
利　用　状　況

4	よく利用する	0
3	時々利用する	3
2	あまり利用しない	9
1	利用したことがない	260
0	存在を知らない	93



印　　象

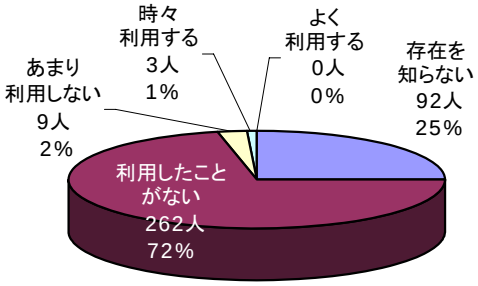
4	非常に有益である	39
3	ある程度有益である	82
2	あまり有益でない	6
1	全く有益でない	5
0	わからない	208



2.NGO/NPOでのインターンや実務経験を積む機会提供

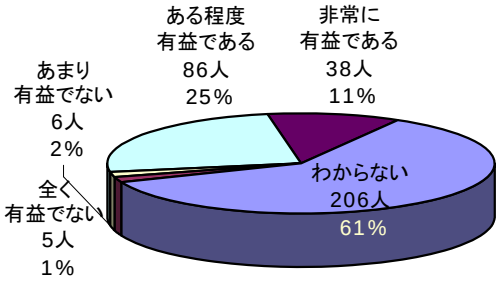
利　用　状　況

4	よく利用する	2
3	時々利用する	4
2	あまり利用しない	17
1	利用したことがない	259
0	存在を知らない	104



印　　象

4	非常に有益である	41
3	ある程度有益である	99
2	あまり有益でない	12
1	全く有益でない	11
0	わからない	205

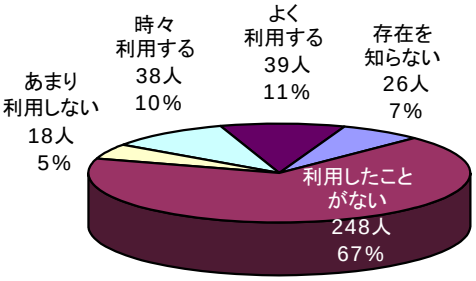


◆ 予算が少ないこともあり利用状況は悪いが、「非常に有益である」、「ある程度有益である」と考えている者は少なくない（36%、124人）

3.教育訓練手当、人材育成奨学金等の制度

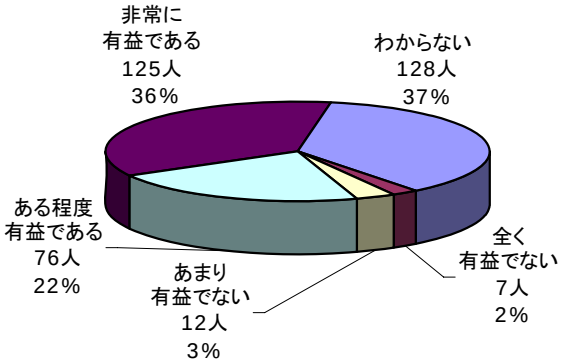
利　用　状　況

4	よく利用する	24
3	時々利用する	27
2	あまり利用しない	20
1	利用したことがない	273
0	存在を知らない	39



印　　象

4	非常に有益である	107
3	ある程度有益である	109
2	あまり有益でない	10
1	全く有益でない	10
0	わからない	132



◆ この制度も利用状況は悪いが、「非常に有益である」、「ある程度有益である」と考えている者は60%近くにのぼり、利用の意思は高い。

4.5　具体的な支援を記入

◆ その他の支援については回答がなかった。

◎その他、帰国隊員からのコメント

◆ キャリア形成には全くよい影響はなく、空白を作ったことはむしろマイナスに働いている。それは、ボランティア団体が悪いのではなく、日本の社会がそのようになっているからでしょう。しかし、人生観という意味では代え難いものを得ました。それは、前向きになったとか、強くなったとか、そういう言葉で表現されるものではありません。

◆ ボランティアとして日本語を教えています。JICAのスカラーシップで来ている学生も多くJICAの幅広い協力体制に共感しています。協力隊に参加しなければ、このボランティアをすることはなかったと思います。協力隊への参加によって、活動の場が広がり物事の見方も広がったことを自覚しています。

以上

平成17年度　帰国ボランティアアンケート調査結果について

（帰国後5～7年を経過したボランティア）

1．アンケート実施概要

(1) 対象者　：平成10～12年度に帰国した協力隊員　　2,632人

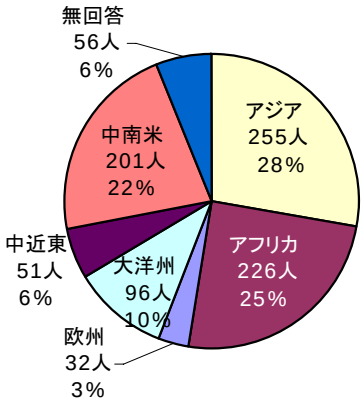
(2) 実施方法　：郵送による送付、及び回収。

(3) 実施期間　：発送　平成17年10月下旬　　回収　平成17年10月下旬～12月末日

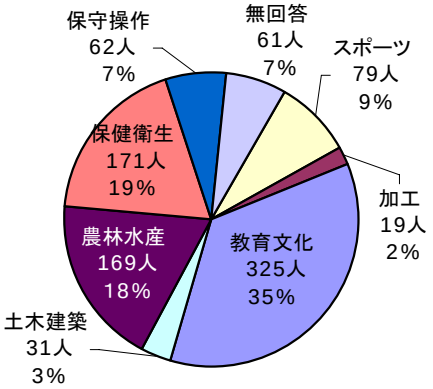
(4) 回収総数　：917通　(回収率34.8%)

アンケート回答者の内訳

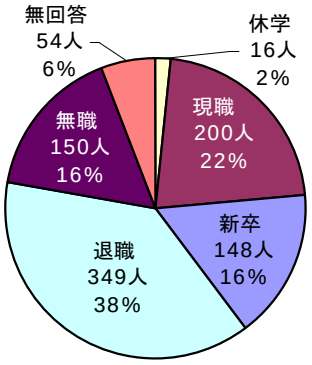
ボランティアの派遣地域



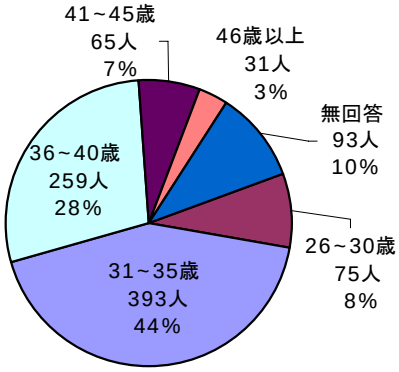
ボランティアの職種



ボランティアの参加形態



ボランティアの年齢層



2．調査結果概要

- ◆ 帰国後のキャリアパスについては、「民間企業」が43%（391人）で最多、次いで、「国家･地方公務員」が15%（140人）であった。
- ◆ キャリア形成への影響として、キャリアアップに「とても影響を与えた」、「影響を与えた」と60%(541人）が回答し、ボランティアへの参加が帰国後のキャリア形成に何らかのプラスの影響を与えていると言える。
- ◆ 帰国後、ボランティア経験や国際協力について紹介する活動は、「募集説明会や任国事情の講師」が最多（561人）であったが、「職場で活動内容を紹介」（311人）が続いた。その他にも、学校や地域、様々な機会で積極的な活動が行われていることがわかった。
- ◆ 帰国後、33%(301人)が「任国との連絡や交流を継続している」。また、14%(130人)が「NGO/NPOの活動に参加」しており、「NGO/NPOを立ち上げた」のは1%(13人)であった。

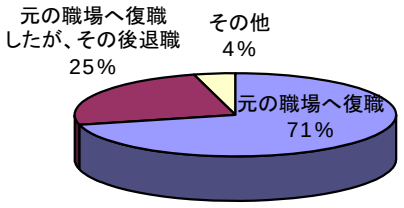
3. 調査結果

第Ⅰ部

※各質問においては、「無回答」を除いた数字を100%として計算した。
※回答数（グラフ中の数字を含む）の数字の単位は人。

質問1： 帰国後の進路について教えてください。

・現職参加だった方

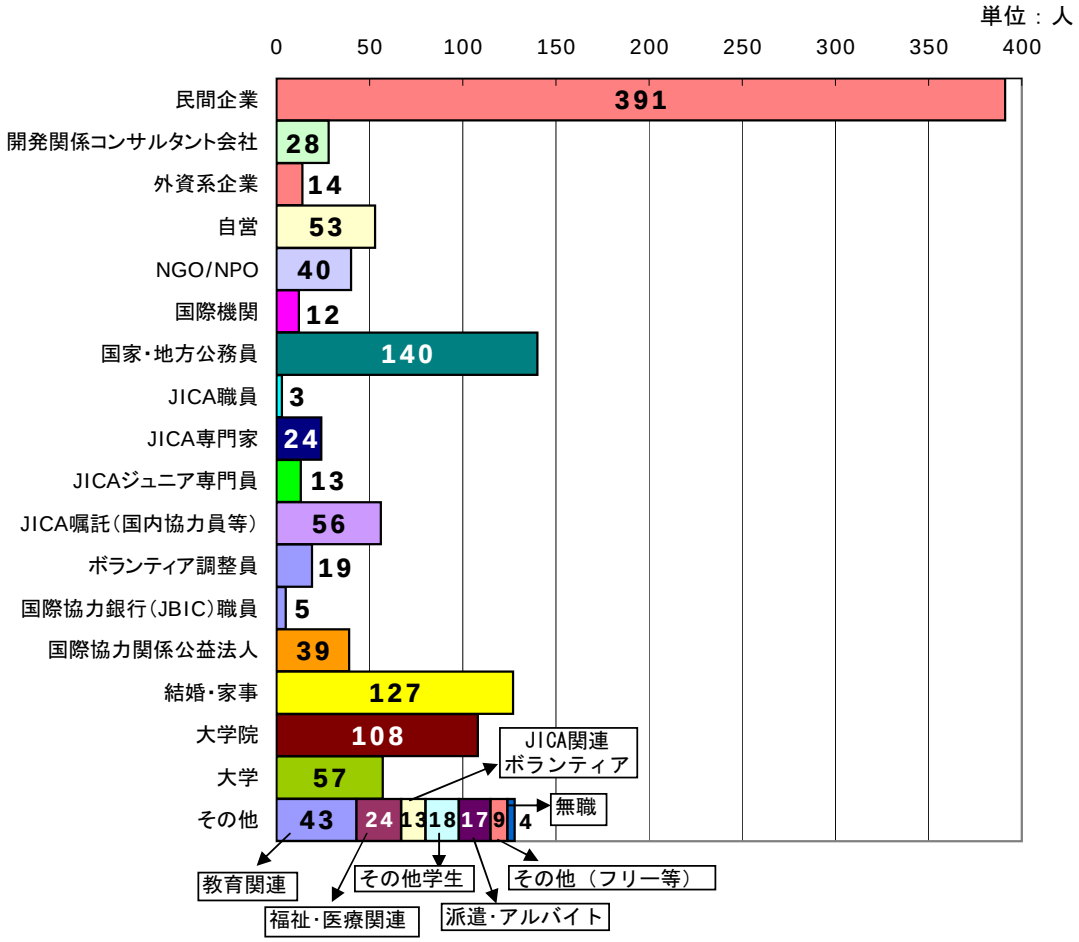


元の職場へ復職	155
元の所属先に復職したが、その後退職した	54
その他	9

◆ 回答者は218人（24%）。

◆ 現職参加者では、71%(155人)が帰国後も復職し、継続勤務をしているが、25%(54人)が復職後、退職している。

・現職参加でなかった方と現職参加だったがその後退職された方に、帰国から現在までのキャリアパスについて（複数回答）



◆ 回答者総数は917人。

◆ 「現職参加ではなかった方」と「現職参加だったがその後退職された方」の、帰国後のキャリアパスについては43%(391人)が「民間企業」へ就職。ついで、15%(140人)の「国家・地方公務員」であった。

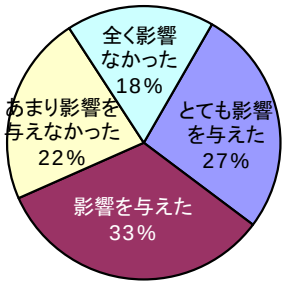
◆ 「大学院」、及び「大学」へは18%(165人)が進学（専門学校等は除く）。「JICA職員」や「JICA嘱託」を含むJICA関連への進路は13%(115人)。

◆ 「結婚・家事」については、14%(127人)。 その他14%(128人)のうち、40人(その他の34%)が講師、教職員などの教育関連の業種へ就職している。

質問2： ボランティアに参加したことは、あなたのキャリア形成に影響を与えましたか？

2-1．キャリアアップ

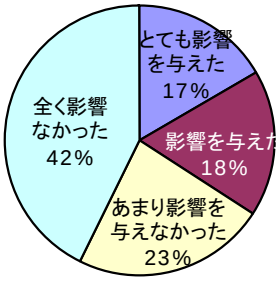
評　価（評　点）		回答数
4	とても影響を与えた	243
3	影響を与えた	298
2	あまり影響を与えなかった	202
1	全く影響なかった	159



◆「とても影響を与えた」、「影響を与えた」を合わせると60％(541人)。しかし反面、「キャリアダウン」に影響を与えたとの回答も見られる。

2-2．留学・進学

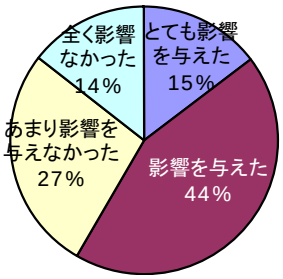
評　　価		回答数
4	とても影響を与えた	127
3	影響を与えた	134
2	あまり影響を与えなかった	175
1	全く影響なかった	327



◆ 35％（261人）が「とても影響を与えた」、「影響を与えた」と回答している。実際の進学者は165人。

2-3．他のボランティア活動への参加

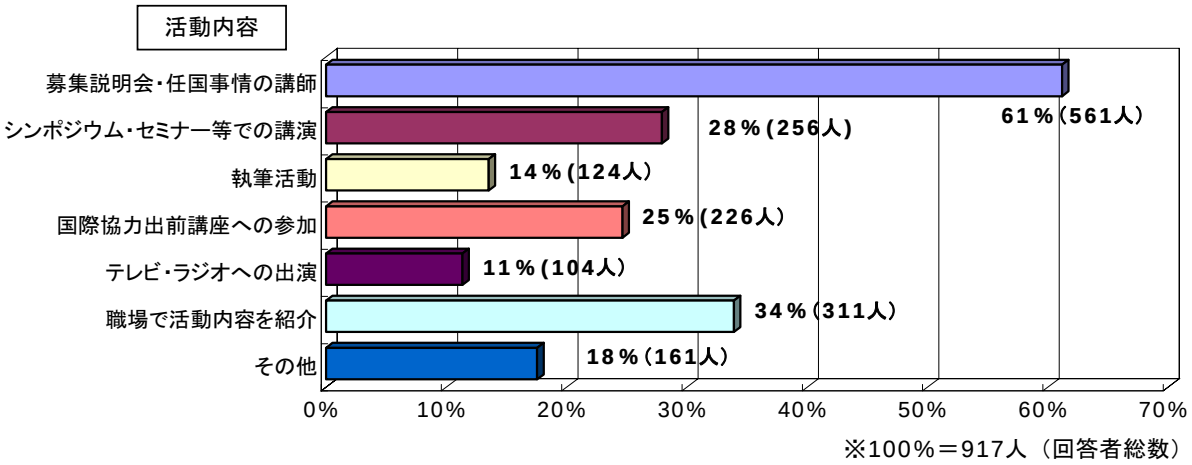
評　　価		回答数
4	とても影響を与えた	122
3	影響を与えた	356
2	あまり影響を与えなかった	224
1	全く影響なかった	119



◆「とても影響を与えた」、「影響を与えた」と59％(478人)が回答しており、帰国後のボランティア活動に少なからず影響を与えていることがうかがえる。

第Ⅱ部

質問3： 帰国後、ボランティア経験や任国、あるいは国際協力について紹介するような活動を実施しましたか？（複数回答）



《具体的な活動内容（記入のあった例）》

● 講演・活動紹介等の対象先
- ・大学・専門学校等　46
- ・小・中・高等学校　217
- ・その他団体・組織等　82

・授業（総合的な学習の時間等）
・ボーイスカウト・ガールスカウト
・教育関連（教職員、PTA等）
・地域団体（市民講座・勉強会等）
・ロータリークラブ
・職業に関わる研修会
・NGO/NPO　など

● 執筆活動（取材協力・寄稿等）
- ・専門誌、機関紙等　24
- ・新聞・自治体　20
- ・自治体広報　10
- ・HP等

● その他
- ・写真展や展覧会、トークショー等イベント開催
- ・国際交流イベントに参加
- ・スペイン語入門講座を開催
- ・留学生の受け入れ
- ・語学ボランティア
- ・派遣国の児童文学や昔話の翻訳・紹介

◆ 何らかの活動を実施した者は805人（88％）。

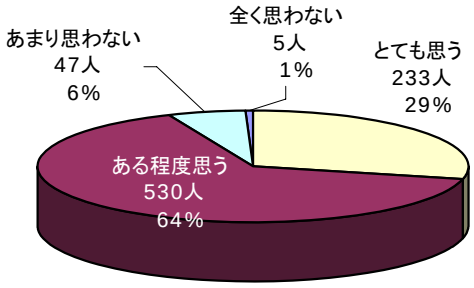
◆ 募集説明会や任国事情の講師、国際協力出前講座などのJICA（関連団体含む）主催以外では、「職場等での活動内容を紹介」の回答（34％、311人）が最も多く、シンポジウムやセミナー等での講演（28％、256人）が続いている。テレビ・ラジオや執筆活動など、メディアでの紹介も多数の回答があった。

◆ 小・中・高校における、「総合的な学習の時間」、「国際理解」等の授業で紹介されたケースは200件以上に及んだ。

◆ その他では、写真や衣装などの展示会の開催や、各地域で行われている国際交流イベントへの積極的な参加、留学生との交流・受入れなど、多岐に渡る活動が挙げられた。

質問4： 上記の活動は、日本の市民があなたの任国や国際協力について理解や認識を高めるよい機会になっていると思いますか？

評	価	回答数
4	とても思う	233
3	ある程度思う	530
2	あまり思わない	47
1	全く思わない	5



＊「2．あまり思わない」「1.全く思わない」と回答した方にお聞きします。
それはどうしてですか？

- 本当に興味や関心のある人は少ない。そうではない人との温度差が大きい。
- 実際に現地で関わらないと理解できないことがある。実感がわかない。
- 若年層の人は興味があっても知識や経験がないので共感や共有することは難しい
- 年齢に関係なく、外国に対して排他的、差別的思考を持つ人が思った以上に多く、一般市民より子供の教育から認識させた方がよい。
- 自分に説明するスキルが足りなく、興味を持たせるに至らない。説得力に欠ける。
- 良くも悪くも「知る機会」ではあるが理解しているかは疑問。身内でさえ理解させることは難しい。
- 興味を持って聞いている子はわずかで、質問もほとんどなかったが、数人でも後で話を聞きに来たり手紙をくれたのでよかった。

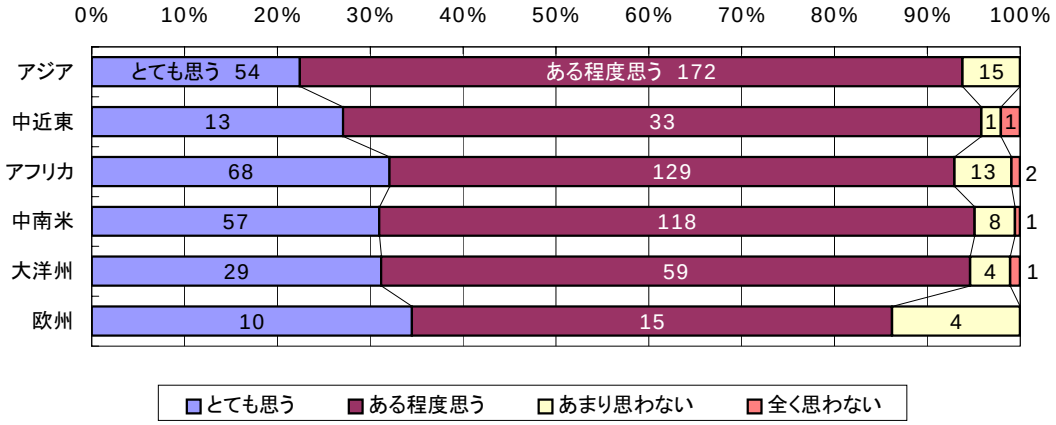
◆「とても思う」、「ある程度思う」を合わせると93％（763人）が理解・認識を高める機会になっていると回答。国際協力を紹介する活動に対する意識が高いことがうかがえる。

◆「2.あまり思わない」、「1.全く思わない」の理由では、日本人の途上国への関心の薄さを挙げる一方、体験の伝え方（話し方）や、プログラム構成の不十分さ、機会のあり方まで幅広く意見が寄せられた。

＜抽出データ＞

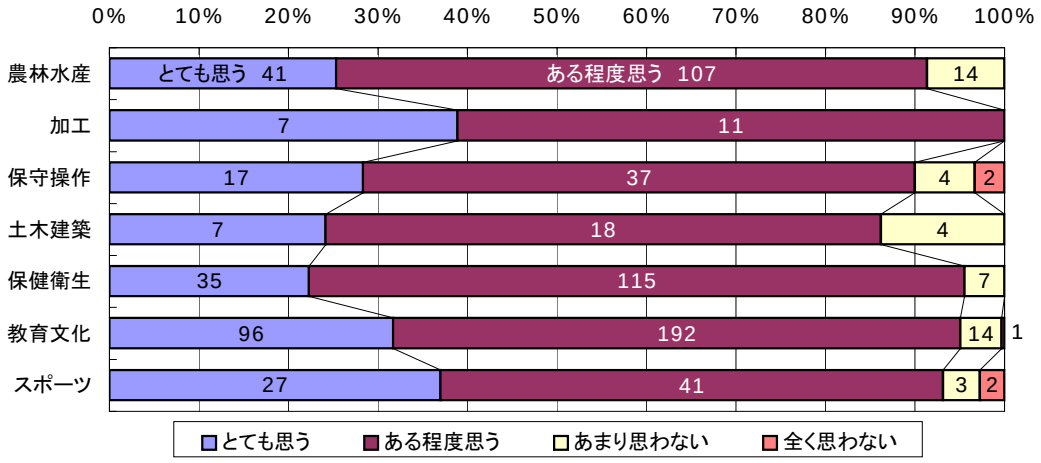
質問4： 上記の活動は、日本の市民があなたの任国や国際協力について理解や認識を高めるよい機会になっていると思いますか？

派遣地域別



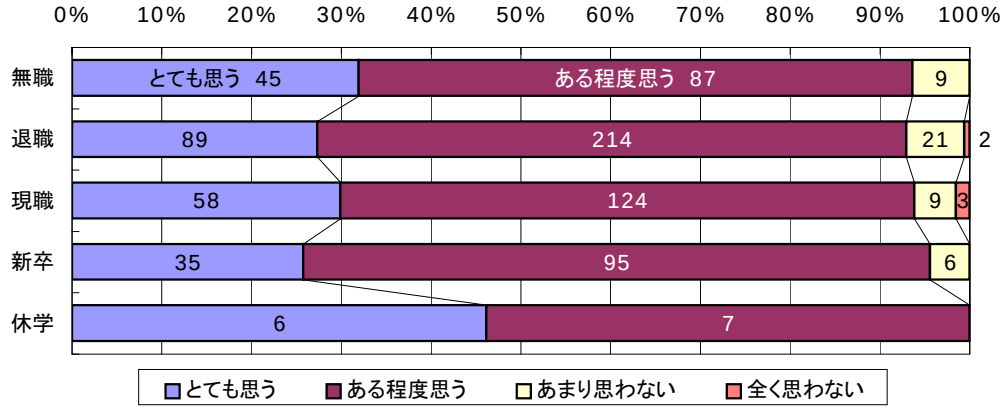
◆ どの地域においても、「とても思う」、「ある程度思う」を合わせると、80%を超える。

派遣職種別



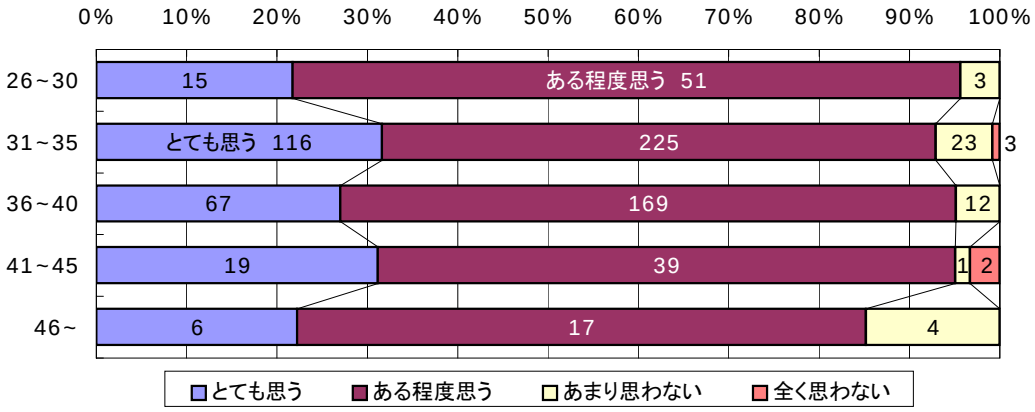
◆「土木建築」は、「あまり思わない」の比率が比較的高く、「とても思う」、「ある程度思う」の合計が90%を割っている。

参加形態別



◆ 全参加形態で、「とても思う」、「ある程度思う」が90%を超え、参加形態による違いは見られない。

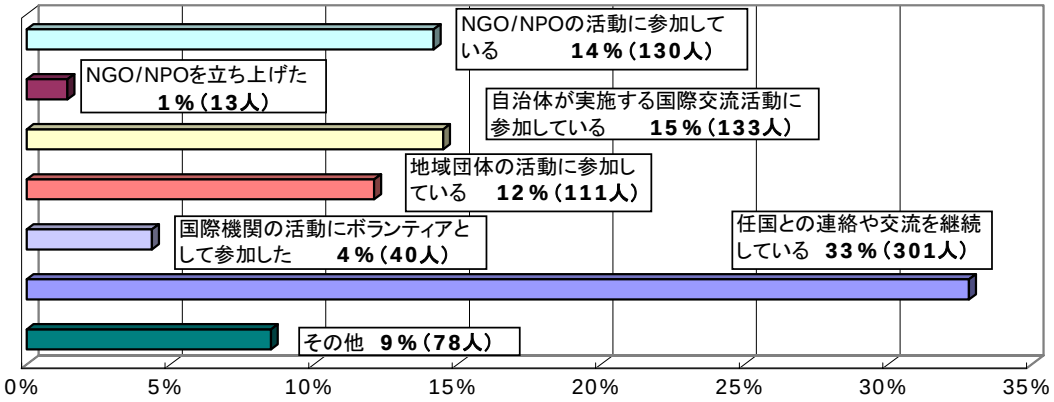
年齢別



◆「46歳以上」では、「あまり思わない」、「全く思わない」が15%超となり、他の年齢層と比べ高い結果となっている。

第Ⅲ部

質問5:　帰国後、以下の活動に参加、あるいは以下のような活動を行っていますか。(複数回答)



※100％＝917人（回答者総数）

＊その他(具体的に　)の記載内容

- OB会活動
- 国際交流に関わる職への就業
- 派遣国の農業技術の研究
- 子供向けサークル活動(英語で音楽教育、現地のメロディー･楽器を楽しむ)
- 通訳、在日外国人に日本語指導ボランティア　など

◆ 何らかの活動を実施した者は539人(59％)。

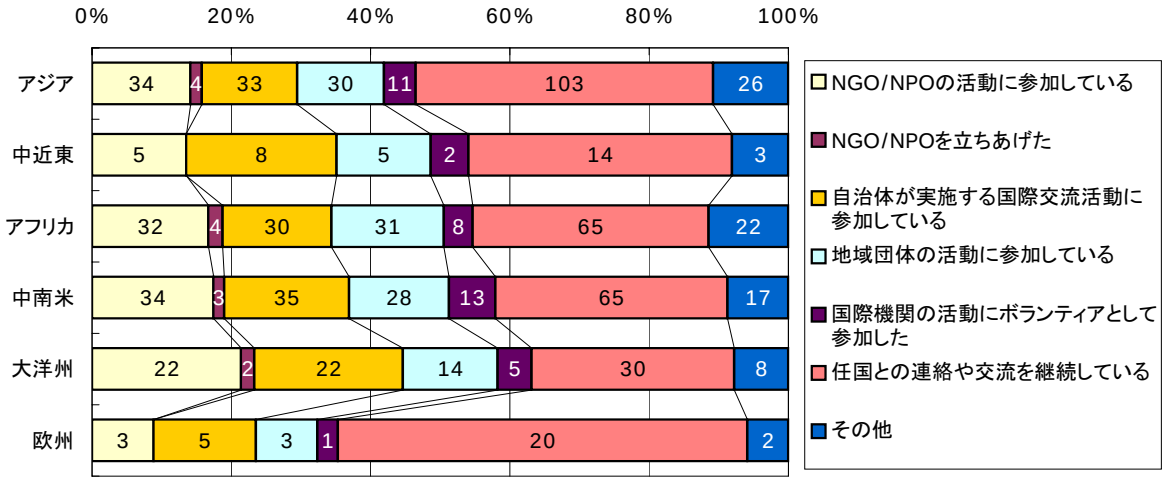
◆ 33％(301人)が、「任国との連絡や交流を継続している」。以下、「自治体が実施する交流活動に参加している」15％(133人)、「NGO/NPOの活動に参加している」14％(130人)、「地域団体の活動に参加している」12％(111人)が続く。

◆ 帰国後に何らかの形で、NGO/NPO活動に関わった者は、全体の15%(143人)であった。

＜抽出データ＞

質問5:　帰国後、以下の活動に参加、あるいは以下のような活動を行っていますか。

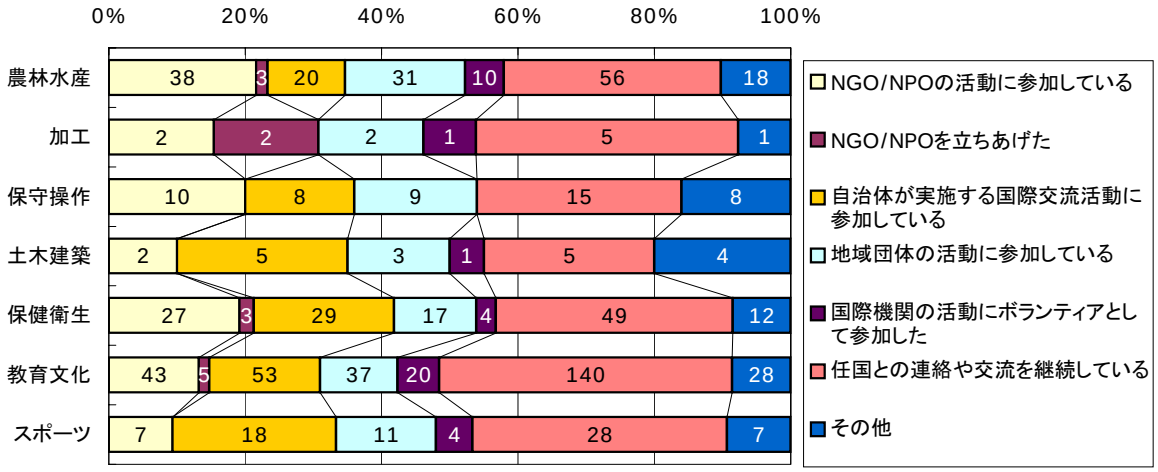
派遣地域別



◆ 大洋州は、20％超が「NGO/NPOの活動に参加している」と回答し、他地域に比べ高い。

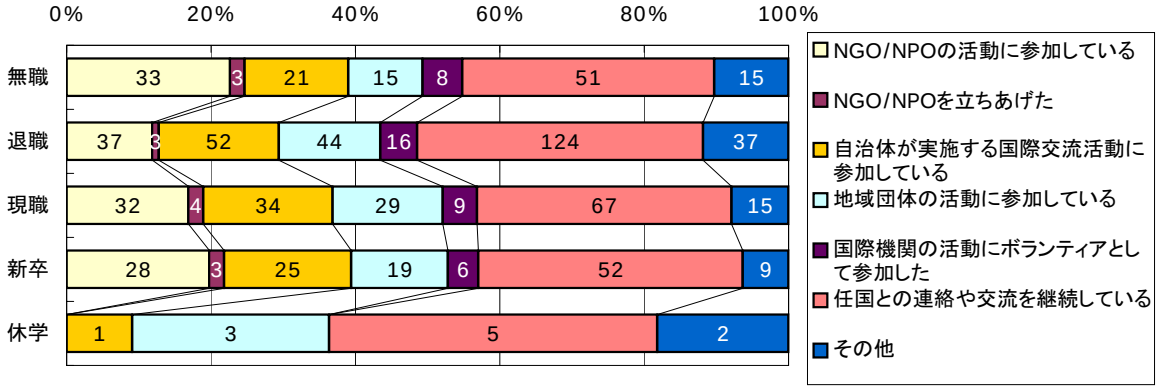
◆ 「NGO/NPOを立ち上げた」は、アジア、アフリカ、中南米、大洋州で見られる。

派遣職種別



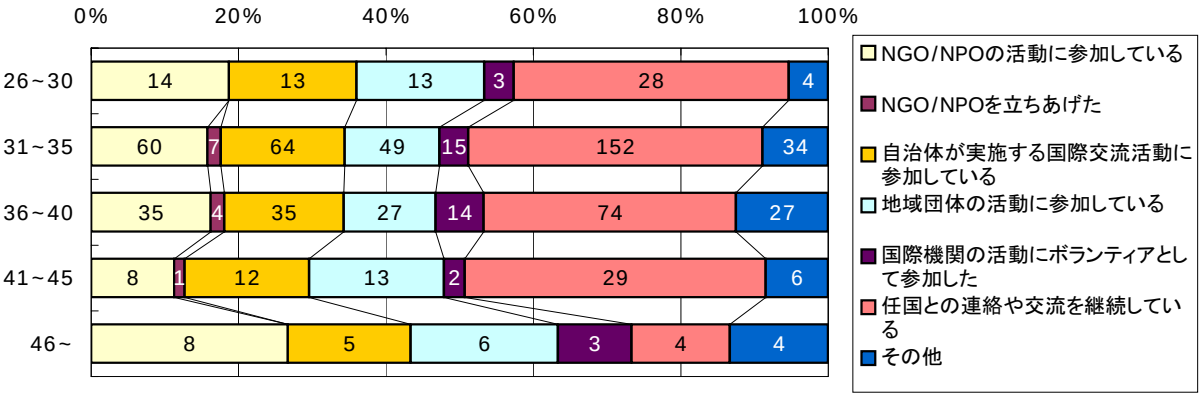
◆「農林水産」は、「NGO/NPOの活動に参加している」が20％超と、他の職種よりも高い。

参加形態別



◆「無職参加」は、「NGO/NPOの活動に参加している」が20％超で他に比べ高い割合を占めている。

年齢別



◆「46歳以上」は「NGO/NPOの活動に参加している」が他よりも高い。

◎ **その他、帰国ボランティアからのコメント**

- ◆ 国際協力やボランティア活動に参加したい気持ちはあるが、日々の生活（育児や仕事）に追われなかなかできないのが現状。落ち着いたら始めたい。
- ◆ 県や市の国際交流協会や教育委員会などともっと一緒に活動できればいいと思うが、「国際国流」の考え方にズレがあり、今一歩積極的に取り組めず残念に思っている。
- ◆ 福祉関係のボランティアやNPOに参加し、JICAではない組織で協力隊経験を活かすようにしている。そうでないと、いつまでも「身内」でしか通用しないボランティアスピリットにとどまってしまう。
- ◆ キャリアに影響はないが、自分自身にとって内面を豊かにし普通では体験できないことを学べた。参加してよかった！

以上